

# 箱 崎 13

—箱崎遺跡第21次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第705集

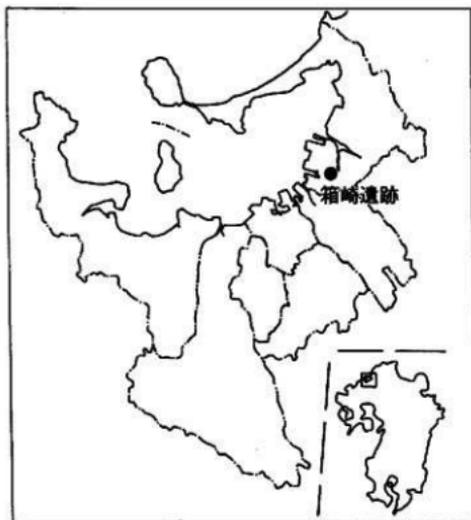


2002

福岡市教育委員会

HAKO      ZAKI  
箱      崎      13

—箱崎遺跡第21次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第705集



遺跡略号      調査番号  
HKZ-21      9978

2002

福岡市教育委員会



(1) SX456 (北から)



(2) SX153(左)・SX154(中)・SX456(右)出土銅鏡

## 序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は共同住宅建設に伴い調査を実施した箱崎遺跡第21次調査の成果を報告するものです。今回の調査では中世の集落や埋葬遺構を検出するとともに多数の輸入陶磁器が出土しました。これらは当時の箱崎地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、費用負担など多くのご協力を賜りましたダイア建設株式会社をはじめとする関係者の方々に對し、心から謝意を表します。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## 例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、東区箱崎1丁目2480番地内において発掘調査を実施した箱崎遺跡第21次調査の報告書である。
2. 本書で報告する調査の細目は以下のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
9 9 7 8	H K Z - 21	545㎡(2面)	2000.3.29～6.26

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は榎本、阿部泰之、上田龍児(福岡大学人文学部学生)、渡邊誠・西田絵美(九州大学文学部学生)、福田匡朗、井上加代子、撫養久美子が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は榎本が行った。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は平川敬治が行った。
7. 本書に掲載した押図の製図は榎本、上田、渡邊、西田が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°40′西偏する。
9. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、埋葬遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
10. 本書で記述する輸入磁器の分類、説明については以下の文献を参考とした。  
 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」  
 『九州歴史資料館研究論集 4』1978年  
 太宰府市教育委員会「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』1983年
11. 遺物番号は通し番号とし、押図と図版の遺物番号は一致する。
12. 今回の調査で出土した金属器(銅鏡、銅銭の一部)の保存科学処理およびX線遺物写真撮影は福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎、片多雅樹が行った。
13. 本書に関わる記録・遺物等の資料は同埋蔵文化財センターに保管される予定である。
14. 本書の執筆は付論を除いて榎本が行った。
15. 付論として人骨(九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋孝博)および青銅製品の保存科学的調査(同埋蔵文化財)センター 比佐陽一郎、片多雅樹)の分析報告を頂き、今回掲載することができた。
16. 本書の編集は榎本が行った。

# 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	6
1. 調査の概要と順序	6
2. 遺構と遺物	10
1) 掘立柱建物(SB)	10
2) 井戸(SE)	12
3) 土坑(SK)	24
4) 溝(SD)	46
5) 埋葬遺構(SX)	47
6) その他の遺物	56
IV. 結語	60
付 論	
1 福岡市箱崎遺跡第20次・21次調査出土人骨 (九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋 孝博)	61
2 箱崎遺跡第21次調査出土青銅製品の保存科学的調査について (福岡市埋蔵文化財センター 比佐 陽一郎・片多 雅樹)	67

## 挿図目次

第1図	箱崎遺跡位置図(1/25,000) .....	3
第2図	箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000) .....	5
第3図	第21次調査区位置図(1/1,000) .....	6
第4図	調査区東壁土層実測図(1/50) .....	7
第5図	第1面遺構配置図(1/150) .....	8
第6図	第2面遺構配置図(1/150) .....	9
第7図	SB461・462・463実測図(1/80)およびSB461・462出土遺物実測図(1/3) .....	11
第8図	SE006・351実測図(1/40) .....	12
第9図	SE006・351出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	13
第10図	SE362実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	14
第11図	SE363実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3) .....	15
第12図	SE152実測図(1/40) .....	16
第13図	SE152出土遺物実測図(1/3) .....	17
第14図	SE451実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3) .....	18
第15図	SE452実測図(1/40) .....	19
第16図	SE452出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	20
第17図	SE455実測図(1/40) .....	21
第18図	SE455出土遺物実測図(1/3、1/4) .....	22
第19図	SE458・459・460実測図(1/40) .....	23
第20図	SE458・459・460出土遺物実測図(1/1、1/3) .....	24
第21図	SK002・003・004・005実測図(1/40) .....	25
第22図	SK002出土遺物実測図(1)(1/3、1/4) .....	26
第23図	SK002出土遺物実測図(2)・SK003出土遺物実測図(1/3、1/4) .....	27
第24図	SK005出土遺物実測図(1/3、1/4) .....	28
第25図	SK090・125・352・354実測図(1/40) .....	29
第26図	SK090・125・352・354出土遺物実測図(1/3) .....	31
第27図	SK355・356・358・359・373・374実測図(1/40) .....	32
第28図	SK355出土遺物実測図(1/3、1/4) .....	33
第29図	SK356・358・359・373・374出土遺物実測図(1/1、1/3、1/4) .....	34
第30図	SK386・396・417実測図(1/40) .....	36
第31図	SK386・396・417出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	37
第32図	SK151・155・156・157実測図(1/40) .....	38
第33図	SK151・155出土遺物実測図(1/3) .....	39
第34図	SK156・157出土遺物実測図(1/3、1/4) .....	40
第35図	SK158・159・160・161・162・163実測図(1/40) .....	41
第36図	SK158・159・160・161出土遺物実測図(1/3) .....	43
第37図	SK538・549・555・600・621実測図(1/40) .....	44
第38図	SK162・163・538・549・555出土遺物実測図(1/3) .....	45

第39図 SK600・621出土遺物実測図(1/3) .....	46
第40図 SD164実測図(1/20、1/40)および出土遺物実測図(1/3) .....	47
第41図 SX153実測図(1/30)および出土遺物実測図(1)(1/2、1/3) .....	48
第42図 SX153出土遺物実測図(2)(1/2) .....	49
第43図 SX154実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/1、1/2、1/3) .....	50
第44図 SX165実測図(1/30)および出土遺物実測図(1)(1/1、1/2、1/3) .....	51
第45図 SX165出土遺物実測図(2)(1/1) .....	52
第46図 SX456実測図(1/30)および出土遺物実測図(1)(1/2、1/3) .....	53
第47図 SX456出土遺物実測図(2)(1/1、1/2) .....	54
第48図 SX457実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	55
第49図 ビット出土遺物実測図(1)(1/1、1/3、1/4) .....	57
第50図 ビット出土遺物実測図(2)(1/3、1/4) .....	58
第51図 包含層出土遺物実測図(1/1、1/2、1/3) .....	59

## 表目次

第1表 箱崎遺跡調査一覧表 .....	4
---------------------	---

## 図版目次

- |      |                      |                       |
|------|----------------------|-----------------------|
| 巻頭図版 | (1) SX456(北から)       | (2) SX153・154・456出土銅鏡 |
| 図版1  | (1) 1面西側全景(北から)      | (2) 1面東側全景(北西から)      |
| 図版2  | (1) 2面西側全景(北から)      | (2) 2面東側全景(北西から)      |
| 図版3  | (1) SE006(北西から)      | (2) SE362(北から)        |
|      | (3) SE152(南東から)      | (4) SE152井筒(南から)      |
|      | (5) SE452(南東から)      | (6) SE455(南東から)       |
| 図版4  | (1) SE459(南東から)      | (2) SE460(西から)        |
|      | (3) SK002(北西から)      | (4) SK003(北東から)       |
|      | (5) SK005(南東から)      | (6) SK352(北東から)       |
| 図版5  | (1) SK354(北東から)      | (2) SK355(南西から)       |
|      | (3) SK356(北西から)      | (4) SK358土層(北西から)     |
|      | (5) SK151(南から)       | (6) SK159(北西から)       |
| 図版6  | (1) SD164(北西から)      | (2) SX153(南から)        |
|      | (3) SX153(西から)       | (4) SX153銅鏡出土状況(西から)  |
|      | (5) SX154(南西から)      | (6) SX154銅鏡出土状況(南西から) |
| 図版7  | (1) SX165(北から)       | (2) SX165(東から)        |
|      | (3) SX165遺物出土状況(北から) | (4) SX165人骨検出状況(北から)  |
|      | (5) SX165人骨検出状況(北から) | (6) SX165人骨検出状況(北から)  |
| 図版8  | (1) SX456(北から)       | (2) SX456遺物出土状況(東から)  |
|      | (3) SX456銅鏡出土状況(南から) | (4) SX456銅鏡出土状況(東から)  |
|      | (5) SX457(南西から)      | (6) 調査区北側周辺風景(南から)    |
| 図版9  | 出土遺物Ⅰ                |                       |
| 図版10 | 出土遺物Ⅱ                |                       |

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成11(1999)年12月7日付けで、株式会社齊藤政雄建築事務所より福岡市教育委員会宛てに東区箱崎1丁目2480番地(面積: 1,147.27㎡)における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号: 11-2-732)。

これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡(分布地図番号: 箱崎34-2639、遺跡略号: HKZ)に含まれていることから平成11年12月21日に試掘調査を実施し、土坑・ピット等を確認した。その後、事業主体がダイア建設株式会社となり、この試掘調査成果をもとに両者で協議を行なった。その結果、申請地内の共同住宅建物部分664㎡については建築工事に伴い遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。

その後、委託契約を締結し、平成12(2000)年3月より発掘調査(調査番号: 9978)、平成13(2001)年度に資料整理・調査報告書作成を行なうこととした。

### 2. 調査の組織

**調査委託:** ダイア建設株式会社九州支店

**調査主体:** 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

**調査総括:** 埋蔵文化財課長 山崎純男

同課調査第2係長 力武卓治

**調査庶務:** 同部文化財整備課 谷口真由美(前任) 御手洗清(現任)

**事前審査:** 同課事前審査係長 田中壽夫

同係主任文化財主事 杉山富雄(前任; 試掘調査担当) 大庭康時(現任)

同係文化財主事 加藤隆也(前任; 試掘調査担当) 大塚紀宜(現任)

**調査担当:** 同課調査第2係文化財主事 榎本義嗣(現 同部文化財整備課整備係文化財主事)

**調査作業:** 金子國雄 清田厚巳 熊本義徳 小林義徳 坂田武 関哲也 米倉國弘 石橋テル子

金子澄子 唐島栄子 草場恵子 小林スエ子 酒井康恵 坂田ミネ 杉村百合子

田崎アヤ子 辻美佐江 永松トミ子 吉村智子

**整理作業:** 亀井律子 西島信枝 松尾真澄 小林由美 (中村学園大学学生)

なお、発掘調査から報告書作成に至るまでダイア建設株式会社九州支店をはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

## II. 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地している。この砂丘は今回報告する東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至る。この古砂丘の形成時期については少なくとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。これらの砂丘は鞍部や旧河道により画されるものと考えられ、それぞれの微高地上には、第1図に示した範囲で現在までのところ、北側から箱崎遺跡、吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、博多遺跡群が知られている。

本遺跡はこの砂丘の北端部に位置し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に画される。この東側にはかつて「宮崎ノ津」と呼ばれた入り江が博多湾から流入しており、後述する宮崎宮の私港として利用されていた。第2図は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定した図を現況図に重ねたものである。なお、データが不足するエリアについては現況の標高差を参考とした。

これに拠ると砂丘尾根線の北端は第10次調査付近にあるものと推定される。遺跡北東端部で実施された同調査は東西方向に尾根線を分断しており、調査区のほぼ中央に標高2.8mの緩いピークが認められる。この尾根は第6次調査区付近から南西方向に延び、第7次調査区付近からやや東側に振れて、第2次調査区付近まではほぼ南北方向に延伸するものと考えられる。なお、宮崎宮本殿の南側には標高約3.5mを測る緩いピークが認められる。よって砂丘尾根は従来推定されていた通称「大学通り」に沿うものではなく、遺跡南半部では東側に大きく振れ、砂丘の西側には広い緩斜面が形成されていたものと考えられる。また、近年では遺跡南側の調査が進み、遺跡南東部の第26次調査北側調査区から遺跡南西部の第27次調査区付近には東西方向の浅い谷が貫入し、砂丘鞍部を形成していたものと推定される。また、その鞍部を挟んだ南東側の第22次南側調査区および第26次南側調査区付近には標高約3.5mを測る高まりが認められ、その尾根は更に南側に延伸するものと考えられる。ただし、その東側は後述する様に河川による侵食が進み、砂丘東側斜面は殆ど認められない。また現在のところ、砂丘南西端部の微地形は調査例が少なく不明瞭である。

図中の破線は試掘調査における遺跡の有無によって遺跡範囲を推定したもので、西側は標高2mの等高線がその西限をほぼ示している。東端部では遺跡東側を北流する宇美川によって砂丘端が開析され、崖面を形成し、その東側では水性の堆積物が顕著に認められる。なお、第10次調査東端部ではその一部が検出されている。また、第8次調査の北側では試掘調査によって、時期不詳ながら杭列が確認されている。最近の調査では後述するが、宮崎宮東側の第22次・26次調査において10世紀代の遺構が確認されており、先に述べた、砂丘鞍部の在り方を勘察すると前述した港湾施設がその東側に存在する可能性が示唆される。また、遺跡南北端部はデータの不足により推測にとどまるが、先述した様に南側は鞍部を挟み、更に遺跡範囲が南に拡大する可能性が高い。該地におけるより詳細な旧地形の解明は今後の調査課題の一つといえよう。

この遺跡の発展の契機となった歴史的事象としては宮崎宮の創建をまず挙げることができる。延喜21年(921)、大宰府観世音寺巫女に八幡大菩薩の託宣があり、延長元年(923)に徳波郡大分宮を遷座、創建したと伝えられる。これは新羅来寇を防ぎ、対外貿易の拠点としての発展を祈念したものと考えられる。その後保延6年(1140)には香椎宮とともに大宰府の府額となる。仁平元年(1151)には大宰府検非違所の官人が軍兵を率いて博多とともに宋人追捕をおこなった際に、宮崎宮に乱入している。文永11年(1274)の元寇の際には宮崎宮は焼失し、以後も数度の火災に遭っている。なお、元の再度の



第1圖 箱崎遺跡位置圖 (1/25,000)

襲来に備え、建治2年(1276)には元寇防壁が箱崎地区の海岸線に薩摩国によって築かれる。また、韓国新安沖で発見された14世紀前半の沈没船からは「宮崎宮」銘の木簡が出土しており、該期の日本における大陸交易の基地の一つとして位置付けられる。

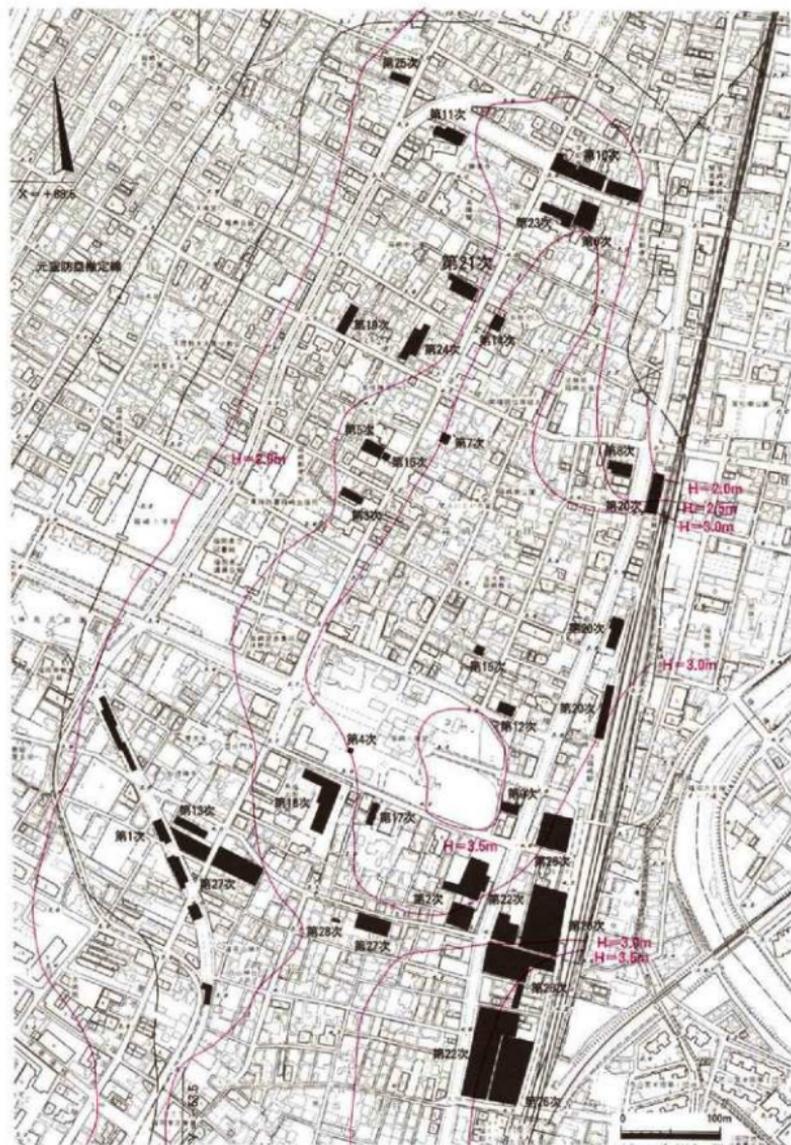
箱崎遺跡では現在までに28次の調査が実施され(第1表・第2図)、その時期的消長や遺跡内容が判明しつつある。これまでに最も古く位置付けられる遺物としては第6次調査出土の磨製石斧がある。その形態から縄文時代晩期から弥生時代初期の所産と考えられるが、中世前半期の土坑から出土している。第18次調査においては同様に中世遺構に混入し、弥生時代中期の土器片が確認されている。今後の調査においては、稀少であろうが、該期の遺構が確認される可能性がある。古墳時代では第8次・20次・22次・26次において竪穴住居をはじめとする遺構が検出されている。第8次調査では前期の良好な一括遺物が出土している。また、第10次・15次においては該期の遺物の確認例がある。これらは前期を主体とするが、後期の遺構・遺物も散見される。なお、いずれも推定砂丘尾根から陸側の東側緩斜面上に立地する調査区からの検出であり、比較的安定した自然環境を選択した集落経営が看取される。その後は奈良時代の遺物が第10次調査において近世井戸から出土した例を除き、数世紀の断絶が認められる。宮崎宮創建時の10世紀代の遺構は同宮の南東側に近接する第2次・22次・26次調査区において確認されている。11世紀後半になって遺跡内に該期の遺構が第2次・9次・12次・22次・26次等において散見され、これらは尾根線およびやや東側に下った緩斜面上に立地する。井戸等の生活遺構の存在から中世集落形成の端緒として指摘される。12世紀中頃からは第3次・5次・17次・18次、本報告第21次調査例等が示す様に西側緩斜面の利用が開始され始め、12世紀後半には遺跡の広範囲に集落が展開する。13世紀以降もほぼ全域に集落が確認されているが、海側の西側斜面を積極的に生活の場として活用している。第11次・14次・24次、本報告第21次調査では重層的な調査が実施され、包含層上面で13世紀から14世紀、下面において12世紀から13世紀の遺構が検出されている。中世後半期においても各所で遺構が確認されているが、前半期に比してやや少数である。第13次調査では短冊形の地刺を示す遺構分布が看取され、当時の町屋構造を示す好例である。

<参考文献>

- ・小林 茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会 1998年
- ・川添 昭二編『よみがえる中世Ⅰ 東アジアの国際都市 博多』平凡社 1988年

調査次数	所在(地)	調査年度	主な遺物の時期	参考文献
第1次	馬出5丁目内	1983	12世紀後半～15世紀	市報第93集(1986)
第2次	南橋1丁目18-30外	1986	10世紀後半～15世紀	市報第93集(1987)
第3次	南橋1丁目2781-1・4	1989	12世紀中頃～15世紀	市報第98集(1991)
第4次	南橋1丁目2781	1989	11世紀	市報第98集(1991)
第5次	南橋1丁目285-27	1991	12世紀～15世紀	市報第278集(1992)
第6次	南橋3丁目31	1994	2世紀後半～13世紀	市報第459集(1996)
第7次	南橋1丁目275外	1994	12世紀前半～13世紀	市報第459集(1996)
第8次	南橋1丁目274外	1996	古墳時代前期、12世紀中頃～13世紀	市報第501集(1999)
第9次	南橋1丁目1955-1	1996	11世紀～13世紀	市報第501集(1999)
第10次	南橋3丁目7城西	1996	12世紀前半～13世紀	市報第551集(1998)
第11次	南橋3丁目3266-1外	1997	12世紀後半～13世紀	市報第592集(1999)
第12次	南橋1丁目2606-3-1	1997	11世紀～15世紀	表紙1
第13次	馬出5丁目520-521	1997	15世紀	市報第592集(1999)
第14次	南橋1丁目28 15	1998	12世紀後半～14世紀前半	市報第616集(2000)
第15次	南橋1丁目2815	1999	11世紀～13世紀	表紙1
第16次	南橋1丁目2722	1999	11世紀～14世紀	市報第703集(2002)
第17次	南橋1丁目20-19	1998	12世紀中頃～17世紀	市報第703集(2002)
第18次	馬出5丁目470	1999	12世紀中頃～16世紀	市報第703集(2002)
第19次	南橋1丁目2945-1	1999	12世紀後半～14世紀	市報第699集(2001)
第20次	南橋1丁目4・5馬出	1999	古墳時代前期・前期、11世紀後半～12世紀	表紙1
第21次	南橋1丁目2480	2000	12世紀中頃～14世紀	本誌
第22次	馬出5丁目1馬出外	2000	古墳時代前期、19世紀～5世紀	表紙1
第23次	南橋3丁目2424	2000	12世紀～17世紀	表紙1
第24次	南橋1丁目2511-1外	2000	12世紀後半～14世紀	表紙1
第25次	南橋2丁目16馬出内	2001	15世紀～14世紀	表紙1
第26次	南橋1丁目1馬出外	2001	古墳時代前期、10世紀～15世紀	表紙1
第27次	馬出5丁目24馬出外	2001	11世紀後半～15世紀	表紙1
第28次	馬出5丁目24-8	2001	15～16世紀	表紙1

第1表 箱崎遺跡調査一覧表



第2图 箱崎遺跡調査区位置图 (1/5,000)

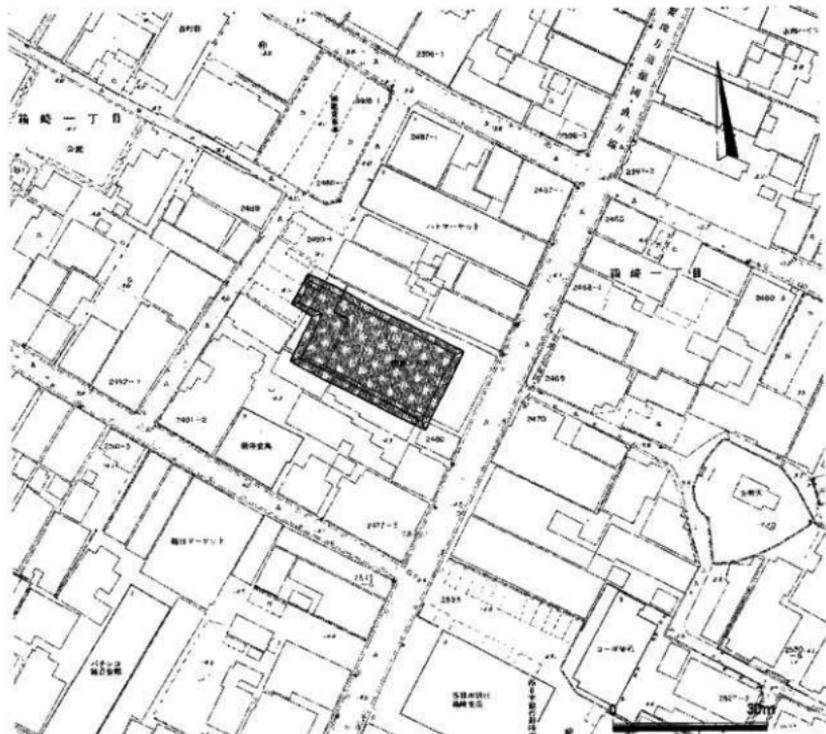
### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 調査の概要と層序

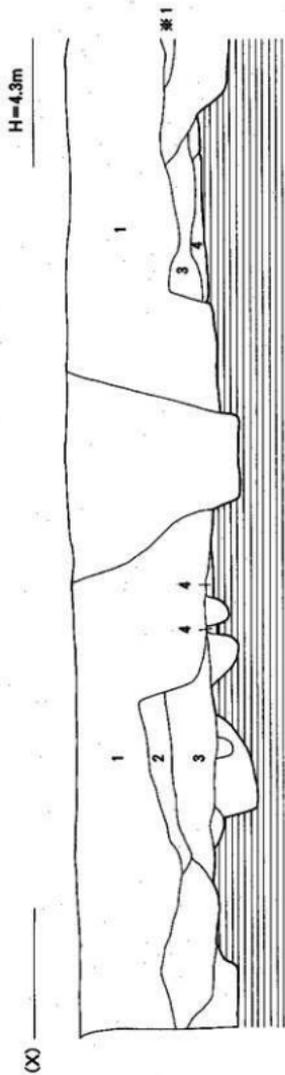
今回報告する第21次調査区は東区箱崎1丁目2480番地に位置し、箱崎遺跡の立地する古砂丘上の北西緩斜面に位置する。調査前の状況は店舗跡の平地であった。

調査区の層序(第4図東壁土層図参照)は、上層から約1mには瓦礫を含む客土や攪乱が認められ(1層)、その下層には暗灰茶褐色砂質土(2層)が堆積するが、大半は上層の攪乱により一部しか遺存しない。その下位には炭化物や焼土塊を含む褐色砂質土(3層)が広がり、遺構の掘り込みが認められる。更に下層には約10cmの厚さで黄褐色砂を含む暗褐色土砂質土(4層)が堆積し、同層の上面からも遺構が掘り込まれる。その下位は砂丘基盤の黄褐色砂層となり、砂丘面の標高は南側で約2.6m、北側で約2.5mを測り、緩く北側に傾斜している。

今回の調査は上下2面での調査を実施した。まず、ほぼ3層の上面近くまでを重機によって剥ぎ取った後、遺構プランの確認し得る3層途中までを人力によって下げた上で、遺構検出を開始した。その標高約2.8m前後を測る面を1面(第5図)として設定した。同面では後述する様に13世紀中頃から14世紀にかけての井戸、土坑等が確認できた。調査後は3・4層の包含層を人力によって砂丘基盤で



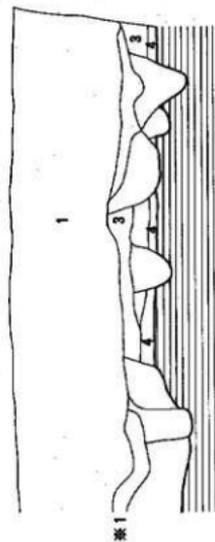
第3図 第21次調査区位置図 (1/1,000)



H=4.3m (N)

東畑土層

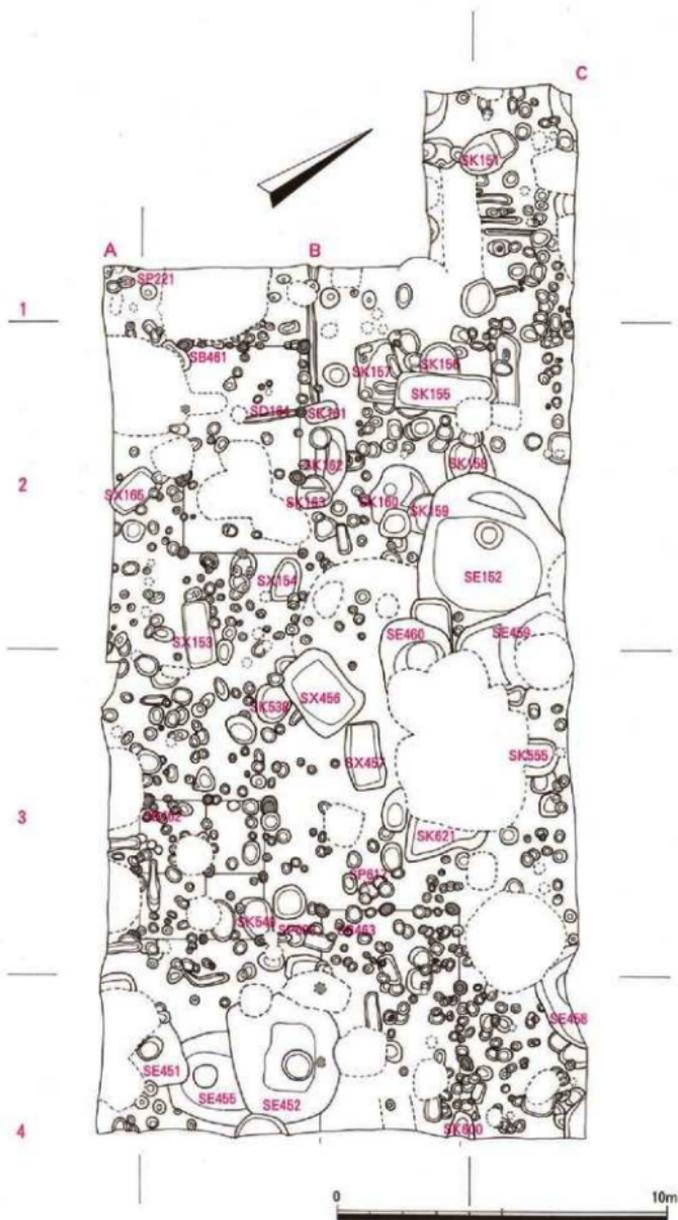
- 1 互層含む客土
- 2 暗灰茶褐色砂質土(淡黄褐色弱粘性土ブロック含む)
- 3 褐色砂質土(腐植物、粘土質含む)
- 4 暗褐色砂質土(黄褐色砂含む)



0 1m

第4図 高森区東畑土層実測図 (1/50)





第6图 第2面遺構配置图 (1/150)

ある黄褐色砂層まで下げ、下面となる2面(第6図)の調査を行った。その標高は前述した様に約2.5m前後を測る。なお、土層観察では2面の遺構の大半は砂丘上層に薄く堆積する4層上面より掘り込まれている。同面では12世紀中頃から13世紀前半の掘立柱建物、井戸、土坑、溝、埋葬遺構等を検出した。

発掘調査は平成12(2000)年3月29日、重機による表土剥ぎ取りから開始した。全ての廃土処理を申請地内で行わざるを得なかったため、調査区のほぼ中央を境界としてまず、西西部の調査を行うこととした。重機による掘削作業と並行して、発掘器材の搬入を行い、4月3日より人力作業を開始した。前述した各面の調査終了後、5月19日から重機によって廃土を反転し、東西部の表土剥ぎ取りを行った後、同様に各面の調査を実施した。全作業終了後、重機によって埋め戻しを行い、6月26日に器材撤収をもって調査を終了した。なお、調査対象面積は「I. はじめに」で前述した様に申請面積1,147.27㎡のうち、建物建築部分の664㎡であったが、周囲の安全対策上、実際の調査面積は545㎡(2面)であった。

調査時の遺構番号は001から3桁の通し番号を遺構の種別に関らず付した。その番号には欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっては、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。なお、先行して調査を実施した西西部では001～344の遺構番号を、東西部では351～657の番号を用いている。

## 2. 遺構と遺物

報告にあたっては、遺構を種別に大別後、検出面順、遺構番号順に遺構および出土遺物の記述を行う。また、調査区内での遺構位置を示す際には調査時における座標軸を基準とした10m単位での英字(南から北方向にA～C)と数字(東から西方向に1～4)とによるグリッド表記(第5・6図参照)を用いる。

### 1) 掘立柱建物(SB)

2面において3棟の建物を図上において復元した。建物方位が類似しており、現在の地割方向に沿っている。これら以外にも柱筋の通る柱穴群が認められるが、建物の復元には至らなかった。

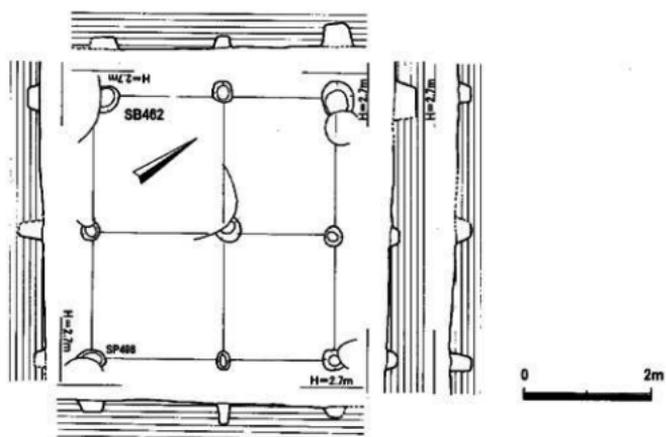
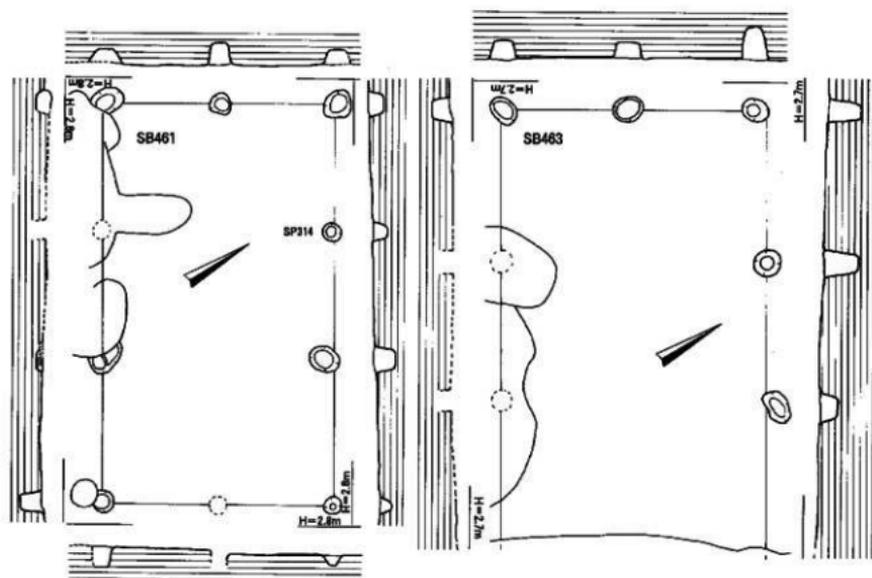
SB461(第7図) 2面B-2区に位置する2間×3間の側柱建物で、柱穴はSK161・162およびSD164を切る。建物方位はN-58°-Wにとる。梁間全長は3.6m、柱間は1.8m、桁行全長は6.3mで、柱間は2.1mを測る。柱穴は円形を呈するものが大半で、その径は約20～40cm、深さは約15～30cmを測る。

出土遺物(第7図1) SP314から出土した玉縁状の口縁部を有する白磁碗IV類である。他の柱穴からは回転糸切り底の土師器、中国陶器等が出土しているが、いずれも細片である。12世紀後半以降の建物と推定される。

SB462(第7図) 2面B-3区に位置する。現況で2間×2間の総柱建物を復元したが、南西部の調査区外に延びる可能性もある。建物方位はN-55°-Wである。東側の隅柱はSK549を切っている。梁間全長は3.8mで、柱間は南西部が2.0m、北東側はやや短く1.8mを測る。桁行の全長は4.2mで、柱間は2.1mである。柱穴は円形を呈し、径20～40cm、深さは15～40cmを測る。

出土遺物(第7図2) SP498から出土したほぼ完形の土師器坏である。口径16.4cm、器高3.2cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。他の柱穴からも回転糸切り底の土師器や瓦器の細片が少量出土している。土師器の法量から12世紀後半の建物と考えられる。

SB463(第7図) 2面B-3・4区に位置する。南東側は調査区外に延びるため、規模は不明確であるが、梁間2間、桁行3間以上の側柱建物と推定され、その方位はN-58°-Wである。南西部の柱穴は隅を除いて、1面SK386、2面SE452に切られる。梁間全長は4.2mで、柱間は2.1m、桁行の柱間は2.4mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径35～55cm、深さ25～55cmを測る。出土遺物には回転



第7図 SB461・462・463実測図(1/80) およびSB461・462出土物実測図(1/3)

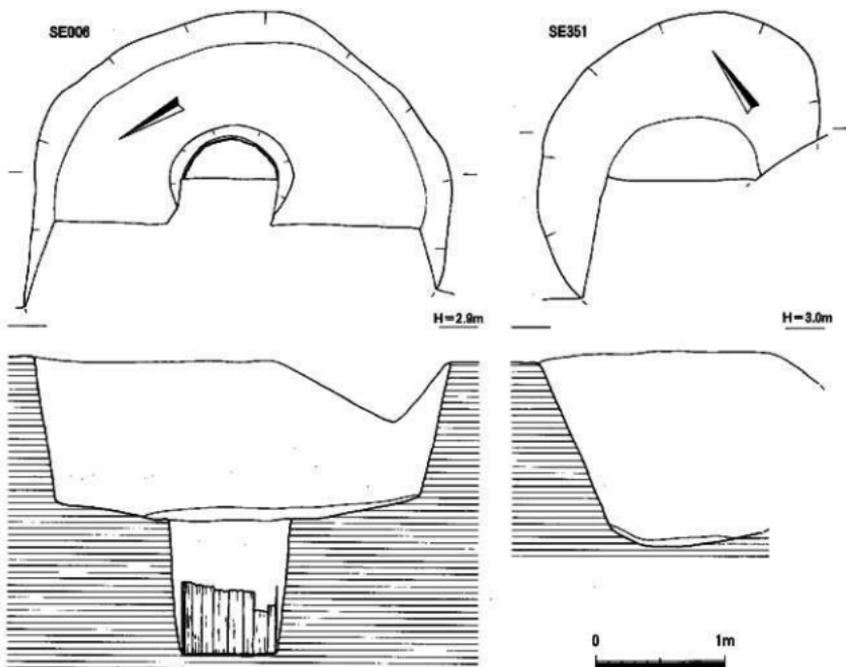
糸切り底の土師器や瓦器等が少量あるがいずれも細片で図化し得ない。12世紀後半以降の建物であろう。

## 2) 井戸(SE)

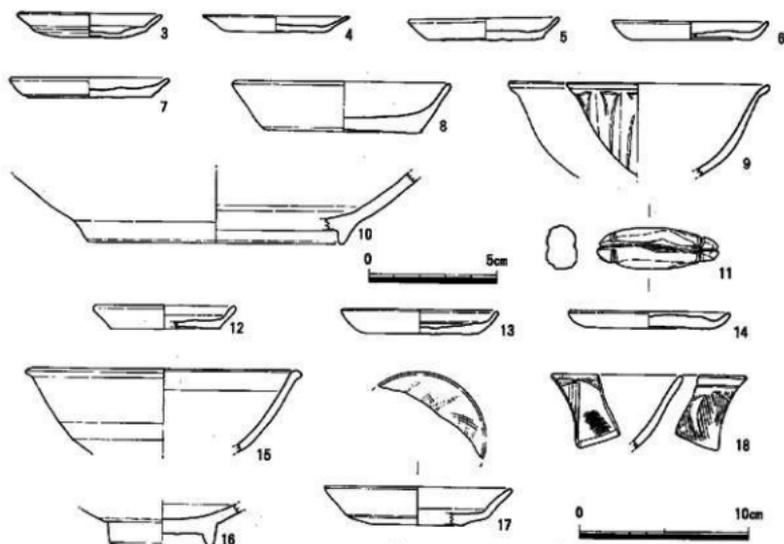
1面では4基、2面では7基の井戸を検出した。井筒の確認し得た井ものには全て木桶を用いている。なお、1面で検出した近世の瓦組井戸については紙面の都合から割愛している。

**SE006(第8図)** 1面B-1・2区の調査区際において検出した井戸で、東半部は調査区外に位置する。現況で径3.3mの円形の掘り方を呈し、覆土は灰褐色砂質土と暗黄褐色砂が互層をなす。その中央部には井筒の痕跡と考えられる粘性のある暗灰色砂質土を主体とする径1m程の円形プランが上面付近から確認できた。検出面から1.2mの深さには広い平坦面を設け、井筒の下部を据える深さ1.1m、径約1mの円形の掘り込みを有する。その内部には幅10数cmの板材を用いた復元径約75cmの木桶が高さ55cm程度遺存しており、礫数個が投棄されていた。底面の標高は0.3mを測り、湧水は認められなかった。

出土遺物(第9図3~11) 3~8は回転糸切り底の土師器で、3~7は小皿、8は坏である。6・8を除いて板状圧痕を有する。小皿の復元口径は8.4~9.3cm、坏は11.7cmを測る。9・10は龍泉窯系青磁Ⅲ類である。9は碗Ⅲ-2類で、幅の狭い鎗蓮弁文を有する。10は盤で、高台端部を除いて施釉される。11は滑石製の有溝石鏝である。他に中国陶器、白磁碗Ⅲ類等の細片が出土している。以上の出土遺物から13世紀後半の井戸と考えられる。



第8図 SE006・351実測図 (1/40)



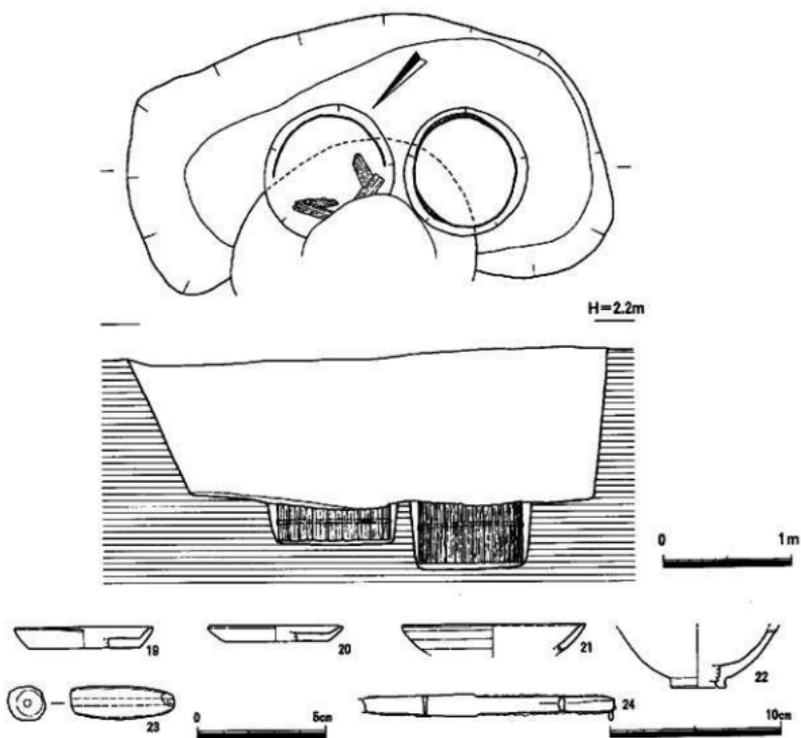
第9図 SE006-351 出土遺物実測図 (11は1/2、他は1/3)

SE351(第8図) 調査区南隅の1面A・B-4区で確認したため、大半は調査区外に位置する。覆土は暗灰褐色砂質土と暗黄褐色砂が互層をなす。検出面からの深さ約1.6mに平坦面を設けるが、調査区内で井筒は未検出である。

出土遺物(第9図12~18) 12~14は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれも板状圧痕はない。復元口径は順に8.2、9.2、9.3cmを測る。15・16は白磁碗V類である。15は口縁端部を水平にする。17は同安窯系青磁皿I-2類で、外底部の軸を削り取る。見込みには櫛状工具による施文を有する。18は龍泉窯系青磁碗I-6・b類である。外面には蓮弁を施し、瓣目の施文を加える。他に須恵質鉢、中国陶器等の細片や銹化の著しい銅銭1点が出土した。

SE362(第10図) 1面B・C-3区で検出した井戸で、北西側は近世の瓦組井戸に切られる。また、当初の検出面では南東側で重複するSE363との切り合い関係が不明であったため両遺構を同一に掘り下げ、標高約2mの面においてSE363を切ることを確認し得た。出土遺物についてもこの面以下での帰属が明瞭なものを登録して、取り上げた。掘り方は長径3.7m、短径約2mを測る楕円形を呈し、当初の面からの深さ約1.9mに広い平坦面を設けている。その中央部には隣接して、2基の井筒が確認できた。精査によっても両者に切り合いは認められなかった。共に径約1mの円形の掘り込みに木桶が遺存しており、幅数cmのタガが確認できた。北東側の木桶内部には近世井戸掘削時に破損したと考えられる桶材が散在していた。北東側の掘り込みは南西側よりやや浅く、その底面の標高は0.45m、後者は0.25mで、共に湧水はしていない。

出土遺物(第10図) 19・20は土師器小皿ある。共に外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。順に復元口径は8.0、7.9cmである。21は口禿の白磁皿X類である。22は龍泉窯系青磁小碗I類で、疊付きおよび高台内部は露胎である。23は北東側の井筒内から出土した管状土師で、端部を欠損する。24は鉄

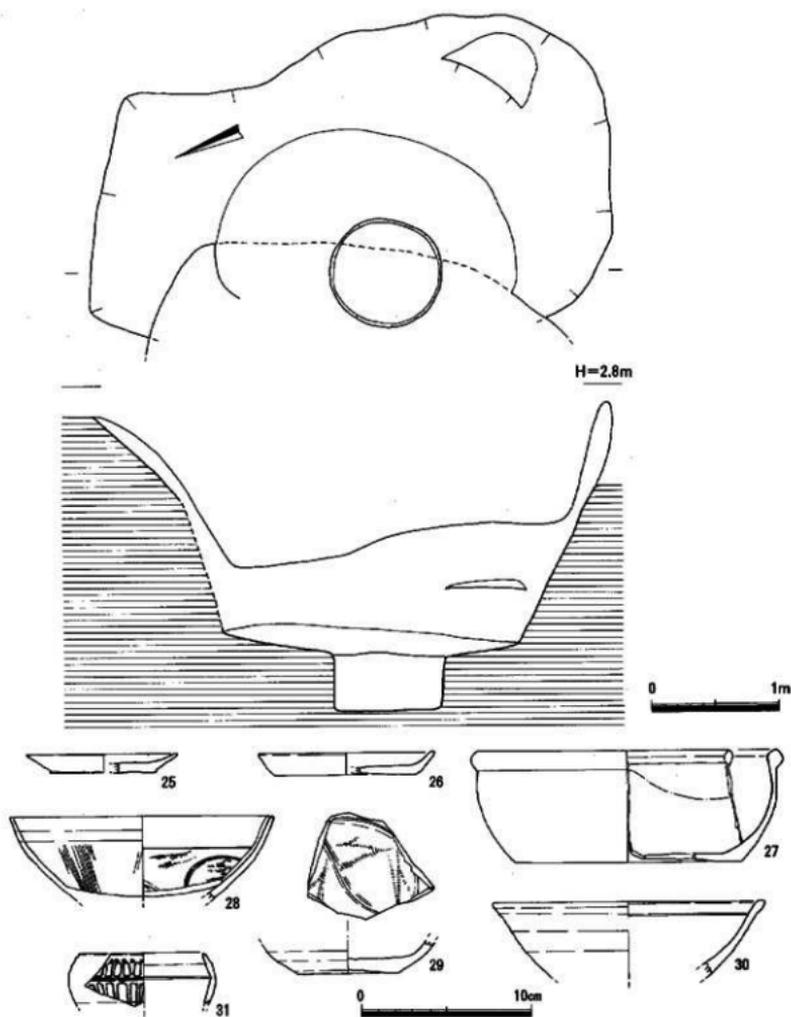


第10図 SE362 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (23は1/2、他は1/3)

製刀子で、刃幅1.2cmを測る。南西側井筒から出土した。他に須恵質土器、瓦器等の細片が出土した。以上の出土遺物から13世紀後半の井戸に比定される。

SE363(第11図) 前述した様にSE362に切られる井戸で、1面B・C-3区に位置する。現況での長径約4mを測る不整な楕円形を呈し、南側に小規模なテラスを有する。検出面からの深さ約1.8mに平坦面を設け、ほぼ中央部に井筒の下部を据える径0.9m、深さ0.5mの円形坑を掘り込む。その内部には径約0.65mを測る円形の木質の腐食した痕跡を確認できた。底面の標高は0.25mを測り、僅かな湧水が認められた。

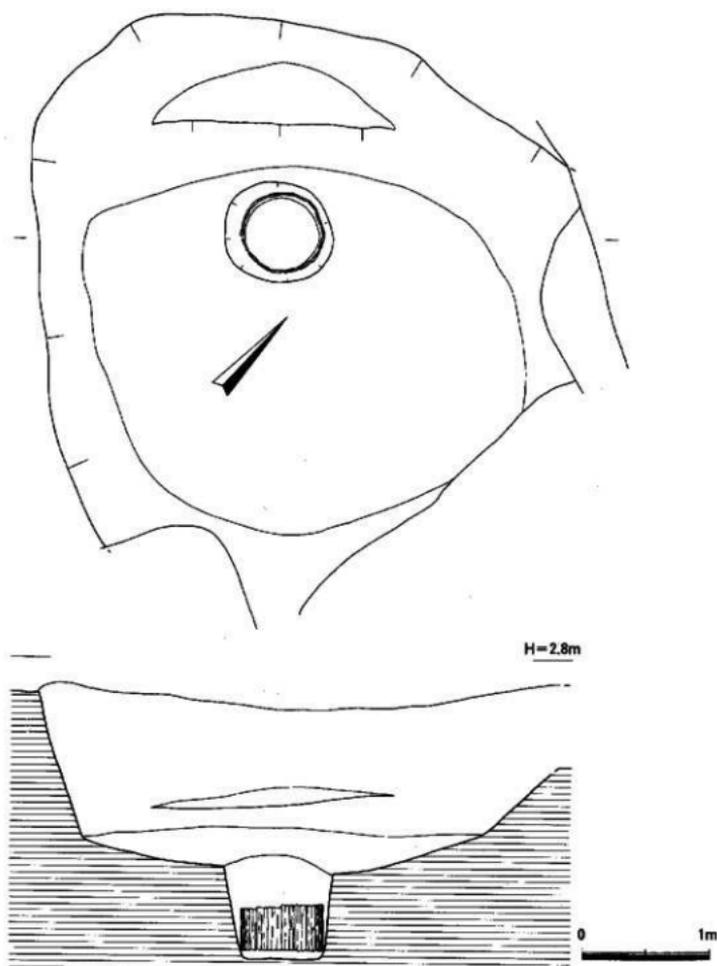
出土遺物(第11図) 25・26は回転糸切り底の土師器小皿で、共に板状圧痕を有する。復元口径は順に9.0、10.4cmを測る。27は黄釉陶器の盤で、内面の上半には淡橙色の化粧土を掛け、下半には灰オリーブ色の施釉を行う。外面は露胎で、胎土には砂粒が多い。28・29は同安楽系青磁で、28は碗I-1・b類、29は皿2類である。30は龍泉窯系青磁碗I-1類と考えられる。31は青白磁の合子身で、外面には型押しによる施文を有する。口縁部は口禿、外面下半も露胎である。他に瓦器や白磁の細片が出



第11図 SE363 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

土している。13世紀中頃の遺構であろう。

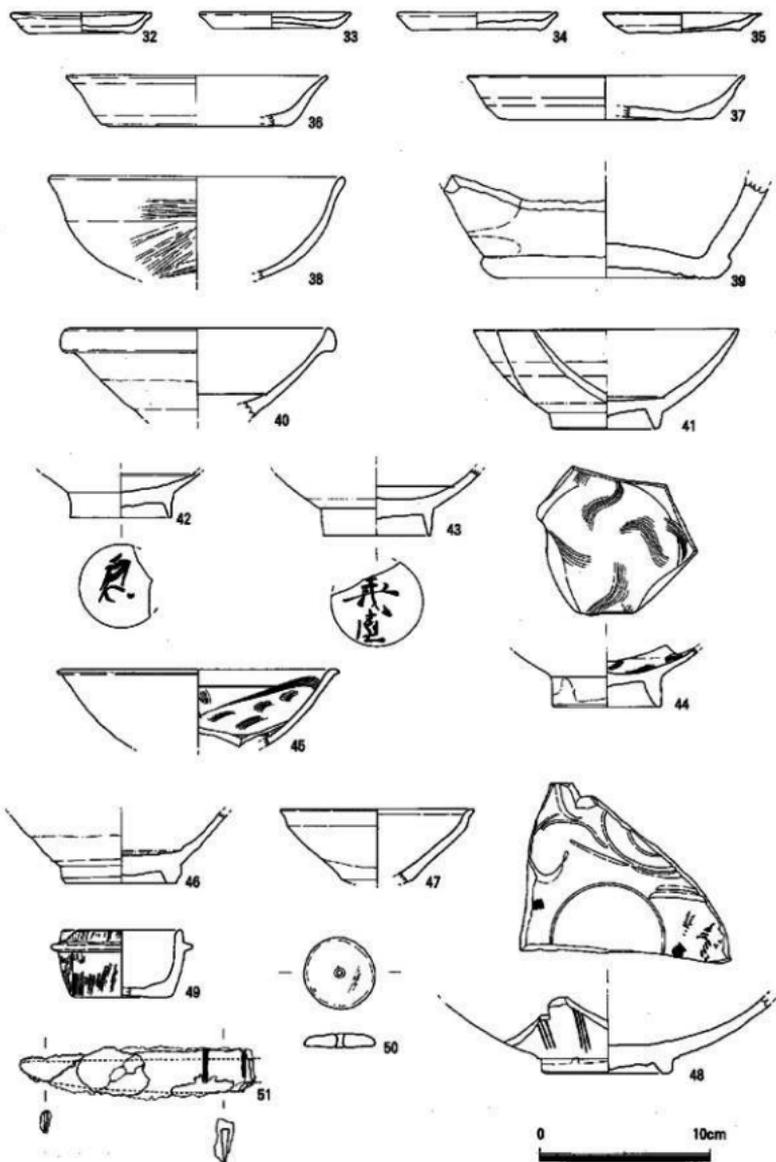
SE152(第12図) 2面B・C-2区に位置し、東側をSE459に切られる。また、北東側の一部は調査区外に延びるため、全容は不明であるが、現況では掘り方は径約4.5mを測る不整円形プランを呈する。



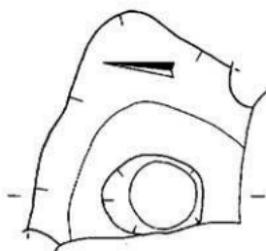
第12図 SE152 実測図 (1/40)

検出面からの深さ約1.3mに広い平坦面を設け、その西端に井筒の下部を据え付ける径約0.9m、深さ0.8mの円形の掘り込みを有する。その内部には幅10~12cm、厚さ約2.5cmの板材を18枚組み合わせた径約65cmの木桶が高さ35cm程度遺存する。底面の標高は0.35mを測り、湧水は認められない。

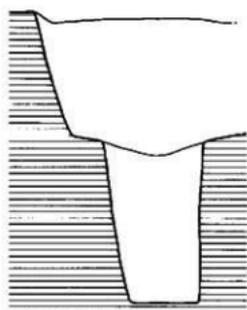
出土遺物(第13図) 32~37は土師器で、32~35は小皿、36~37は坏である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕を有する。小皿の復元口径は8.2~9.2cm、坏は順に15.4、16.4cmを測る。38は瓦器碗で、内



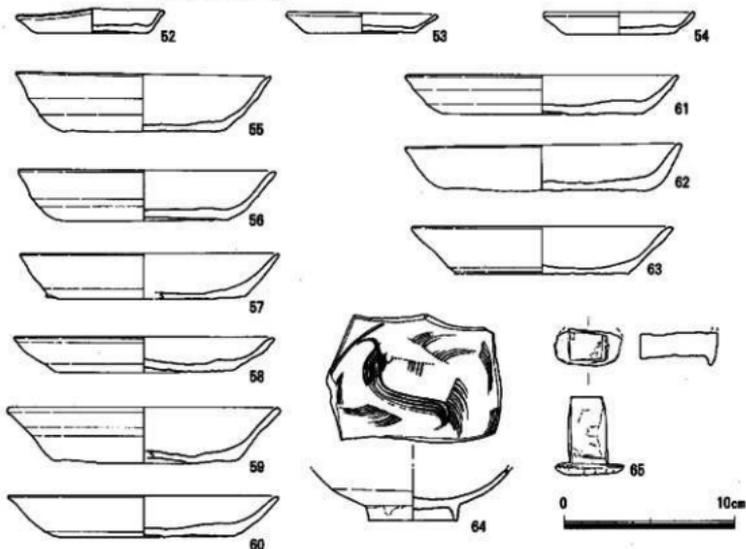
第13图 SE152 出土器物实测图 (1/3)



H=2.8m



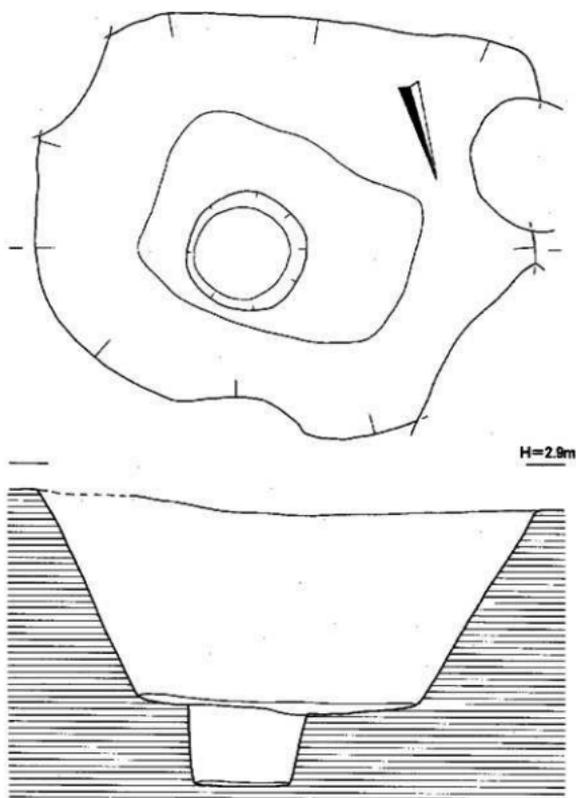
0 1m



第14図 SE451 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

外面共にへら研磨を行う。39は中国陶器壺の底部である。暗赤褐色を呈する胎土には砂粒が多量に混じる。褐色の釉が薄く施される。40～46は白磁碗である。40はⅣ類、41～45はⅤ類である。42は花押、43は「義□」の墨書が認められる。46は見込みの釉を輪状にカキ取るⅥ類である。47は黒釉天目碗で、外面下半は露胎である。48は同安窯系青磁の大碗である。内外面に櫛状工具および片彫りによる施文を有する。淡オリーブ黄色の釉が高台際までかけられる。49は滑石製のミニチュア鍋である。外面には櫛歯状工具による調整が施される。50は滑石製の円盤状の石鏝である。51は鉄製の短刀で、錆化が著しい。他に格子目叩きの瓦片や獣骨等が出土している。以上の出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

SE451(第14図) 2面B-4区で確認した井戸で、SE455を切る。東側は1面遺構に切られるため、遺存状況は不良である。掘り方の覆土は褐色砂質土を主体とし、下層には黄褐色粘りが混じる。井筒の腐食した痕跡と考えられる黒褐色粘性砂質土の円形プランが上面

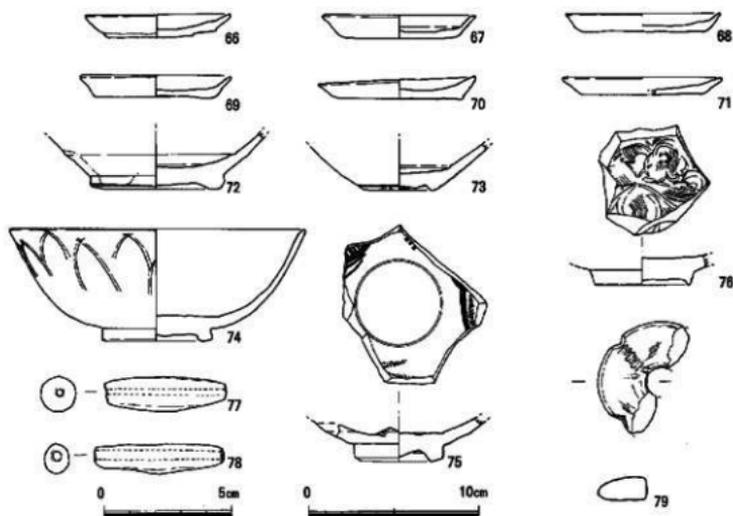


第15図 SE452 実測図 (1/40)

近くから確認できた。検出面からの深さ約1mに平坦面を設け、井筒の下部を掘える円形の土坑を掘り込む。その深さは1.25mを測り、他の検出例より深い。底面の標高は0.3mを測り、僅かな湧水が認められた。

出土遺物(第14図) 52~63は土師器で、いずれも外底部は板状圧痕を有する回転糸切り底である。52~54は小皿で、口径は8.7~8.8cmである。完形に近い個体である。55~63は坏で、口径は15.0~16.2cmを測る。56・63の内面には炭化物の付着が認められる。64は白磁碗VI-1・b類である。内面には櫛状工具による施文を有する。高台際まで明オリブ灰色の釉が施される。65は滑石製品で、断面方形を呈する狭みに平面小判形の凸面状の底部が付く。高さ4.6cmを測る。他に瓦器、須恵質土器、中国陶器等の細片が出土した。これらの出土遺物から12世紀後半の遺構と推定される。

SE452(第15図) 2面B-4区に位置し、SE455を切る。また、西側を1面遺構SK355・386に切られる。



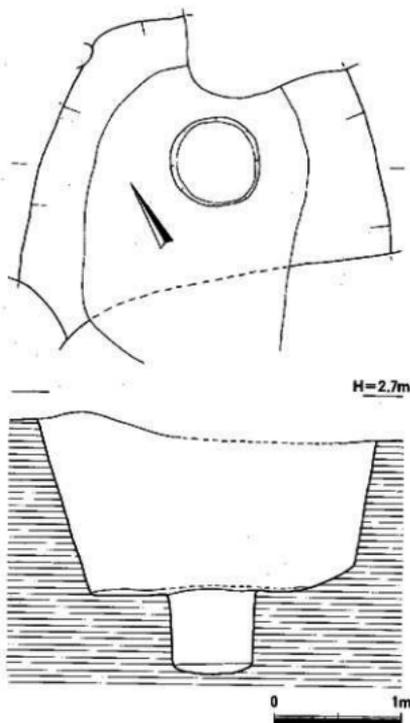
第16図 SE452 出土遺物実測図 (77・78は1/2、他は1/3)

掘り方は長さ3.9m、幅3.2mを測る不整な隅丸方形を呈し、覆土は灰茶褐色砂質土を主体とする。検出面からの深さ約1.5mに平面隅丸方形の平坦面を設け、井筒下部を据える径約0.9m、深さ0.6mの円形の掘り込みを有する。底面の標高は0.35mを測り、湧水する。

出土遺物(第16図) 66~71は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれも板状圧痕を有する。口径は8.1~9.4cmで、平均は8.9cmを測る。72は白磁碗IV類で、見込みに沈線が巡る。73は高麗青磁の碗である。外底部は基筒底風削り出し、畳付きおよび見込みに日跡が残る。灰色の胎土の全面に緑灰色の釉が施される。74は龍泉窯系青磁碗I-5・a類で、口縁部の一部を欠損する。見込みには太目の沈線を配する。内外面に貫入が多い。75は同安溪系青磁碗I-1・b類で、外面には櫛目文を有する。76は青白磁の碗で、先尖りの低い高台を有する。見込みには櫛目工具および片彫りにより花文を描く。胎土は灰白色で、畳付きおよび高台内は露胎である。77・78は完形の管状土錘で、重量は順に9.3g、4.6gを測る。79は滑石製の環状石錘片で、外縁に抉りを有する。他に瓦器、須恵質土器、縄目叩きの瓦片等が少量出土した。これらの出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。

SE455(第17図) 2面B-4区で検出した井戸で、南北の壁面をSE451・452に切られるため、全容は不明であるが、短径2.8m、長径3m以上の楕円形の掘り方をなすものと推定される。覆土は灰茶褐色砂質土を主体とし、井筒の腐食した痕跡と考えられる暗褐色を呈する粘性の強い砂質土の円形プランが上層から確認できた。検出面から深さ約1.4mに平坦面を設け、井筒の下部を据え付ける径0.7m、深さ0.65mの円形土坑を掘り込む。その底面の標高は0.5mを測り、湧水は認められない。

出土遺物(第18図) 80・81は土師器小皿である。共に外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。口径は順に8.8、8.9cmを測る。81は完形品である。82は回転糸切り底の土師器環で、板状圧痕はない。復元口径は15.0cmを測る。83は復元口径25.0cmを測る東播系の須恵質鉢で、口縁部下端をつまみ出す。



第17図 SE455 実測図 (1/40)

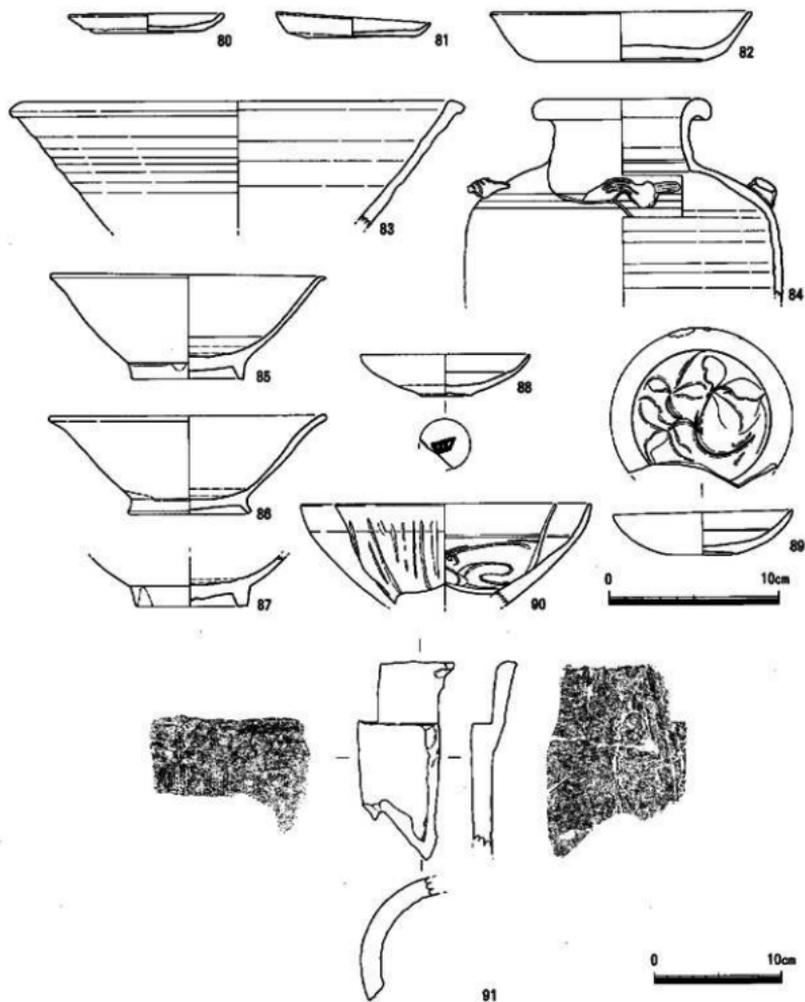
内外面共にヨコナデを施す。84~89は白磁である。84は四耳壺で、強く屈曲する肩に直立する頸部が付く。口縁部は折り返して、丸く収める。内外面に明オリブ灰色の釉がかげられる。85~87は碗で、いずれも見込みの軸を輪状にカキ取る。85はⅧ-1類で、内面下半に沈線が1条巡る。口縁端部を僅かに外反させ、上面を水平に仕上げる。86・87はⅧ-2類で、見込みの段内部の軸を削る。88はⅢⅥ-1・a類、89はⅢⅧ-1類である。88は体部内面の上半に段を有する。釉は淡灰オリブ色で、体部下半には施釉されない。外底部には「四」の墨書が記される。89の内面上半には沈線を施し、見込みには片彫りによる花文を有する。外底部の釉は施釉後に削り取る。90は同安窯系青磁碗で、体部上半で内側に緩く屈曲する。外面および内面には片彫りによる施文を有する。91は玉緑式の丸瓦である。凸面には縄目叩きを施し、ヨコナデを加える。凹面には縄紐の痕跡および布目が残る。他に中国陶器、白磁碗Ⅴ類等の細片が出土している。以上の出土遺物や切り合い関係から12

世紀後半の井戸に比定される。

SE458(第19図) 2面C-3・4区で確認したが、出土遺物から1面の検出遺漏と考えられる。遺構の大半は調査区外に位置している。また、西側は近世井戸に切られる。掘り方内の平坦面中央部に井筒を掘える掘り込みを検出し得たが、調査区の壁面にかかるため、完掘できなかった。覆土は暗褐色砂質土と暗黄褐色砂が互層をなす。また、中央部にはやや粘性のある暗褐色砂質土が認められ、井筒の腐食した痕跡と推定される。

出土遺物(第20図92~94) 92は口禿の白磁ⅢⅨ-1類で、全面に灰白色の釉が施される。93・94は龍泉窯系青磁である。93は小碗Ⅲ-2類と考えられ、外面に鈍い鑄を有する蓮弁文を有する。94は碗Ⅳ類で、全面施釉後に高台内の軸を輪状に削り取る。外面にはへら状工具による沈線、見込みには花文のスタンプを有する。他に回転糸切り底の土師器や瓦質上器摺鉢の細片が出土している。以上の出土遺物から14世紀代の井戸と考えられる。

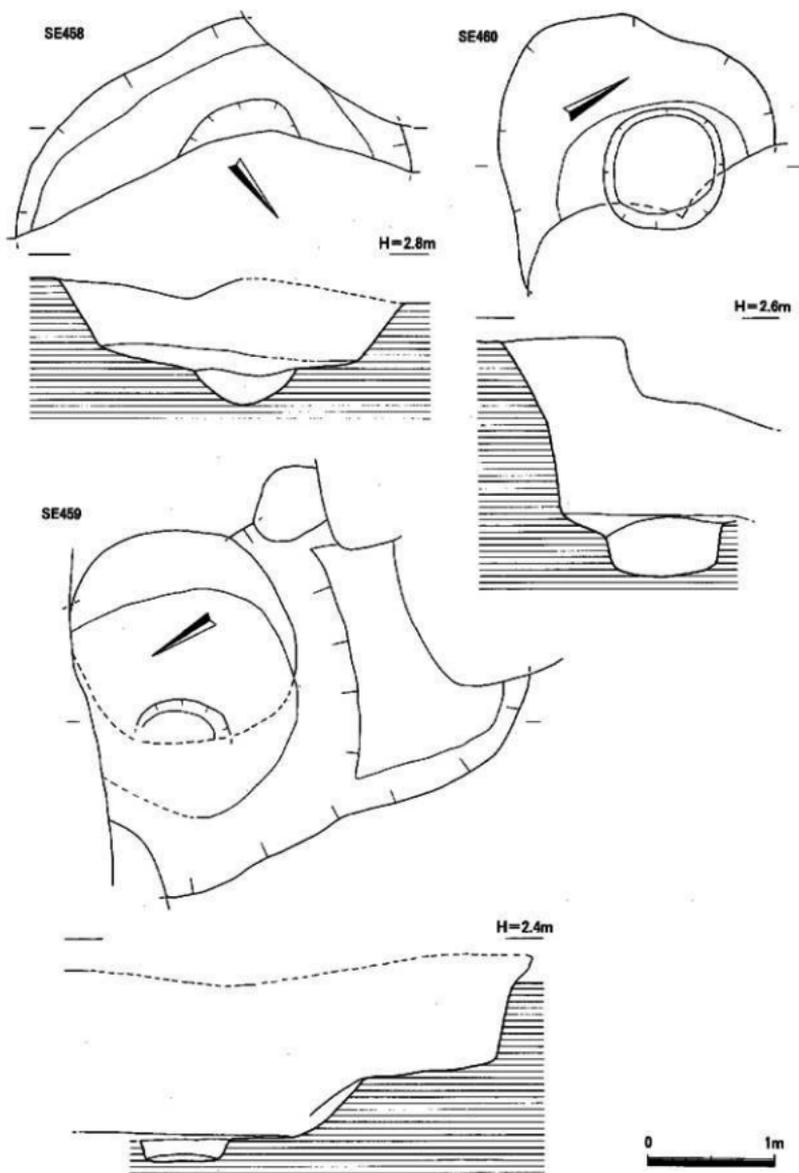
SE459(第19図) B・C-2・3区に位置し、SE152を切る。掘り方の中央部を1面SK356に切られ、北側は調査区外に延びるため遺存状況は良好ではない。掘り方の覆土はやや粘性のある灰褐色砂質土で、



第18図 SE455 出土遺物実測図 (91は1/4、他は1/3)

南側に広いテラスを有する。更に一段下かって、平坦面を築き、井筒を据え付ける土坑を掘り込むが、調査区の壁面が崩落したため、その内部は完掘に至らなかった。ただし、木桶が不良ながら遺存していた状況を確認できた。

出土遺物(第20図95・96) 95は瓦器碗である。口縁部はヨコナデ、内面にはこて当て痕が残るが、器面の風化がすすむ。96は北宋代の銅銭で、「天禧通寶」(初鑄年:1017年)である。他に土師器小皿、中国



第19図 SE458・459・460 実測図 (1/40)

陶器の細片が出土した。SE152との前後関係から12世紀後半以降の井戸と推定される。

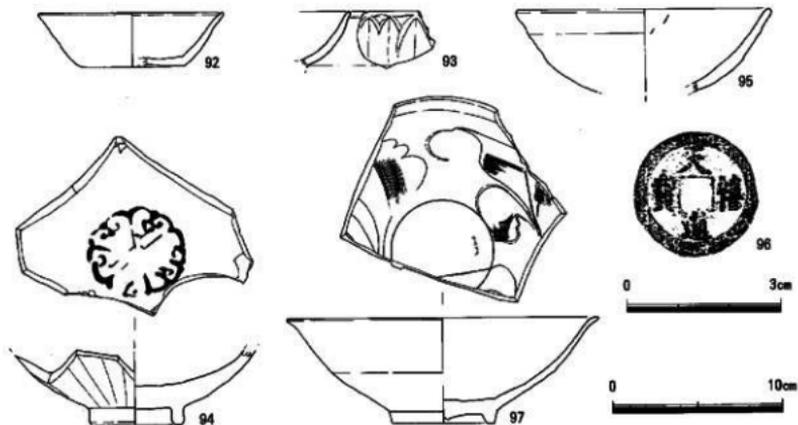
SE460(第19図) SE459に隣接するB-2・3区で確認した。東側を1面の近世井戸およびSE362に切られる。現況では径約2.2mの円形の掘り方を呈する。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土である。検出面からの深さ約1.4mに平坦面を設け、径約1m、深さ0.45mの円形の掘り込みを有する。その底面の標高は0.55mを測り、湧水は認められない。

出土遺物(第20図97) 白磁碗Ⅶ類である。体部中位で緩く屈曲し、口縁部は外反する。見込みには段を有し、ヘラおよび櫛状工具による文様が描かれる。軸は濁りのある灰白色で、高台に施軸がおよぶ。他に回転糸切り底の土師器、白磁碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・b類等の細片が出土している。13世紀前半の遺構と考えられる。

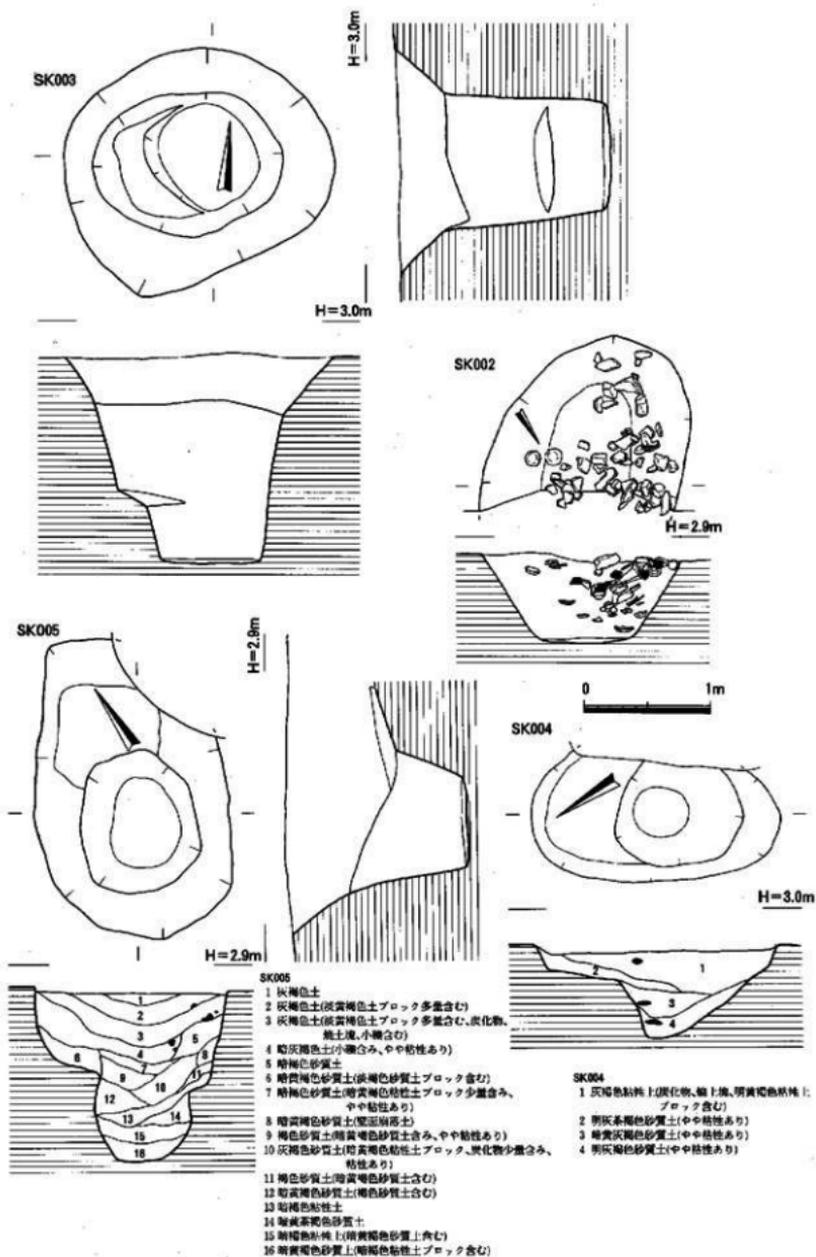
### 3) 土坑(SK)

SK002(第21図) 1面C-1区で確認した土坑で、北側は調査区外に位置する。現況では楕円形を呈するものと考えられ、短径1.4m、深さ0.65mを測る。断面は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。覆土は灰褐色粘性砂質土で、上層から中層にかけて土器類および拳大の礫が投棄される。

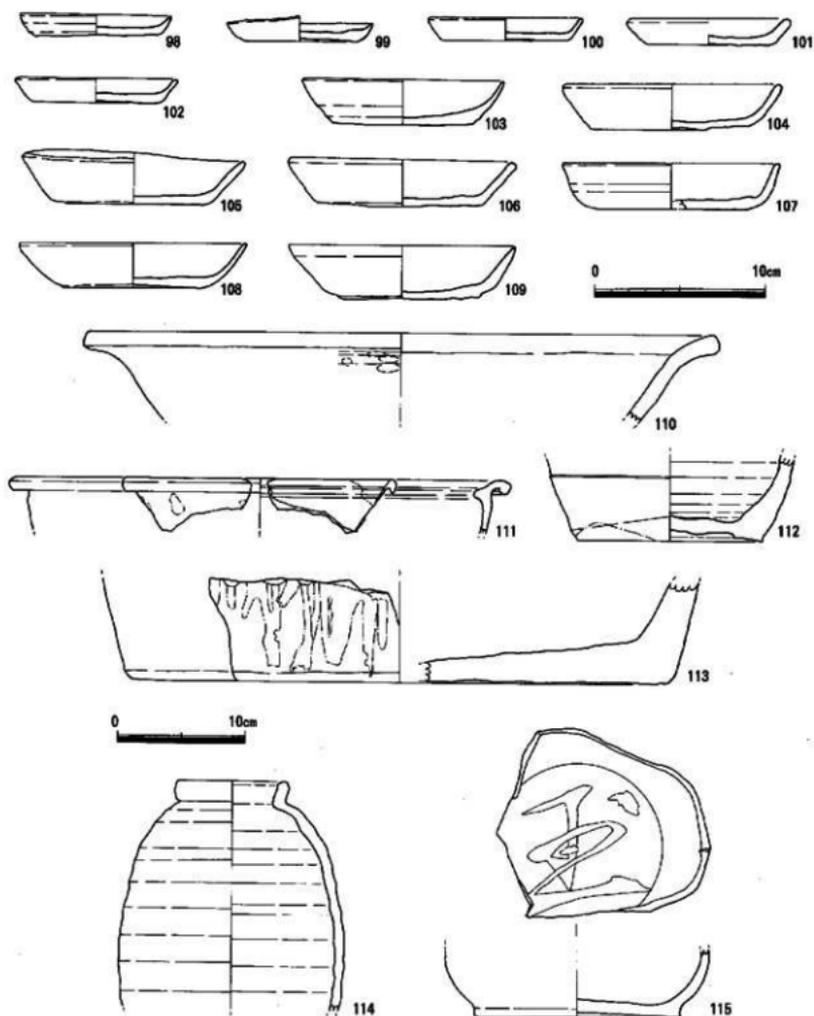
出土遺物(第22図・23図116~121) 98~102は回転糸切り底の土師器小皿で、完形に近い個体が多い。99を除いて板状圧痕を有する。口径は8.1~9.2cmを測り、平均は8.7cmである。103~109は土師器坏で、いずれも板状圧痕を有する回転糸切り底である。口径は11.6~13.2cmを測り、平均は12.6cmである。110は土師質土器の鍋である。口縁部を外反させ、面取りを施す。屈曲部には指オサエが残る。111~115は中国陶器である。111・115は盤で、111は鐙形の口縁端部を折り返す。内面には淡オリーブ灰色の釉が施されるが、口縁部は粗く拭き取る。115も内面のみにオリーブ黄色の釉がかけられ、見込みには鉄絵により「玉」が描かれる。112・114は壺である。112は蛇目状の高台を有する底部で、淡オリーブ黄色の釉が外面に施される。114は長胴の壺で、灰色の胎土に茶褐色の釉が内外面にかけられる。113は甕の底部で、外面には灰オリーブ色の釉を流しかけする。外底部は露胎で、暗褐色を呈する。116~118は口禿の白磁である。116は碗Ⅸ-1類で、口縁部を除き、全面に施軸される。見込みに段状の沈線が巡る。117・118は皿Ⅹ類で、117の外面下半以下は露胎、118は全面に施軸し、外底部の



第20図 SE458・459・460 出土遺物実測図 (96は1/1、他は1/3)

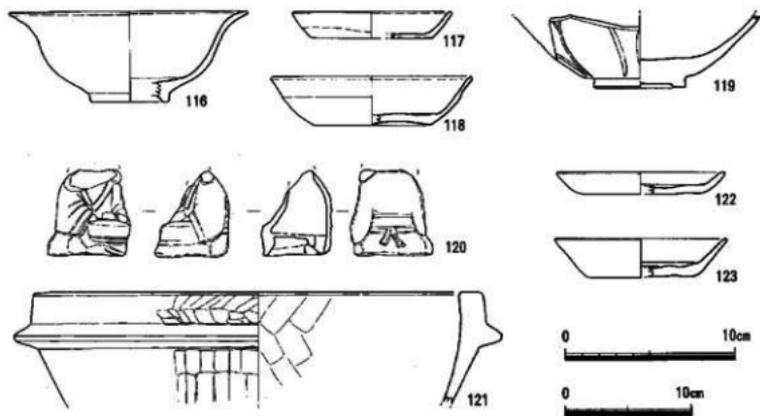


第21図 SK002・003・004・005 実測図 (1/40)



第22図 SK002 出土遺物実測図(1) (111・113は1/3、他は1/4)

釉は拭き取る。119は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・a類である。鏤のない蓮弁文が外面に施文される。120は土師質の太鼓を叩く人形である。ヘラ状工具により着物を表現する。底面には径0.4cmの焼成前の穿孔を有する。121は滑石製石鍋である。ノミにより削痕が認められるが、内面には研磨を加える。



第23図 SK002 出土遺物実測図(2)・SK003 出土遺物実測図(121は1/4、他は1/3)

他に縄目印きの瓦片や鉄釘等が出土している。これらの出土遺物から13世紀中頃から後半の土坑と考えられる。

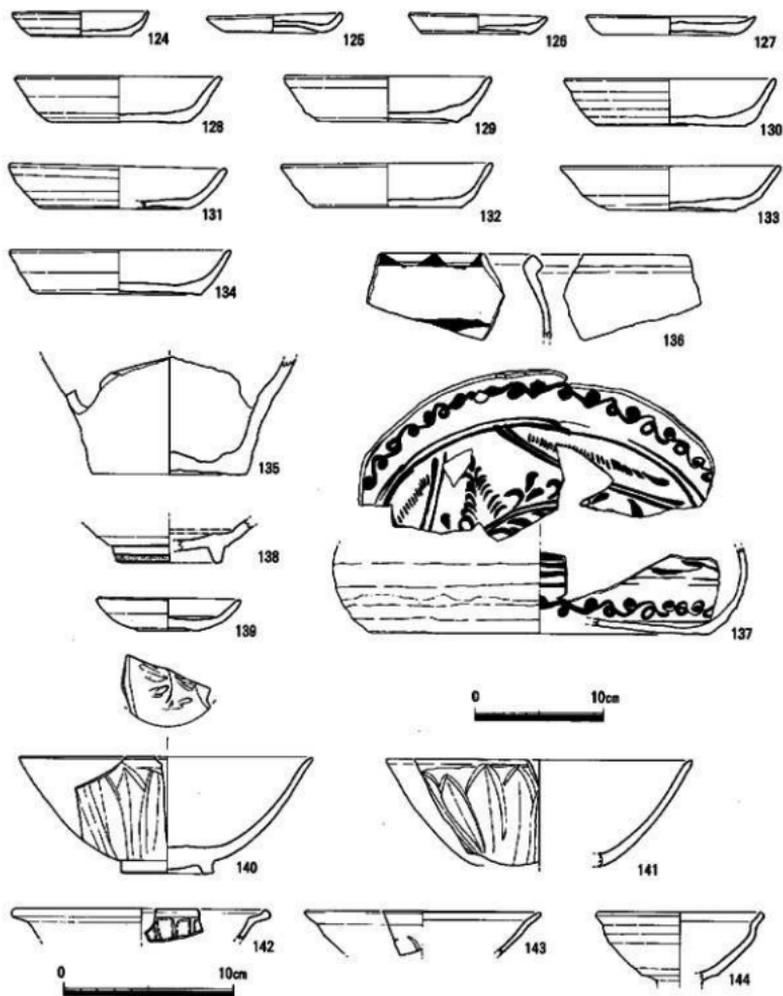
SK003(第21図) 1面B-2区に位置し、SK005を切る。不整な円形プランを呈し、径1.8~2.1mを測る。検出面より深さ0.4mから壁面の傾斜が直立気味になり、西側には小規模なテラスを有する。底面までの深さは1.65mを測る。当初は井戸と考えたが、底面の標高は1.1mで、前述した井戸に比して標高が高い。覆土は暗灰褐色粘性砂質土で、暗黄褐色砂がラミナ状に混じる。

出土遺物(第23図122・123) 共に土師器である。122は小皿で、復元口径10.0cmを測る。外底部は粗くナデる。123は復元口径10.2cmを測る小形の坏である。外底部は回転糸切り底で、板状圧痕はない。他に白磁、瓦等が出土しているが、細片が多い。

SK004(第21図) SK003に近接する1面B-2区で検出した。SK005に南東側を切られる。現況での平面プランは楕円形を呈し、長径2.0m、短径は推定で1.1mを測る。北東側に平坦面を有し、中央部はピット状に掘り込まれる。覆土の上層には焼土塊を含む。出土遺物には回転糸切り底の土師器、瓦器、熊泉窯系青磁等があるがいずれも細片である。

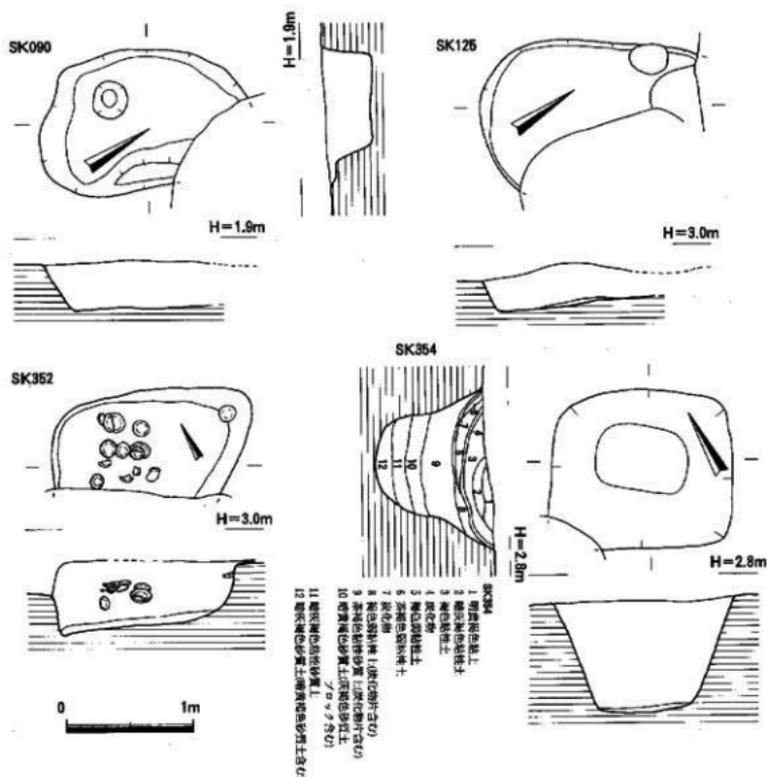
SK005(第21図) 1面B-2区に位置する土坑で、SK003に切られ、SK004を切る。不整な隅丸長方形の平面プランを呈し、中央部には径約1mの掘り込みを有する。検出面からの深さは1.35mを測る。出土遺物は下層では少量であるが、上層には小礫を含み土器類が多量に混じることから、遺構埋没の最終段階で廃棄されたものと推定される。

出土遺物(第24図) 124~134は回転糸切り底の土師器で、124~127は小皿である。124~126は口径が7.8~7.9cmを測り、小形化がすすむ。127のみに板状圧痕が認められる。128~134は坏で、口径は11.6~13.0cmを測る。134を除いて板状圧痕はない。135~137は中国陶器である。135は壺底部で、内外面共に無釉である。胎土はやや赤味のある灰褐色を呈し、灰白色の砂粒が多量に混じる。136・137は黄釉陶器盤で、同一個体の可能性が高い。口縁部は断面方形形状に短く折れる。内面には鉄釉による文様を有し、見込みには草花文、体部には圏線および渦文が描かれる。また、口縁部内面には三角文



第24図 SK005 出土遺物実測図 (137は1/4、他は1/3)

の施文を有するが、赤褐色に発色している。その両端部には目跡が残る。施釉は内面および外面上半に行われ、露胎部は淡赤茶褐色を呈する。胎土には砂粒が多量に混じる。138・139は白磁である。138は見込みの軸を輪状にカキ取る碗Ⅳ-2類である。139は皿Ⅲ類で、外底部の軸を削り取る。140～142は龍泉窯系青磁である。140・141は体部外面の縮蓮弁文を有する碗Ⅰ-5類である。140の見込み



第25図 SK090・125・352・354 実測図 (1/40)

には草花文のスタンプを有する。142は坏Ⅲ-3・b類で、銜口の口縁部を呈し、端部を僅かに上方に引き上げる。内面には蓮弁を削り出す。143は青白磁の碗である。口先の口縁部は赤茶褐色を呈する。外面には蓮弁の一部が認められる。144は黒釉磁器の天目碗である。口縁部内面は黒釉を剥ぎ取り、淡オリーブ灰色の釉をかける。体部下半以下は露胎で、淡オリーブ黄色を呈する。他に須恵質土器や滑石製石銅等の細片が出土した。これらの出土遺物から13世紀末から14世紀初頭の土坑と考えられる。

SK090(第25図) 1面B-2区に位置する。不整な楕円形を呈し、東側を別土坑に切られる。長径は推定で1.7m、短径は1.1m、深さは0.4mを測る。南東側には狭いテラスを有する。覆土は褐色砂質土を主体とし、黄褐色土ブロックが混じる。

出土遺物(第26図145~148) 145~147は白磁である。145・146は碗Ⅴ類で、145は口縁部を緩く外反させる。釉色は透明感のある明オリーブ灰色で、外面の体部下半以下は露胎である。見込みに深目の段を設け、その内部を輪状に削り取る。146は内面に沈線が1条巡る。淡オリーブ色の釉が薄くかけられる。145同様に体部下半には施釉しない。147は皿Ⅲ-1類である。胎土は淡黄褐色で、高台を除いて化粧土をかける。また、内面および体部外面上半には灰白色の釉を施す。148は同安窯系青磁

碗Ⅲ-1・c類である。外面には片彫りの沈線を配し、下半は露胎となる。他の出土遺物には回転糸切り底の土師器、白磁皿Ⅲ類、縄目叩きの瓦等の細片がある。以上の出土遺物から13世紀後半代の土坑と推定される。

SK125(第25図) 1面C-1区で検出した土坑である。東側を攪乱に切られ、北東側は調査区外に延びるため、平面規模は不明である。深さは0.35mを測る。覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物(第26図149・150) 149は口径9.1cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。150は白磁皿Ⅳ-1・a類である。体部上半で屈曲し、その内面に沈線が巡る。外面下半は露胎である。他に中国陶器の細片が出土している。

SK352(第25図) 1面B-4区で確認した。南側を攪乱に切られるため、遺構規模は不明である。現況では隅丸方形を呈するものと推定される。壁面は直立気味で、底面は西側に傾斜している。暗灰褐色砂質土の覆土には炭土や炭化物を含み、中層では土師器小皿が多数出土した。

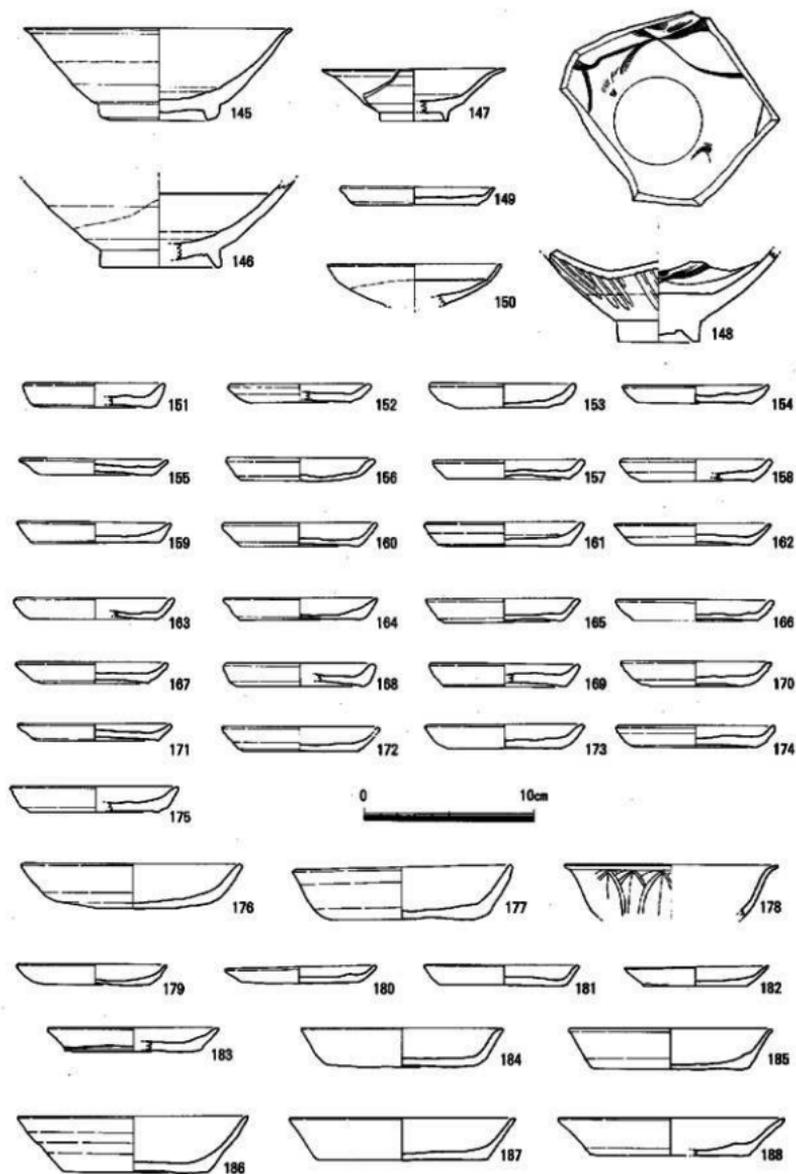
出土遺物(第26図151~178) 151~175は回転糸切り底の土師器小皿で、約1/3が完形の個体である。復元口径は7.9~9.5cmを測り、平均は8.7cmである。169を除いて板状圧痕が認められる。176・177は土師器環で、外底部は回転糸切りである。176には板状圧痕を有する。口径は共に12.6cmである。178は龍泉窯系青磁碗Ⅲ-4類である。口縁部は外反させ、端部は尖り気味に収める。外面には鏝蓮弁を施文する。他に瓦器、白磁碗Ⅷ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類等の細片が出土した。これらの出土遺物から13世紀中頃の遺構と考えられる。

SK354(第26図) 1面B・C-3区に位置する。西側のコーナーを攪乱に切られるが、一辺1.2~1.3mを測る隅丸方形を呈する土坑である。断面は逆台形をなし、深さは0.9mを測る。1~8層(上層)は細かいレンズ状の堆積をなし、炭化物が顕著に含まれる。

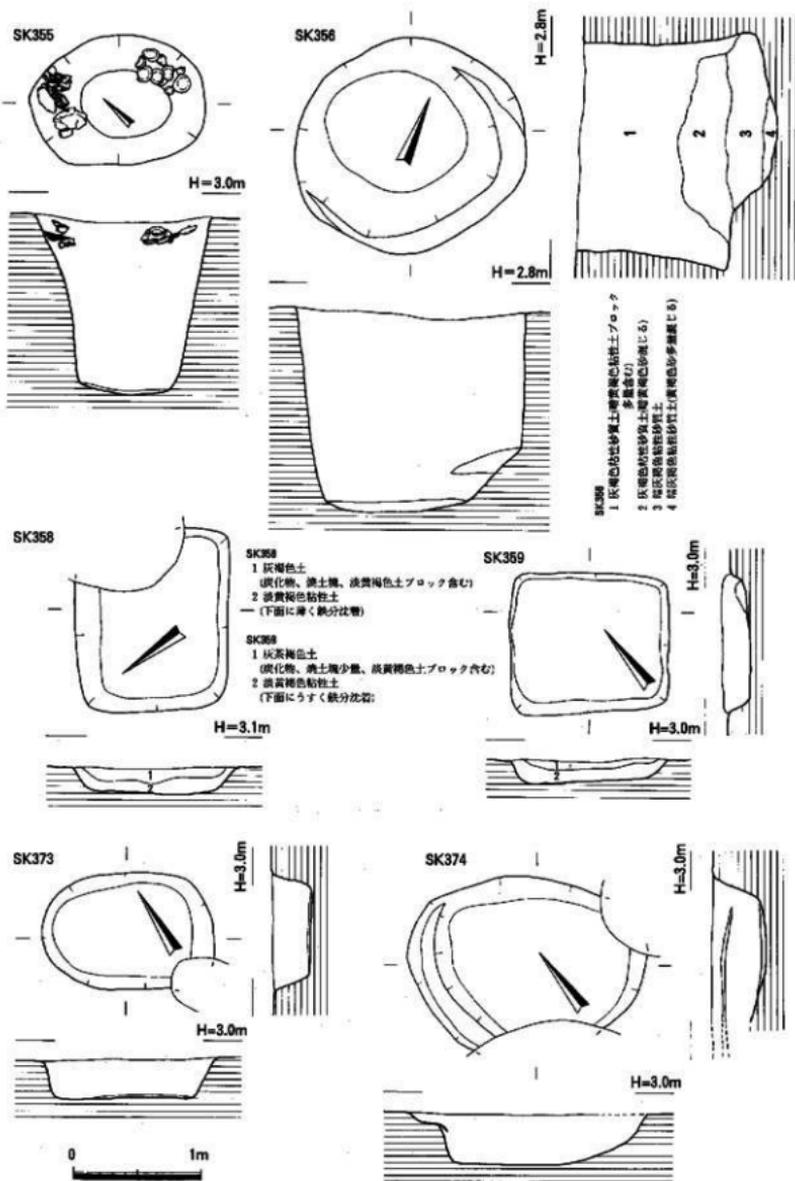
出土遺物(第26図179~188) いずれも上層出土の回転糸切り底の土師器である。179~183は小皿で、復元口径は8.5~10.0cmを測る。182・183を除いて板状圧痕を有する。184~188は坏である。復元口径は11.8~13.6cmを測り、187・188には板状圧痕がない。他に須恵質土器、中国陶器、白磁碗Ⅳ類等が出土したが細片が多い。土師器の法量から13世紀中頃の遺構と考えられる。

SK355(第27図) 1面B-4区で確認した楕円形の土坑である。長径1.35m、短径1.05m、深さ1.4mを測る。壁面は直立気味に立ち上がる。覆土は灰褐色粘性砂質土を主体とし、炭土や炭化物が混じる。上層の壁面際では2群の遺物群が確認できた。東側では土師器、西側では礫および陶磁器を主体とする。

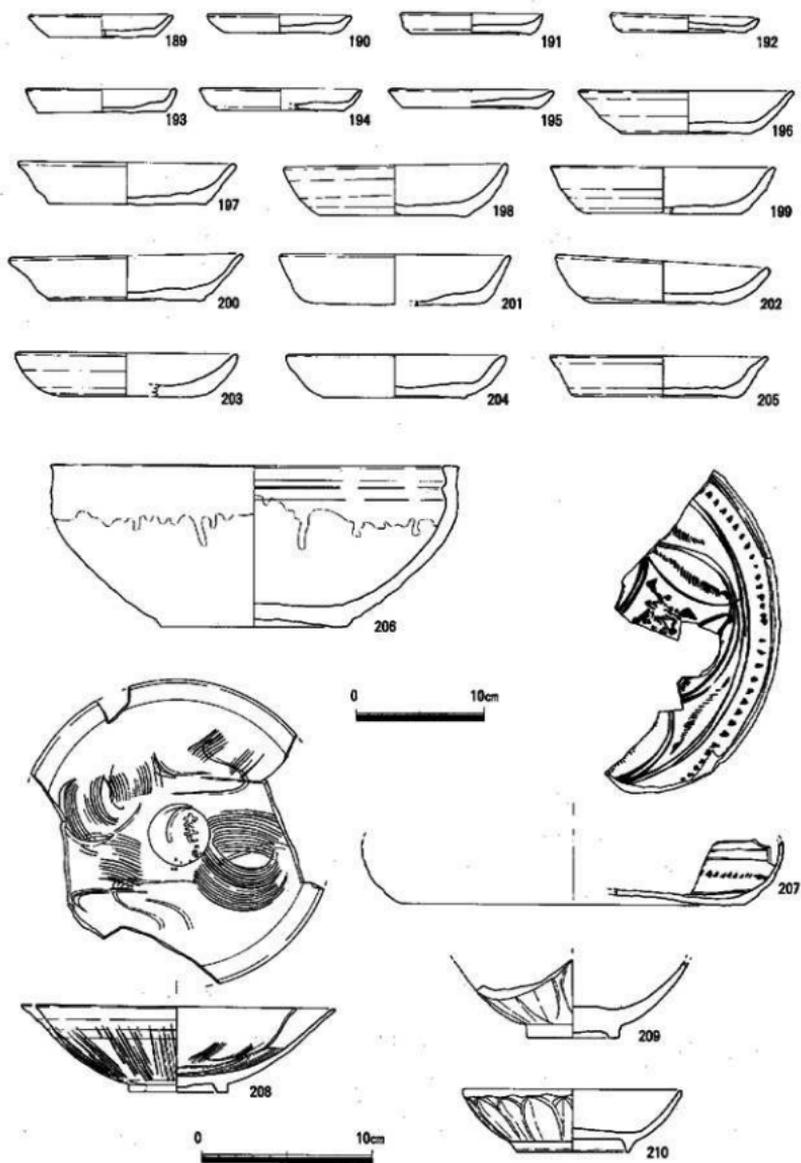
出土遺物(第28図) 189~205は回転糸切り底の土師器である。189~195は小皿で、いずれも板状圧痕を有する。復元口径は8.2~9.8cmを測り、その平均は8.9cmである。196~205は坏である。復元口径は12.2~13.3cmを測り、平均は12.8cmである。202~205には板状圧痕がない。206・207は中国陶器で、206は鉢である。復元口径31.8cm、器高12.8cmを測る。灰色の胎土に黒灰色や赤茶褐色の砂粒を多量に含む。内面の口縁下には断面三角形の突帯が1条巡り、内外面の上半には暗緑灰色の釉を薄く流しかける。露胎部分は暗赤褐色を呈する。207は黄釉陶器の盤である。内面にはオリーブ黄色の釉を施し、鉄釉による文様を有する。外面は無釉で、にぶい赤褐色を呈する。胎土には黒色砂粒が目立つ。208は同安窯系青磁の大碗で、外面には櫛状工具により条線を施す。内面は礫および片彫りによる施文がなされ、圈線で囲まれた見込みに「大吉」銘のスタンプを有する。また、口縁下には沈線が1条巡る。釉はオリーブ黄色で、体部の下端は露胎であるが、一部高台までおよぶ。209・210は龍泉窯系青磁である。209は碗Ⅰ-5・a類で、外面に蓮弁文を施す。釉は暗オリーブ灰色で、内外面に貫入が多い。210は坏Ⅲ-5・b類である。疊付きを除いて全面に施釉される。外面には鏝蓮弁文を有する。



第26图 SK090・125・352・354 出土遺物実測図 (1/3)



第27図 SK355・356・358・359・373・374 実測図 (1/40)



第28図 SK355 出土遺物実測図 (206~208は1/4、他は1/3)

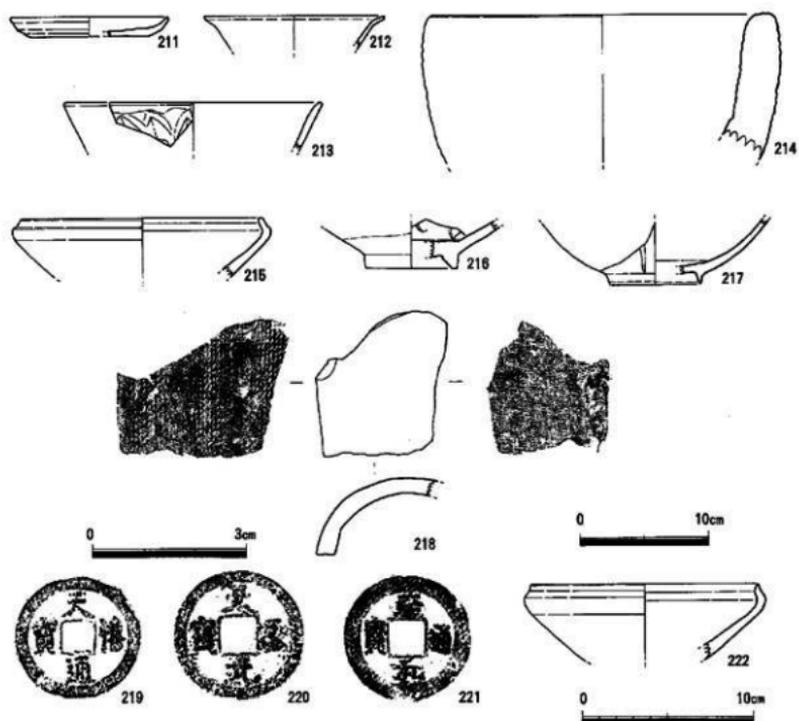
他に須恵質土器、白磁碗Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅵ類等の細片が出土している。これらの出土遺物から13世紀中頃の遺構に位置付けられる。

SK356(第27図) 1面C-2・3区に位置する土坑である。平面プランは径1.6~1.85mを測る円形を呈し、深さは1.55mを測る。壁面は直立し、部分的にオーバーハングしている。覆土にはブロックを多量に含み、堆積状況から人為的な埋土と考えられる。

出土遺物(第29図211~214) 211は復元口径9.2cmを測る土師器小皿で、外底部は回転糸切りである。板状圧痕はない。212は口禿の白磁皿Ⅹ類で、口縁部を外反させる。213は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・b類である。214は多孔質な石材を用いた石製容器である。復元口径は26.6cmを測る。出土遺物は大半が細片で、他には中国陶器、瓦、鉄滓等がある。13世紀中頃から後半の遺構であろう。

SK358(第27図) 1面B-3区で検出した隅丸長方形プランの土坑で、東側コーナー部は攪乱によって切られる。長さ1.4m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。底面から壁面にかけて厚さ約0.1mの粘土を貼り付け、その内部には炭化物や焼土塊が認められた。SK359に土層や規模が類似する。

出土遺物(第29図215) 龍泉窯系青磁碗片で、「く」字状に口縁部を内湾させる。内外面に透明な明オリブ灰色の釉が施される。他の土師器、青白磁等の細片が少量出土した。



第29図 SK356・358・359・373・374 出土遺物実測図 (219~221は1/1、214・218は1/4、他は1/3)

SK359(第27図) SK358の南東2m、ほぼ同一軸上の1面B-3区に位置する。一辺1.1~1.25mを測る隅丸方形の平面プランで、深さ約0.2mを測る。SK358と同様の土層を呈する。

出土遺物(第29図216・217) 216は白磁碗である。体部内面には片彫りによる文様を有し、見込みには段状の沈線が巡る。釉は黄味のあるオリブ色で、体部下半以下には施釉されない。217は龍泉窯系青磁の碗もしくは杯の皿類である。外面には蓮弁文の一部と思われる片彫りが遺存する。畳付きを除いて施釉される。他に回転糸切り底の土師器の細片が出土した。13世紀中頃から後半の土坑であろう。

SK373(第27図) 1面B-4区で確認した土坑で、SK374を切る。平面プランは長径1.35m、短径0.9mの楕円形を呈し、深さは0.3mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰褐色土である。

出土遺物(第29図218~221) 218は丸瓦片である。凸面は縄目叩きを粗くナゲ消し、凹面には布目が残る。色調はくすんだ灰褐色である。219~221は北宋代の銅銭で、219は「天禧通寶」(初鑄年:1017年)、220は「天聖元寶」(初鑄年:1023年)である。221は「至和通寶」(初鑄年:1054年)である。他に回転糸切り底の土師器、中国陶器、白磁、同安窯系青磁等の細片が出土した。

SK374(第27図) 1面SE351およびSK373に切られる土坑で、1面B-4区に位置する。不整な楕円形プランを呈し、長径1.85m、短径は推定で1.3mを測る。西側には狭いテラスを有し、深さは0.4mである。覆土は灰褐色土を主体とする。

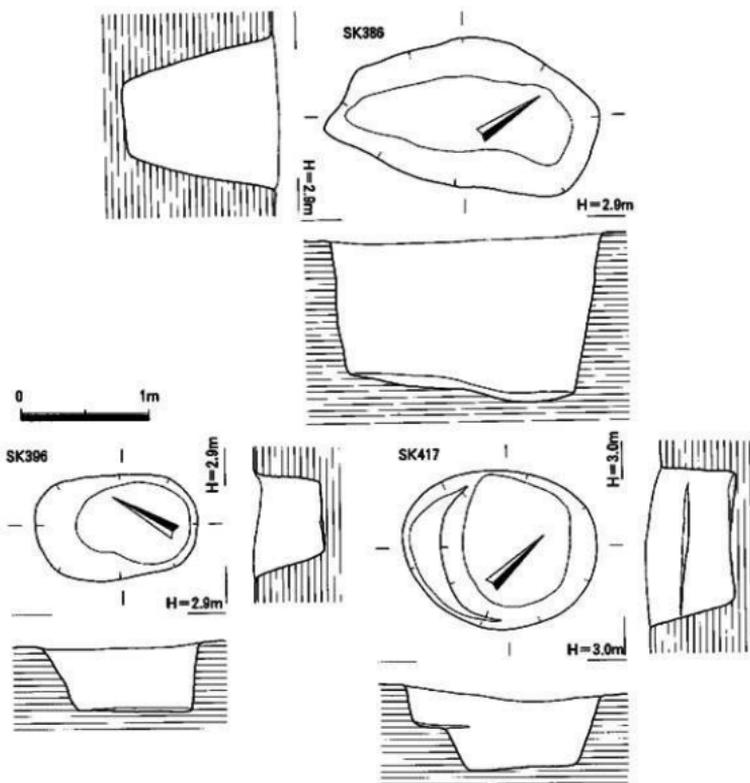
出土遺物(第29図222) 龍泉窯系青磁碗皿類である。口縁部は内湾し、端部は直立して収める。二次的加熱を受けるため、器面が荒れている。他の出土遺物には回転糸切り底の土師器や須恵質土器等があるが、いずれも細片である。また、錆化のため銭銘不明の銅銭が1枚出土している。

SK388(第30図) 1面B-4区で検出した。平面プランは不整な楕円形を呈し、長径2.15m、短径1.2m、深さ1.3mを測る。壁面の傾斜は急で、底面は南西から北東側に傾斜する。覆土は暗褐色粘性砂質土を主体とする。

出土遺物(第31図223~234) 223~231は回転糸切り底の土師器である。223~225は小皿で、復元口径は順に8.4、9.4、9.4cmを測る。224・225には板状圧痕が認められる。226~231は杯である。復元口径は12.0~13.8cmで、平均は13.0cmを測る。227・231を除いて板状圧痕を有する。232は中国陶器の四耳もしくは双耳の壺である。横耳は片側基部のみが遺存している。口頸部は直立し、屈曲して体部へと続く。内外面には光沢のある茶褐色の釉がかけられる。胎土は灰色、黒灰色を呈し、白色砂粒を含む。233・234は龍泉窯系青磁である。233は碗I-5・a類で、高台内部にまで釉が流れ込む。蓮弁の施文後に沈線が巡らせている。見込みには太目の沈線を配する。234は杯Ⅲ-5・b類で、見込みには沈線を有する。釉は暗緑色で、畳付きは露胎である。他に管状土錘の細片が出土している。これらの出土遺物からこの土坑は13世紀中頃に位置付けられる。

SK396(第30図) 1面C-4区に位置する小形の土坑で、やや不整な隅丸長方形を呈する。長さ1.25m、幅0.8m、深さ0.5mを測り、断面は逆台形をなす。覆土は褐色砂質土で、焼土および炭化物を含む。

出土遺物(第31図235~239) 235・236は回転糸切り底の土師器である。235は復元口径8.8cmを測る小皿で、板状圧痕はない。236は口径15.1cmの杯で、口縁部の1/3を欠損している。外底部には板状圧痕を有する。237は同安窯系青磁碗I-1・b類である。内外面に櫛状工具による施文を行う。オリブ黄色の釉が高台にまでおよぶ。238・239は双六の駒と考えられる円盤形の土製品である。238は径1.9cm、厚さ1.2cmを測り、全体に器面が風化する。239は径1.6~1.7cm、厚さ0.6cmを測る。共に土師質の土器片を再加工したものと推定され、側縁に鈍い稜を残す。



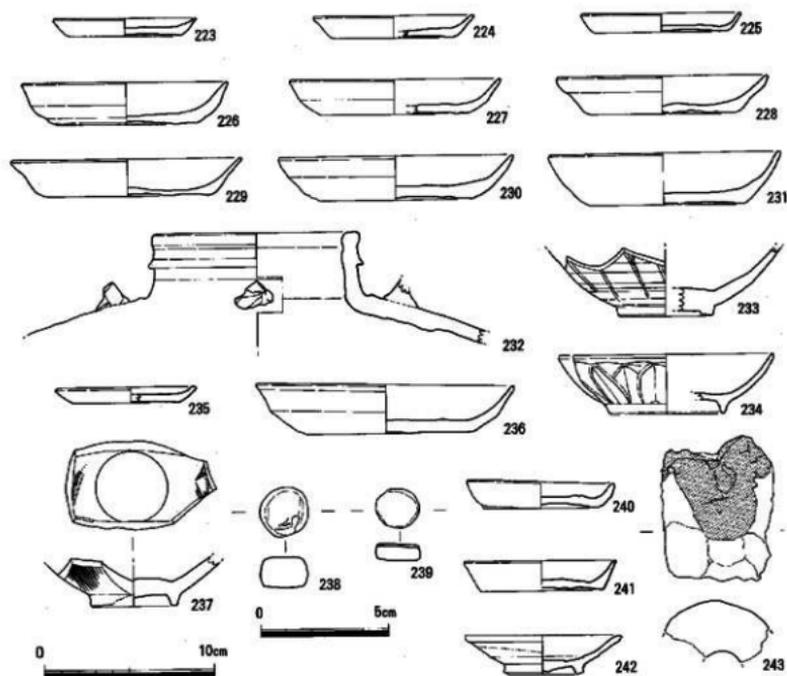
第30図 SK386・396・417 実測図 (1/40)

SK417(第30図) 1面B-3区で検出した楕円形土坑である。長径1.5m、短径1.25m、深さ0.65mを測り、南西側にテラスを有する。断面は逆台形を呈し、覆土は灰褐色土で、小礫を含む。

出土遺物(第31図240~243) 240・241は回転糸切り底の土師器小皿で、板状圧痕はない。復元口径は順に8.6、8.9cmを測る。共に内底部までヨコナダを施す。242は白磁皿Ⅲ-2類である。口縁部は僅かに肥厚させる。釉は濁りのある灰白色で、外面下半には施釉されない。243は釉の羽口片で、端部はガラス質化する。胎土には白色砂粒が多量に含まれる。他に白磁碗Ⅸ類等の細片が出土している。これらの出土遺物から13世紀後半代の遺構に比定されよう。

SK151(第32図) 2面B・C-1区で確認した。平面プランは不整な楕円形で、長径1.8m、短径1.25m、深さ1.1mを測る。北半部には平坦面を有する。断面は一部に壁面がオーバーハングするが、逆台形を呈する。上層を主体に土師器小皿・坏が投棄されていた。

出土遺物(第33図244~262) 244~260は土師器で、このうち244~251は小皿である。いずれも外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。口径は8.2~10.0cmを測り、その平均は9.1cmである。244は完

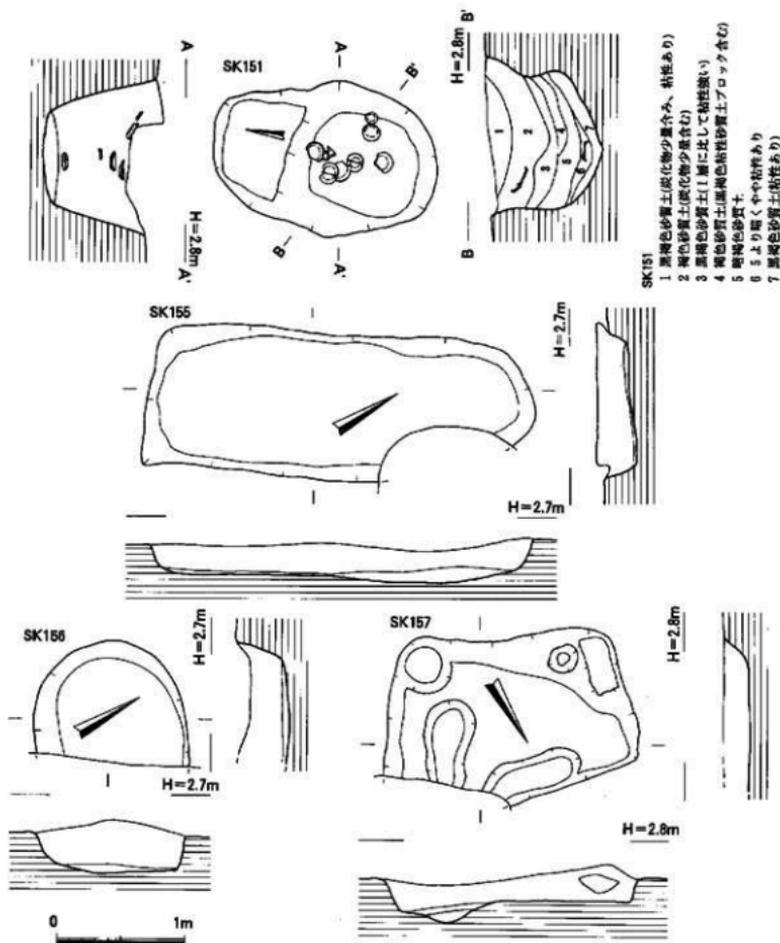


第31図 SK386・396・417 出土遺物実測図 (238・239は1/2、他は1/3)

形品である。252～259は坏で、小皿同様に板状圧痕を有する回転糸切り底である。252～258の口径は15.4～16.1cmで、平均は15.7cmを測る。259は大形の坏で、口径は18.1cmを測る。内底部までヨコナデを施し、器面に凹凸がある。260はミニチュアの羽釜で、口径5.4cm、器高4.3cmを測る。器面に煤等の付着は認められない。外面には銕を貼付し、内外面ともにヨコナデ調整を行なうが、外面下端および外底部にはヘラ削りを行う。261・262は共に白磁皿Ⅲ-1類である。見込みの軸を輪状に削り取る。他に瓦器、同安窯系青磁皿等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀後半の土坑と考えられる。

SK155(第32図) 2面B・C-2区に位置し、SK156・157を切る。平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、長さ3.0m、幅1.15m、深さ0.25mを測る。覆土は褐色砂質土を主体とし、黄褐色砂質土のブロックや小礫を含む。

出土遺物(第33図263～267) 263～265は土師器である。263は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は9.0cmを測る。板状圧痕はない。264・265は坏で、復元口径は共に15.0cmである。外底部は、264は回転糸切り、265は回転ヘラ切りで、264には板状圧痕が認められる。266は中国陶器の壺で、口縁部は玉縁状に肥厚する。茶褐色および暗オリブ色の釉を施す。胎土は淡灰色を呈し、堅緻である。267は同安窯系青磁皿Ⅰ-1・b類である。櫛状工具および片彫りによる施文を有する。外面の体部下

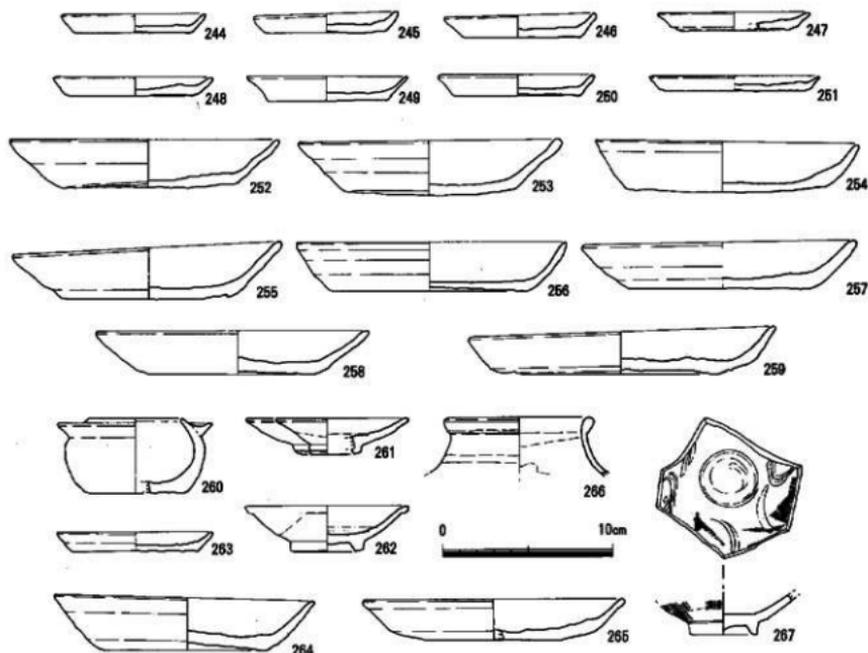


第32図 SK151・155・156・157 実測図 (1/40)

以下は露胎である。他に瓦器や縄目叩きの瓦片が出土した。これらの出土遺物から12世紀中頃の土坑と考えられる。

SK156(第32図) 2面B-2区に位置する。東側を2面SK155に切られるため、遺構の全容は不明である。現況で、幅1.2m、深さ0.4mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は暗褐色砂質土で、炭化物を少量含む。

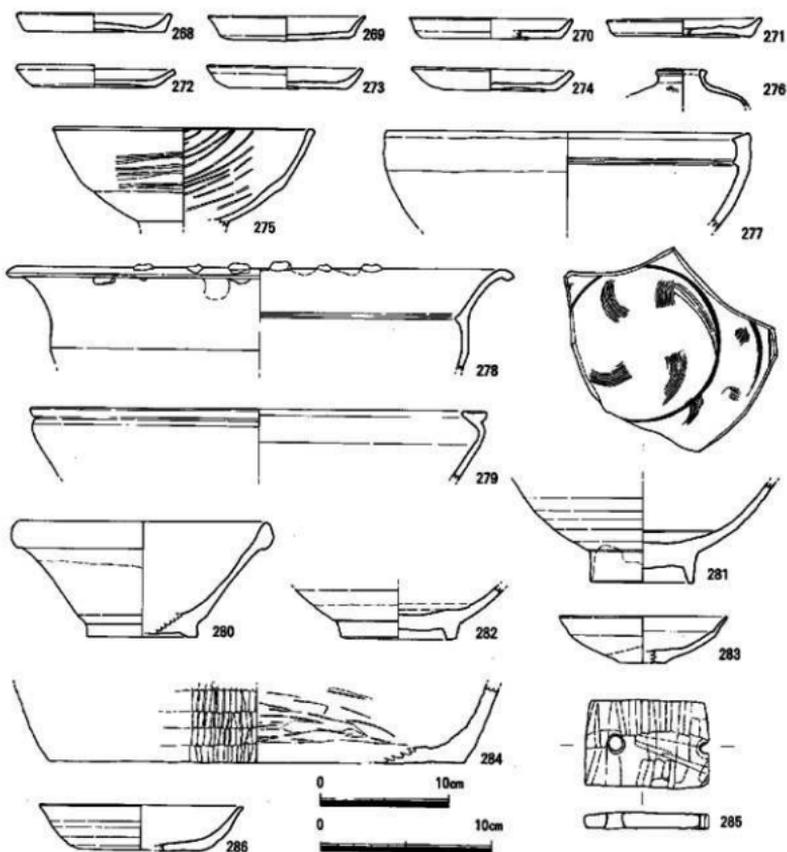
出土遺物(第34図268~285) 268~274は土師器小皿で、復元口径は8.8~9.4cmを測る。外底部は268~270は回転ヘラ切り、他は回転糸切りである。271を除いて板状圧痕を有する。275は和泉型の瓦器



第33図 SK151・155 出土遺物実測図 (1/3)

碗である。外面の調整は口縁部をヨコナデ、体部上半は粗い横方向のへら研磨を行なうが、下半にはへら削りを残す。内面には斜方向に疎らな研磨を施す。276~279は中国陶器である。276は壺で、短い頸部に肩が付く。外面および口縁部内面に褐色釉がかけられる。胎土は精良で、灰色を呈する。肩には目跡が残る。277は内外面共に無釉の鉢で、灰赤色を呈する。胎土には白色砂粒が多く含まれる。278・279は鉢である。278は広い鐙状の口縁部を有し、黄釉を内面および口縁部外面に施す。口縁端部は釉を拭き取り、目跡を残す。胎土には黒色砂粒が多く含まれる。279は折り返しの口縁部を呈し、僅かに凹面をなす上面には目跡が残る。内外面にやや光沢のある灰オリーブ色の釉がかけられる。280~283は白磁である。280は碗IV-1・a類、281は碗V-4・b類、282は碗Ⅲ-2類である。281は内面に櫛状工具による施文を有し、見込みには沈線が巡る。283は皿VI-1・a類で、内面および外面の上半にオリーブ黄色の釉を行なう。284・285は滑石製品で、284は石鍋である。外面にはノミによる細かい削痕がみられ、底部および体部下半には煤が付着する。内面の調整は横方向に粗く行われる。285は温石で、石鍋の再加工作品である。長さ7.2cm、幅5.1cm、厚さ0.9cm、重量92gを測り、径1.1cmの穿孔を有する。全面に研磨が施されており、端部の半円孔は折損によるものではない。これらの出土遺物から12世紀中頃の土坑と考えられる。

SK157(第32図) 2面B-2区に位置し、北東側を2面SK155に切られる。平面プランは不整な形状を呈し、長さ1.85m、幅1.25m、深さ0.2mを測る。底面には凹凸があり、上面からの掘り込みの可能性



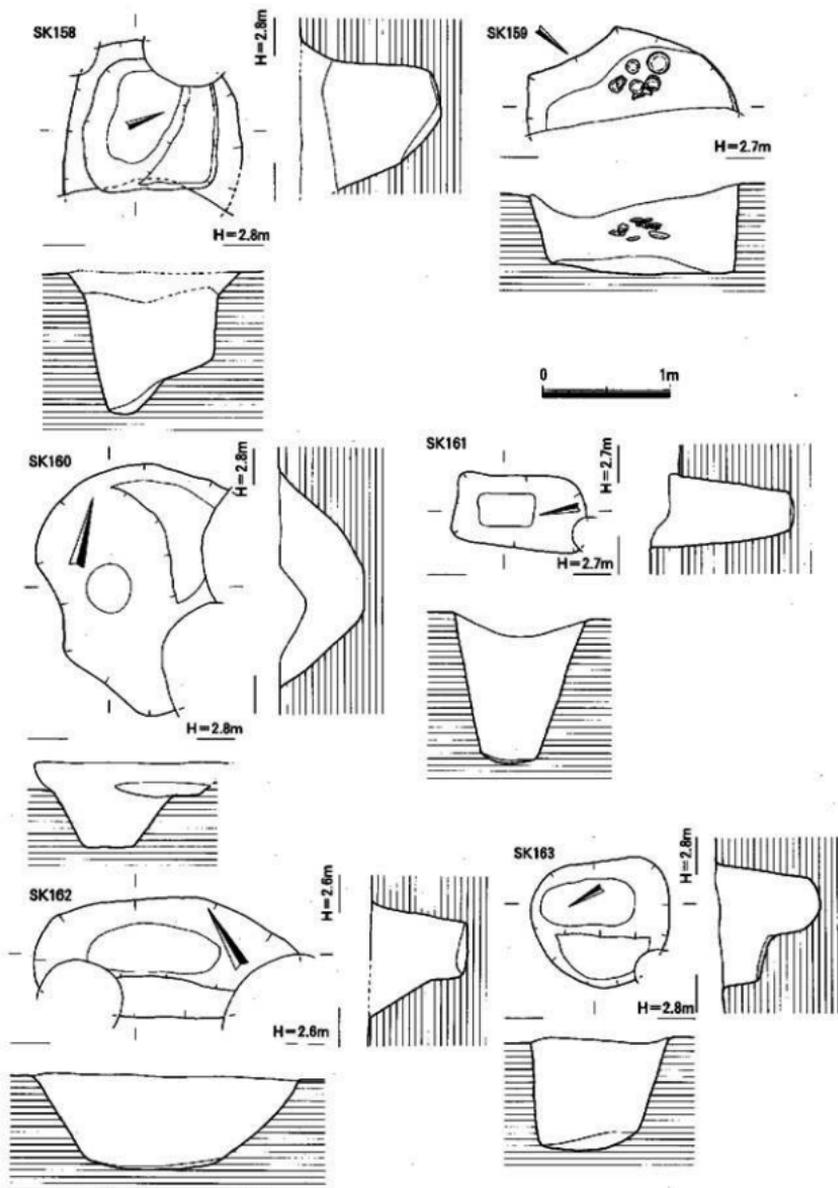
第34図 SK156・157 出土遺物実測図 (284は1/4、他は1/3)

もある。覆土は灰味のある褐色砂質土で、炭化物を少量含む。

出土遺物(第34図286) 土師器坏の小片で、復元口径は11.8cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。他に中国陶器、白磁碗IV類、同安窯系青磁等の細片が出土している。

SK158(第35図) 2面B・C-2区で検出した土坑で、南東側を2面SE152に切られる。全容は不明であるが、現況で幅1.35mを測る。北側には平坦面を有し、南側は深く掘り込まれる。その深さは1.1mを測る。覆土は暗灰褐色粘性の砂質土を主体とし、下層には黄褐色砂が混じる。

出土遺物(第36図) 287~290は土師器小皿である。287・288は回転へら切り底で、板状圧痕はない。復元口径は順に9.0、10.0cmを測る。289・290の外底部は回転糸切りで、290には板状圧痕が認められる。復元口径は順に9.4、10.4cmを測る。291は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器坏で、復元口径は



第35图 SK158·159·160·161·162·163 实测图 (1/40)

14.0cmである。292・293は中国陶器である。292は壺底部で、外面には濁ったオリーブ黄色の釉が施される。内面は下地に茶釉を施釉し、更に外面と同様の釉を粗くかけている。胎土は赤褐色を呈し、多量に砂粒が混じる。293は鉢もしくは盤で、口縁部は短く折り返す。内面には灰オリーブ色の釉がかけられるが、外面は露胎である。口縁部上面には目跡が残る。淡黄灰色の胎土には黒色砂粒が混じる。294・295は白磁である。294は碗Ⅴ類、295は碗Ⅶ-2類である。296は黒釉の天目碗である。外面下半の屈曲部以下は露胎である。口縁部の釉は薄く施され、茶褐色を呈する。胎土は灰色でやや粗い。他の出土遺物には瓦器片、釘等がある。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

**SK159(第35図)** 2面B-2区に位置する。2面SE152に切られ、SK160を切る。北西側壁面は直立し、深さは0.55mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土で、中位では比較的多量に遺物が出土した。

**出土遺物(第36図297~305)** 297~303は回転糸切り底の土師器で、いずれも板状圧痕を有する。297~301は小皿で、復元口径は8.7~9.5cmを測り、平均は9.0cmである。302・303は環で、復元口径は順に13.6、16.0cmを測る。304は中国陶器の壺である。外底部を除く外面に褐色、暗灰オリーブ色の釉がかけられる。胎土には赤褐色を呈し、黒色砂粒を含む。305は白磁碗Ⅳ-1・a類で、内面の下半には沈線が巡る。釉色は光沢のある明灰白色で、外面下半は露胎である。他に白磁碗Ⅶ類、滑石製石鍋等の細片が出土している。12世紀後半の遺構と推測される。

**SK160(第35図)** 2面SK159に切られる土坑で、2面B-2区で検出した。現況で平面プランは不整な楕円形を呈するものと考えられ、長径2.0m、短径は推定で1.5mを測る。北東側に小規模な平坦面を有する。断面は播鉢状にすばまり、深さは0.65mである。覆土は褐色砂質土を主体とする。

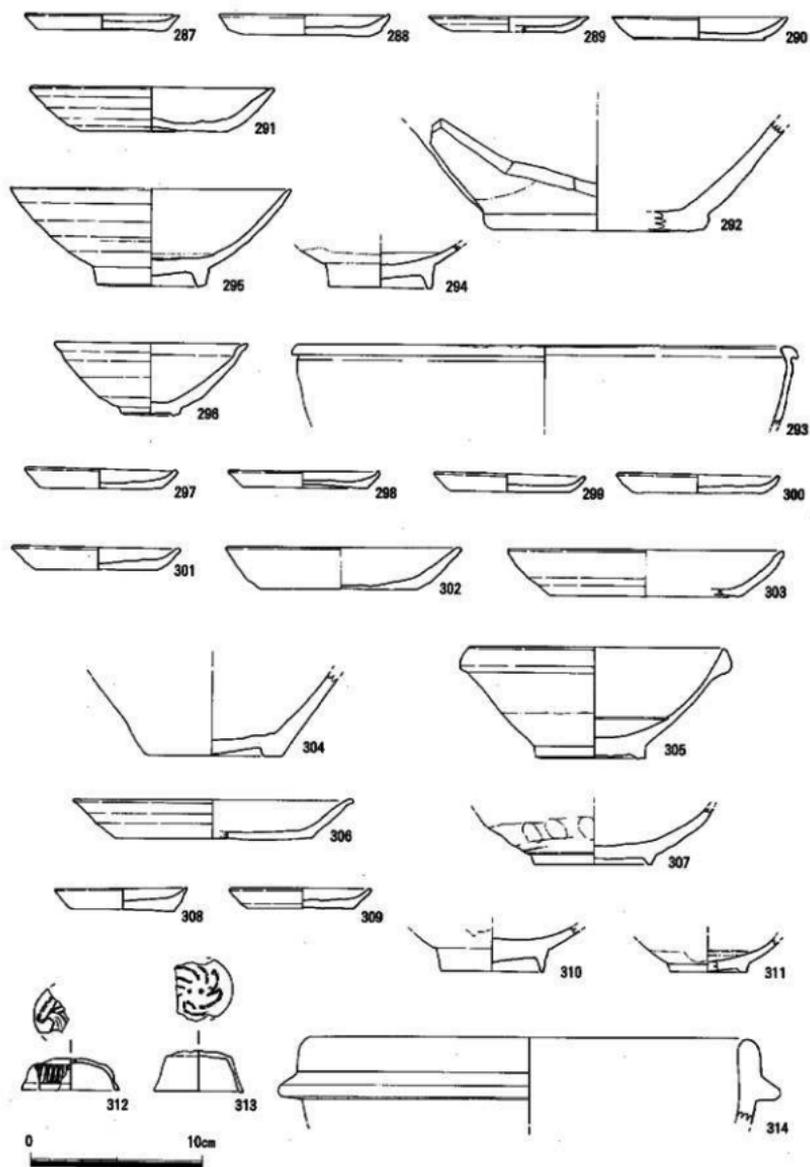
**出土遺物(第36図306~307)** 306は回転糸切り底の土師器環である。復元口径は16.4cmを測り、板状圧痕を有する。胎土には多量の金雲母片を含む。307は瓦器碗である。断面逆台形の低い高台を貼付する。外面はへら研磨するが、指オサエが残る。内面には平滑なナデを施す。他に中国陶器、白磁碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類等の細片が出土した。出土遺物や重複関係から12世紀後半の遺構に比定される。

**SK161(第35図)** 2面B-2区に位置し、2面SB461の柱穴に切られ、SD164を切る。小規模な隅丸長方形の土坑で、長さ1.6m、幅0.6mを測る。深さは1.1mで、底面も上面同様に長方形を呈する。覆土は灰褐色砂質土を主体とする。

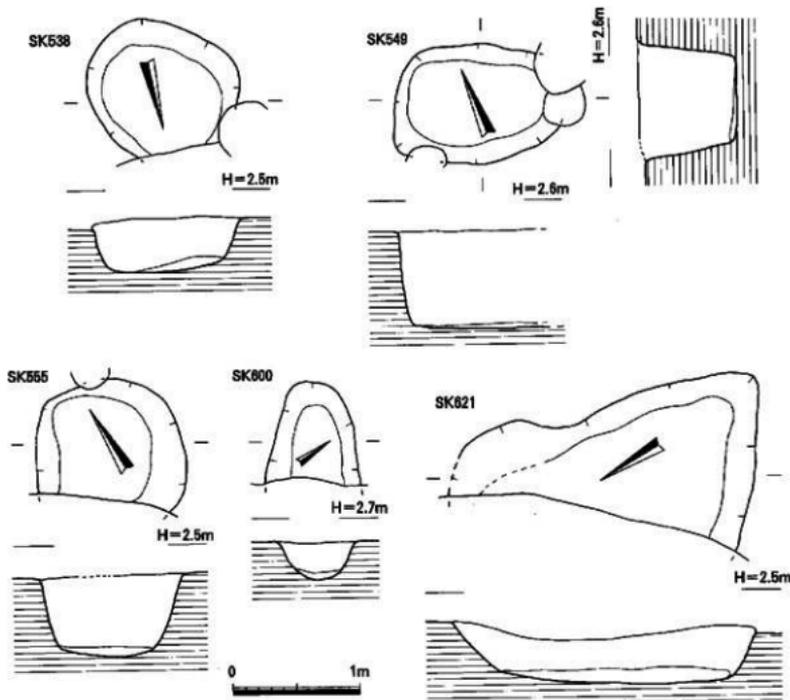
**出土遺物(第36図308~314)** 308・309は土師器小皿である。共に外底部は回転糸切りで、板状圧痕は認められない。復元口径は順に7.8、8.1cmを測る。310・311は白磁である。310は碗Ⅴ類、311は皿Ⅲ-1類である。釉は灰白色で、体部外面の下半以下には施釉しない。見込みの釉は輪状にカキ取る。312・313は青白磁である。312は合子の蓋で、体部には鑄文、天井部には花文が型押しにより施文される。313は梅瓶の蓋で、型押しにより天井部に花文を有する。内面は露胎である。314は滑石製の石鍋で、外面には煤が付着する。他に土師器環、中国陶器等の細片が出土した。

**SK162(第35図)** 2面B-2区に位置する土坑で、2面SK163に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径は推定で2.0m、短径は0.95m、深さは0.75mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とし、下層には黄褐色砂が多量に混じる。

**出土遺物(第36図315~317)** 315は瓦器碗である。低い高台をヨコナデによって貼付し、内面にはへら研磨を施す。316は中国陶器の四耳壺である。口縁部は「J」字状を呈し、その内面には目跡が残る。体部上半に横耳を有し、その直上には沈線が1条巡る。内外面には淡オリーブ黄色の釉が施される。317は同安窯系青磁碗Ⅰ-1・b類で、体部外面下半は露胎である。他に白磁碗Ⅳ類等の細片が出土している。



第36図 SK158・159・160・161 出土遺物実測図 (1/3)



第37図 SK538・549・555・600・621 実測図 (1/40)

SK163(第35図) SK162を切る円形プランの土坑で、2面B-2区で検出した。径1.0~1.1mを測り、北西側に平坦面をもつ。底面までの深さは0.8mである。覆土は灰褐色砂質土を主体とする。

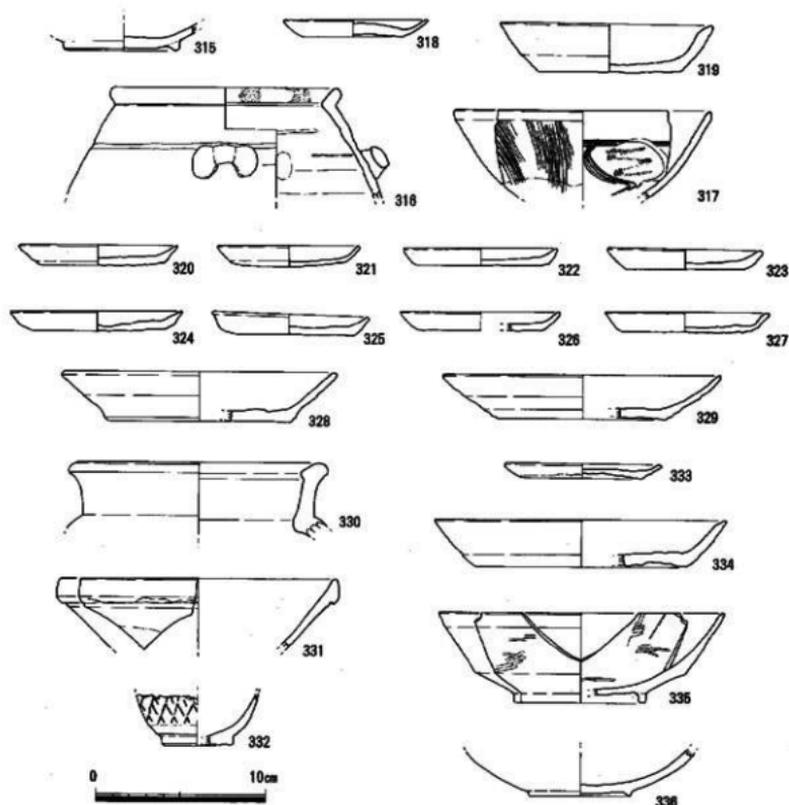
出土遺物(第38図318・319) 共に回転糸切り底の土師器で、板状圧痕はない。318は上層出土の小皿で、口径8.5cmを測る。319はほぼ完形の環で、口径は12.5cmを測る。内底部までヨコナデ調整を行う。他に中国陶器や白磁等の細片が出土している。

SK538(第37図) 2面B-3区で確認した円形土坑で、2面SX456に切られる。径は1.1~1.2、深さは0.4mを測る。断面台形を呈し、覆土は褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第38図320~323) いずれも土師器小皿で、320・323は完形品である。外底部は320が回転ヘラ切り、他は回転糸切りで、全てに板状圧痕が認められる。口径は8.2~9.2cmを測る。他に中国陶器、白磁の細片が出土した。これらの出土遺物から遺物12世紀中頃の遺構と考えられる。

SK549(第37図) 2面B-3区で検出した。西側をSB462の柱穴に切られる。やや不整な隅丸長方形の平面プランを呈し、長さ約1.4m、幅0.95m、深さ0.8mを測る。断面は逆台形で、覆土は褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第38図324~332) 324~327は土師器小皿である。184は回転ヘラ切り底で、板状圧痕がない。

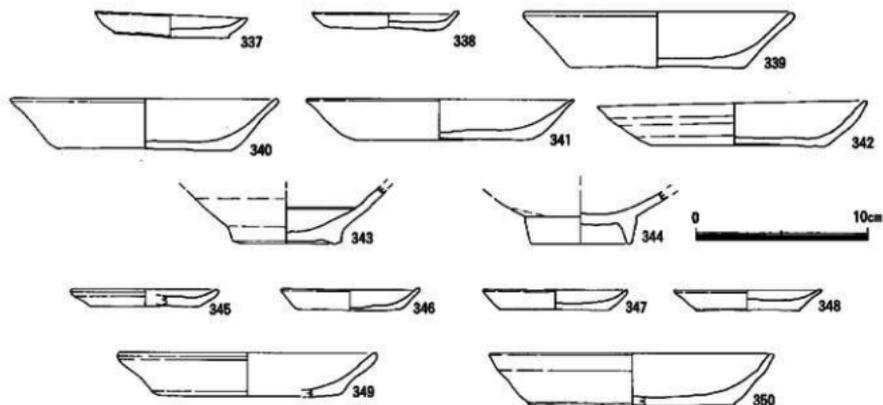


第38図 SK162・163・538・549・555 出土遺物実測図 (1/3)

く、他は板状圧痕を有する回転糸切り底である。復元口径は9.4~10.0cmを測る。328・329は土師器坏である。共に回転糸切り底で、板状圧痕が認められる。復元口径は順に15.8、16.2cmを測る。330は中国陶器の壺である。口縁部は内傾し、内面に段をもつ。内外面に茶褐色の釉がかけられる。胎土は灰色を呈し、やや粗い。331は白磁碗Ⅳ類である。体部下半には施釉されない。332は青白磁の小碗である。外面には型押しによる三角文が陽刻される体部外面下端以下は露胎で、濁った灰色を呈する。他に白磁碗Ⅴ類、鉄製品等が出土した。これらの出土遺物から12世紀中頃の土坑と考えられる。

SK555(第37図) 2面C-3区に位置する。南側を1面遺構に切られるため、全容は不明である。径1.1~1.3mの楕円形プランを呈するものと推定される。断面は逆台形で、深さは0.6mを測る。覆土は粘性のある褐色砂質土である。

出土遺物(第38図333~336) 333・334は回転糸切り底の土師器で、共に板状圧痕を有する。333は小



第39図 SK600・621 出土遺物実測図 (1/3)

皿で、口径9.0cmを測る。334は復元口径17.2cmを測る坏である。335・336は瓦器碗である。335は断面逆台形のやや高い高台を有する。体部下半で、稜をもって屈曲する。口縁部はヨコナデ、体部はヘラ研磨を施す。336には断面逆三角形の低い高台がつく。外面はやや粗いナデ、内面は平滑に研磨する。他に白磁碗IV・V類等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀後半に属する遺構と考えられる。

SK600(第37図) 2面B-4区の調査区壁面際で検出したため、南東側は調査区外に位置する。幅0.75m、深さ0.3mを測り、断面は船底形を呈する。溝状遺構の可能性もある。覆土は褐色砂質土を主体とする。

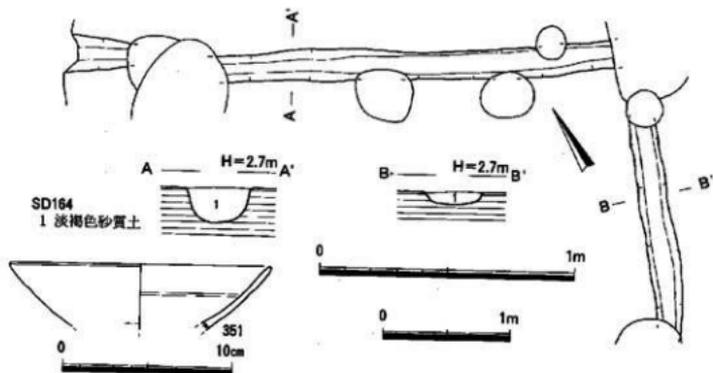
出土遺物(第39図337~344) 337~342は回転糸切り底の土師器で、いずれも板状圧痕を有する。337・338は小皿で、口径は順に8.8、8.6cmを測る。339~342は口径15.4~15.7cmを測る坏である。343・344は白磁である。343は碗IV-1・a類で、内面下半に沈線が1条走る。見込みは輪状に窪む。344は碗V類である。高台際まで施釉される。他に中国陶器、龍泉窯系青磁碗I類等の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀後半代の遺構と考えられる。

SK621(第37図) 2面B・C-3区で確認した不整形の土坑である。北西側は1面遺構に切られる。断面は逆台形を呈し、深さは0.35mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色砂質土で、土塊および炭化物が混じる。

出土遺物(第39図345~350) いずれも回転糸切り底の土師器である。345~348は小皿で、348を除いて板状圧痕が認められる。復元口径は8.4~8.6cmを測る。349・350は坏で、共に板状圧痕はない。復元口径は順に15.0、16.2cmである。他に白磁碗IV類、同安窯系青磁等の細片が出土した。これらの出土遺物から13世紀前半に属する遺構と考えられる。

#### 4) 溝(SD)

SD164(第40図) 2面B-1・2区で検出した「L」字状の溝で、南端部は1面遺構に切られるものの延伸しない。西側は調査区外に延びている。また、2面SB461の柱穴、2面SK161に切られる。幅0.2~



第40図 SD164 実測図 (断面図は1/20、平面図は1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

0.3mを測り、深さは東西方向の部分では約0.15m、南北方向では0.05~0.1m程度と浅くなる。覆土は淡褐色砂質土である。

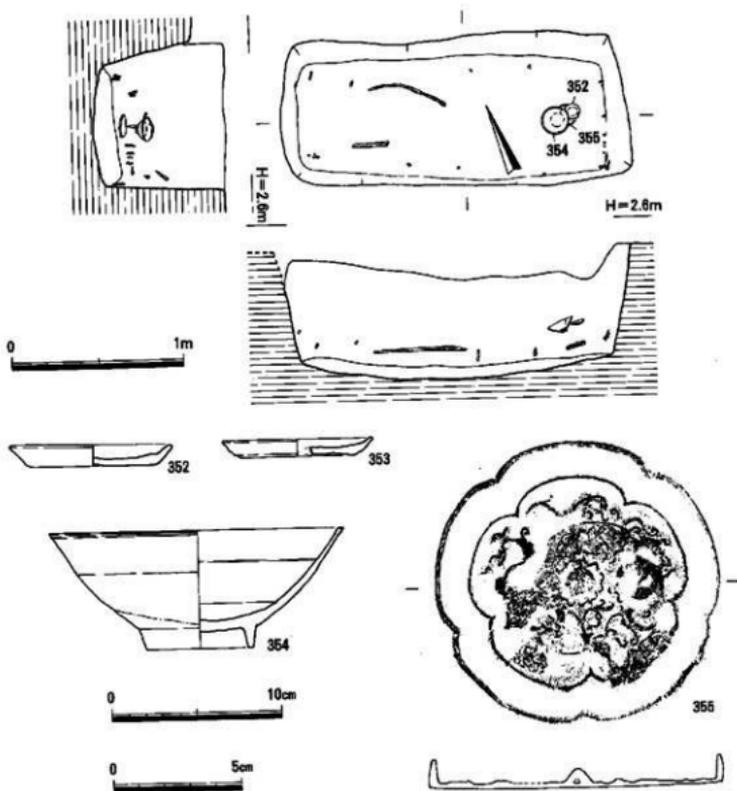
出土遺物(第40図351) 白磁碗で、体部は直線的に大きく開く。体部内面の上半には沈線有する。軸は光沢のある灰オリブ色である。他に回転糸切り底の土師器小皿、瓦器、中国陶器等が出土しているが、いずれも細片である。

#### 5) 埋葬遺構(SX)

ここでは2面の比較的近接した位置において確認した5基の埋葬遺構について報告する。このうち3基は木棺墓(SX153・456・457)、2基が土墳墓(SX154・156)で、いずれも供献・副葬遺物を有する。また、SX456を除いて人骨が遺存していた。なお、出土人骨および金属器の一部(銅鏡、銅銭)の保存科学的調査については付論1・2において詳述されているため、併せて参照されたい。

SX153(第41図) 2面B-2・3区に位置する木棺墓である。墓墳の平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ2.05m、幅0.9m、深さ0.7mを測る。断面は箱形に近い逆台形をなす。鉄釘の出土位置から長さ約1.7m、幅約0.65mの木棺規模が推定される。遺存状況不良ながらも棺内西側には下肢骨が遺存しており、頭位方向は東側、N-111°-Eと考えられる。その頭位では土師器小皿1点(352)、白磁碗1点(354)、銅鏡1面(355)が出土した。その出土状況から前2点は棺上の供献遺物で、蓋の崩壊に伴い、棺内に転落したものと推定される。また、その下位においては骨小片および櫛と考えられる遺存不良な木質が認められた。木質には金を主体とする被膜が確認されている(付論2参照)。なお、銅鏡出土位置は鉄釘の検出レベルとほぼ同一であることから棺内副葬遺物と考えられ、鏡面を上にした状態で出土した。その鏡背面には木質および繊維が付着していたことから、布に包んだ状態で木箱等に収められていたものと想定される(詳細は付論2参照)。

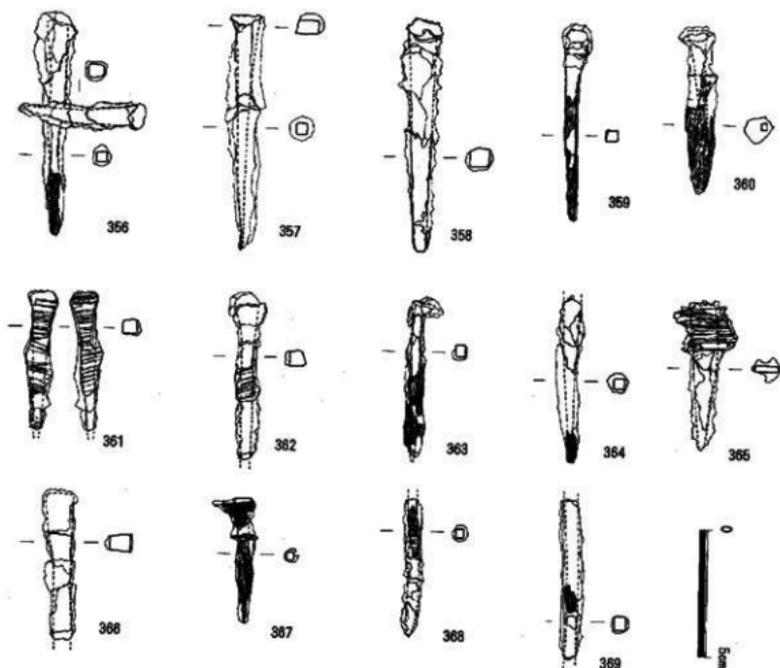
出土遺物(第41・42図) 352・353は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は順に9.2、8.6cmを測る。352には板状圧痕が認められる。353は墓墳覆土中から出土した。354は白磁碗V-4・a類である。口縁部上面は平坦で、見込みには沈線が巡る。355は五花形の銅鏡(瑞花鸞鳥五花鏡)で、面径11.5cm、重量271.6gを測る。蓮華形の鈕座に円錐形の鈕が付き、その頂部はやや丸味を有する。内区の上下には瑞花唐草文を、左右には内向きの鸞鳥を配する。内外区の境界には周縁同様の五花形の界線が巡り、



第41図 SX153実測図 (1/30) および出土遺物実測図(1) (355は1/2、他は1/3)

一段高い外区には文様を有するが、錆上がりが悪く極めて不鮮明である。周縁は幅0.2cm前後、高さ0.6cmを測り、内傾して立ち上がる。鏡胎の厚みは外区で0.3cm、内区で0.2cmを測る。鏡面は僅かに凸面をなし、約1/2には光沢が残る。356~369は鉄釘である。断面方形を呈し、頭部は短く「L」字状に折れる。完形品の全長は9cm前後のものと5~6cmのものがあり、2種類以上の釘が使用されている。遺存する直交方向の木質から棺材の厚さは2cm程度と推測される。356は南東隅の下端から出土したもので、出土状況から図上の縦方向の釘は側板と小口板の、横方向の釘は底板と小口板の結合に用いられたと考えられる。以上の出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

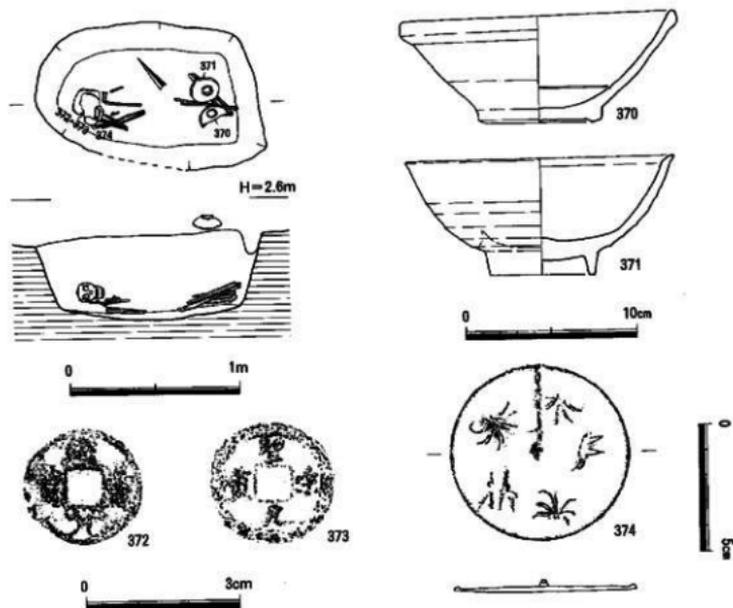
SX154(第43図) 2面B-2区で確認した土墳墓である。墓壇の平面プランは不整な隅丸方形で、長さ1.3m、幅0.85m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形をなす。墳内で出土した人骨は頭を右に向け、同方向で右腕を胸側にし、両腕を交差した状態で確認できた。また、下肢は左側に付けるが、現況でのその姿勢は不自然であることから、緊縛状態で埋葬されたものと推定される。頭位方向は北西側で、



第42図 SX153 出土遺物実測図(2) (1/2)

N-50°-Wである。左手は右頬の下に位置し、その掌部分には鏡面に上にした銅鏡1面(374)が置かれていた。鏡面のほぼ中央部には幅3cm程度の木質と推定される痕跡やその周囲には紙質と思われる付着物が認められる(付論2参照)ことから、紙に包んだ上で、木箱等に収められていたものと推定される。また、右眼窩からは銅鏡2枚(372・373)が鏡銘の天地を向かい合わせた接着状態で出土した。これらの背面には紙と考えられる繊維が認められ(付論2参照)、両者を同一の紙に包んで副葬したものと考えられる。また、下肢側の墓壙上面からは伏せた状態で、白磁碗2点(370・371)が出土した。調査時においてはこれら2点を包含層出土遺物として取り上げたが、下面でこの土壙墓を検出したことや、墓壙覆土中の破片との接合ができたことから供献遺物と判断した。

出土遺物(第43図) 370・371は白磁碗である。370は碗IV-1・a類で、見込みには沈線が巡る。体部の1/4を欠損する。371は碗V-2・a類で、完形品である。釉は僅かに黄味を帯びる。372・373は銅鏡である。372は唐代の「乳元重寶」(初鑄年:759年)、373は北宋代の「聖宋元寶」(初鑄年:1101年)である。374は面径7.1cm、重量28.9gを測る銅鏡で、平面長方形の素鈕には直線的に紐(付論2参照)が遺存している。鏡背面には3本の草木および双鳥を表現し、無圖である。周縁の断面は幅、高さ共に0.1cm程度の低い台形状を呈する。鏡胎の厚さは0.1~0.15cmで、鏡面は僅かに凸面を呈する。他に覆土中より回転糸切りおよびへら切り底の土師器や瓦器、青白磁等の細片が少量出土している。これら

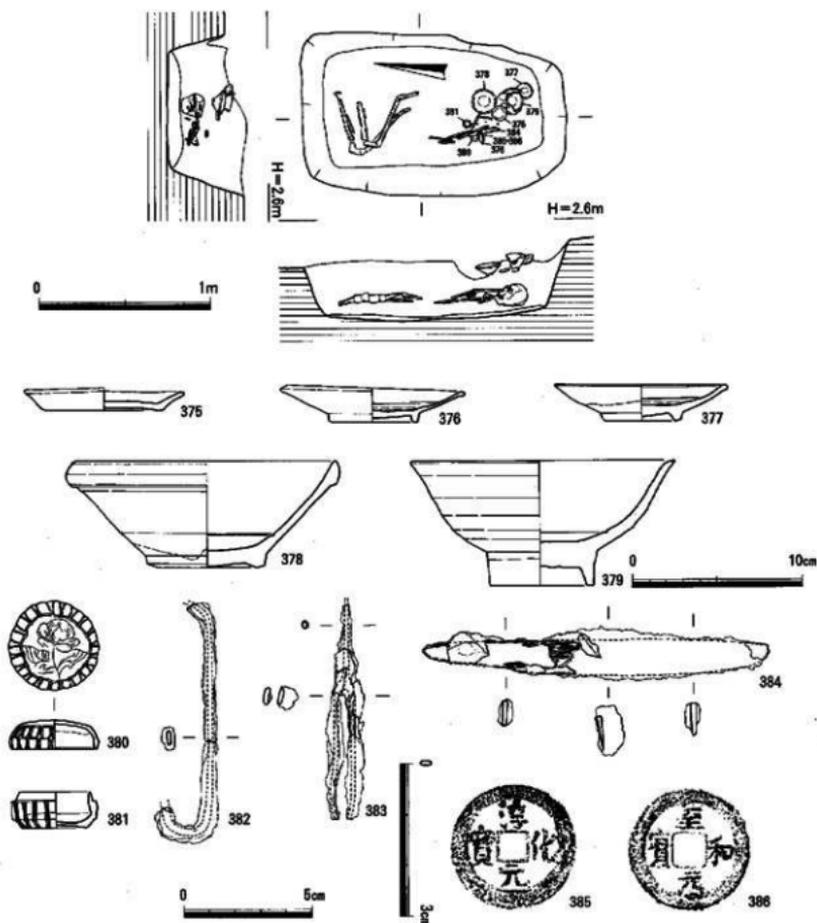


第43図 SX154 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (372・373は1/1、374は1/2、他は1/3)

の出土遺物から12世紀中頃の遺構と考えられる。

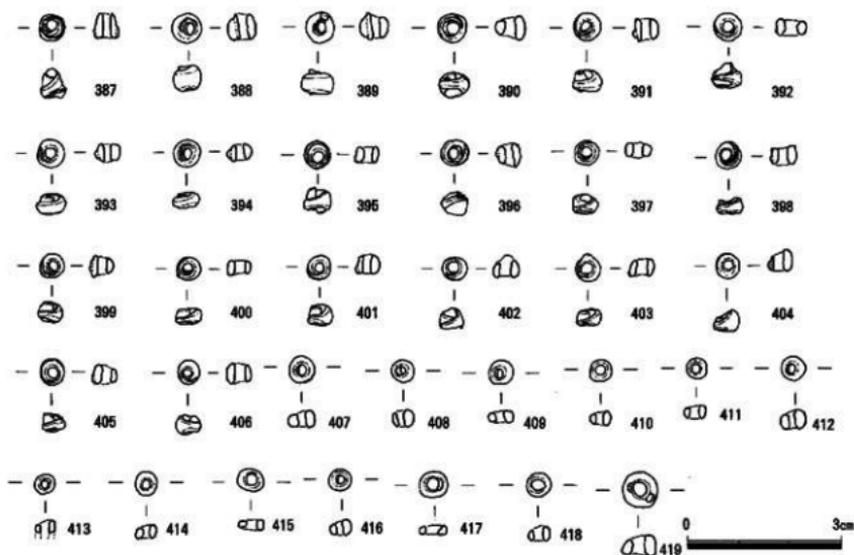
SX165(第44図) 2面A・B-2区に位置する土墳墓である。墓墳の平面プランは長さ1.55m、幅0.95mを測る隅丸長方形を呈する。断面は逆台形をなし、深さは0.35mを測る。墳内に遺存する人骨の検出状況は、頭をやや左側に向けた状態で、同方向に両腕を置き、下肢を「く」字状に曲げて同方向に倒した状態であった。頭位方向はほぼ南側で、S-9°-Eを測る。頭上の墓墳上層には土師器小皿1点(375)、白磁皿1点(377)、白磁碗2点(378・379)が供献されていた。また、墳内人骨の頸から胸に該当する箇所においては白磁皿1点(376)、青白磁の合子蓋・身各1点(380・381)、鉄製品3点(382~384)、銅銭2枚(385・386)、ガラス製小玉(破損品含む)38点(このうち図化分387~419)が副葬されていた。銅銭は銭銘を向かい合わせにし、孔内にガラス製小玉1点が挿入された接着状態で出土しており、ほぼ同一箇所を確認した多数の小玉と共に首飾り等の装身具の一部として副葬されたとも考えられるが、銅銭背面に繊維質の付着が認められる(付論2参照)ことから、銅銭2枚は単独で布に包まれていたものと推定される。

出土遺物(第44・45図) 375は完形の土師器小皿で、口径は9.2cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。376・377は白磁皿Ⅲ-1類で、見込みの軸を輪状にカキ取る。釉色は共にオリブ灰色で、376は高台まで軸がおよぶ。376は約1/3を欠損するが、377は完形品である。378・379は白磁碗である。378は碗Ⅳ-1・a類で、完形品である。器面には貫入やピンホールが多い。379は碗



第44図 SX165 実測図 (1/30) および出土遺物実測図(1) (385・386は1/1、382・383は1/2、他は1/3)

V-2・a類で、覆土中の細片と接合できたが、口縁部の一部を欠失している。380・381は青白磁の合子で、共に型押しによる施文を行う。380は天井部に花文を有する蓋で、内面が露胎である。381は身で、立ち上がり、受け部および外底部には施軸されない。382～384は鉄製品である。382は断面長方形を呈し、両端部を「コ」字状に折り曲げる不明製品である。383は毛抜きで、端部を内側に折る。残存長は8.5cmである。384は錆化の著しい短刀で、茎部には木質が遺存している。長さ20.2cm、身幅は推定で2.1cmを測る。385・386は北宋代の銅銭で、385は「淳化元寶」(初鑄年:990年)、386は「至和元寶」(初鑄年:1054年)である。387～419はガラス製小玉で、透明感のある青色もしくは青緑色を呈する。径0.4～

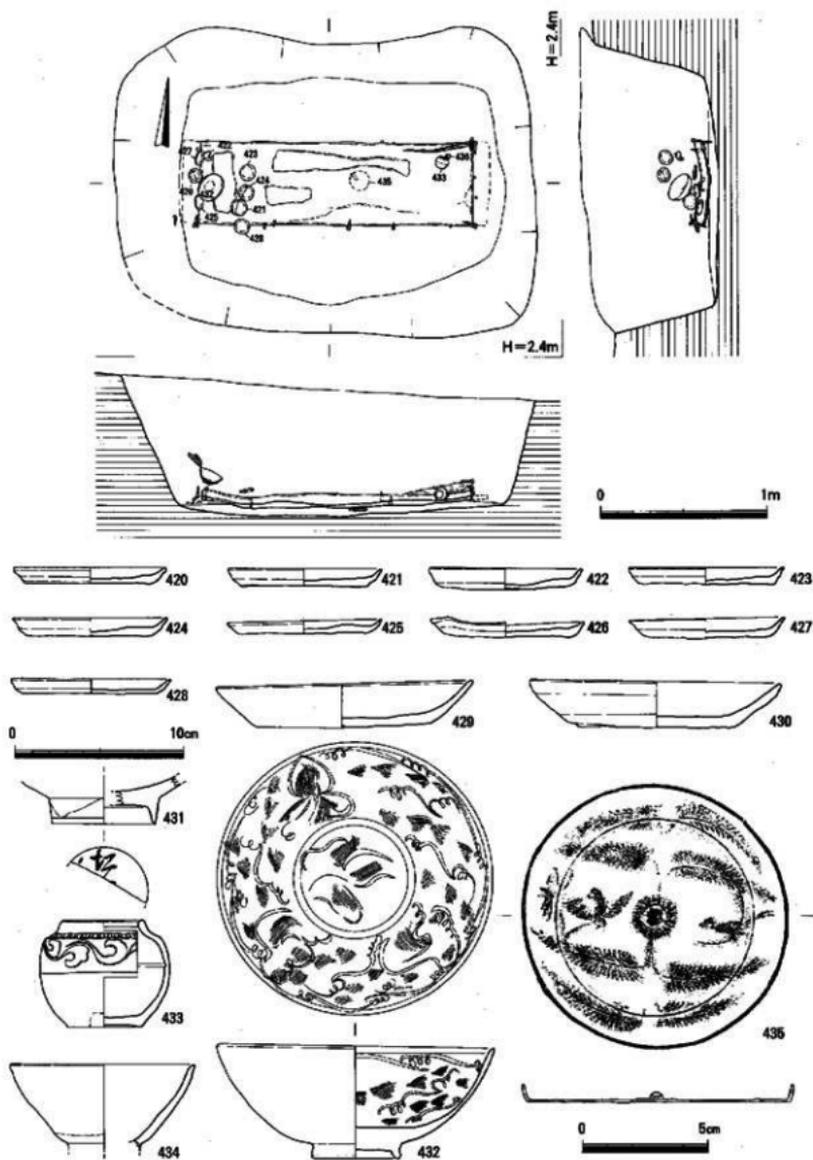


第45図 SX165 出土遺物実測図(2) (1/1)

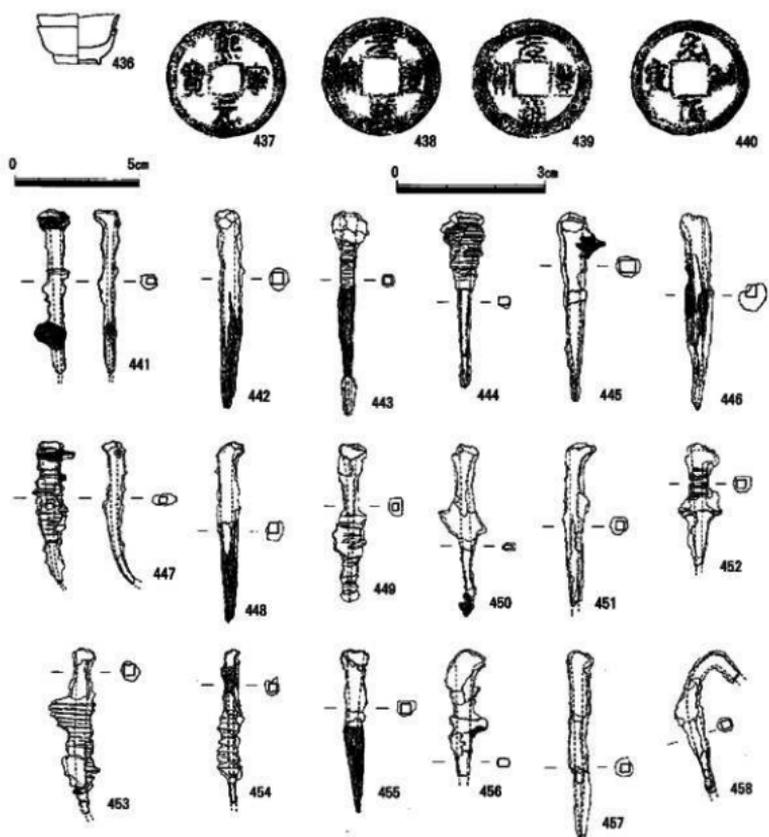
～0.7cm、高さ0.2～0.6cm、孔径0.1～0.2cmを測る。巻付けによる製作技法が顕著に認められる。これらの出土遺物から12世紀中頃に属する遺構と考えられる。

SX456(第46図) 2面B-3区で検出した木棺墓で、2面SK538を切る。墓墳の平面プランは大形の隅丸長方形で、長さ2.5m、幅1.8m、深さ0.8mを測り、断面は逆台形を呈する。墳内には人骨は確認できなかったが、棺材である底板の大半および北東側の側板の一部が遺存していた。また、小口両側には底板の痕跡と推定される黒色の染み(図の破線部分)が確認できた。底板は土圧によるものか、側板側が反り上がった状態である。これらや鉄釘の出土状況から木棺規模は長さ約1.8m、幅約0.5mと推定され、棺は底板上に側板を置き、小口板を挟み込む構造であったと考えられる。棺材の厚みは約2cmである。頭位方向は遺物出土状況から西側、N-95°-Wと考えられる。その頭位においては土師器小皿8点(420～428、ただし426を除く)、龍泉窯系青磁碗1点(432)、銅銭5枚(437～440、1点は錆化)が出土した。このうち銅銭は上層出土である。また、小皿1点(426)、土師器杯2点(429・430)は、東側上層から出土した。以上の遺物群は出土状況から棺蓋上の供献遺物で、頭位側の遺物群は蓋の崩壊に伴い、大半が棺内に転落したものと考えられる。また、棺内北東の下肢側に相当する底板上では青白磁小壺1点(433)、青銅製容器2点(436)が近接した位置に副葬されていた。また、底板材の中央やや東側の直下では銅鏡1面(435)が鏡面を上にして出土し、その内部には長さ約4cm、幅0.8cm、厚さ0.4cm程度の不明鉄製品1点が置かれていた。なお、鏡背面には紙とみられる繊維が付着していた(付録2参照)ことから、紙に包んで棺下に据え置かれたものと推定される。

出土遺物(第46・47図) 420～428は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕を有する。口径は9.0～9.6cmで、平均は9.2cmを測る。429・430は回転糸切り底の土師器杯である。共に口径は15.3cm

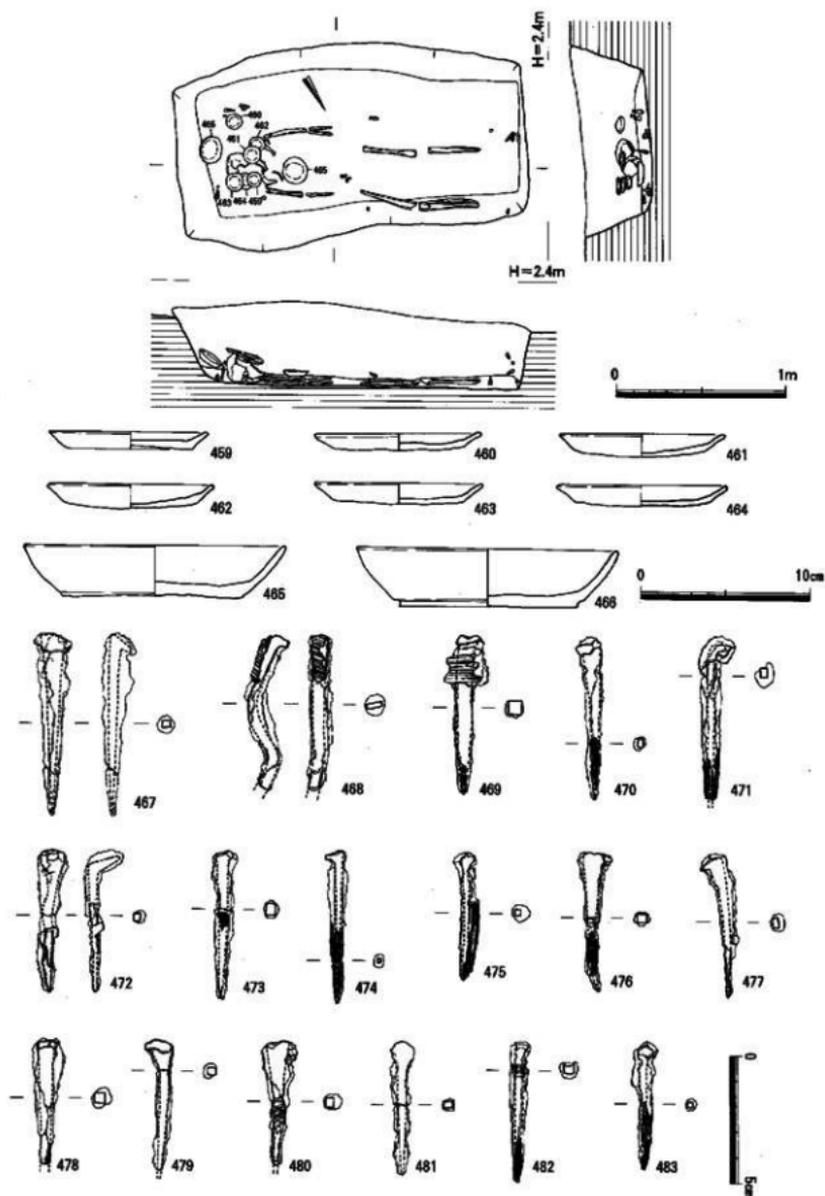


第46図 SX456 実測図 (1/30) および出土遺物実測図(1) (435は1/2、他は1/3)



第47図 SX456 出土遺物実測図(2) (437~440は1/1、他は1/2)

を測り、板状圧痕が認められる。431は墓墳覆土から出土した白磁碗V類である。外底部には墨書が記される。432は龍泉窯系青磁碗I-3類の完形品ある。内面には片彫りおよび櫛状工具による施文を有する。433は青白磁の小壺で、肩部および胴部上半に型押しによる文様を有する。体部外面下位および外底部は露胎であるが、軸垂れしている。また、口縁部上端の軸は削り取る。口径4.4cm、器高6.4cmを測る完形品である。434は天目碗の小片で、墓墳覆土からの出土である。435は銅鏡(草花蝶双鳥鏡)で、面径11.9cm、重量73.8gを測る。菊花形の座紐に頂部の丸い円錐形の鈕が付く。鏡背面には上下対称に草花の葉部を配し、左右には2羽の鳥を描く。また、左端には蝶が1羽舞う。内外区の境界には細線の界圏が巡っている。周縁は幅0.1cm、高さ0.7cmを測り、外傾して立ち上がる。鏡胎の



第48図 SX457 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (459~466は1/3、他は1/2)

厚みは0.1cm前後と薄い。鏡面は僅かに凹面をなし、光沢が認められる。436は青銅製の小形容器で、六器の一種であろう。同形と推測される2点が錆化により接着した状態である。口径3.2cm、器高1.5cmで、底径1.8cmを測る高台を有する。437～440は北宋代の銅銭である。437は「熙寧元寶」(初鑄年:1068年)、438・439は「元豐通寶」(初鑄年:1078年)、439は「元祐通寶」(初鑄年:1086年)である。441～458は鉄釘である。断面は方形を呈し、頭部は「L」字状に短く折れる。完形品の全長は6～8cm前後を測り、2種類以上の釘が用いられていると考えられる。他に墓壇覆土中より瓦器や滑石製石鍋等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀中頃から後半に属する木棺墓と考えられる。

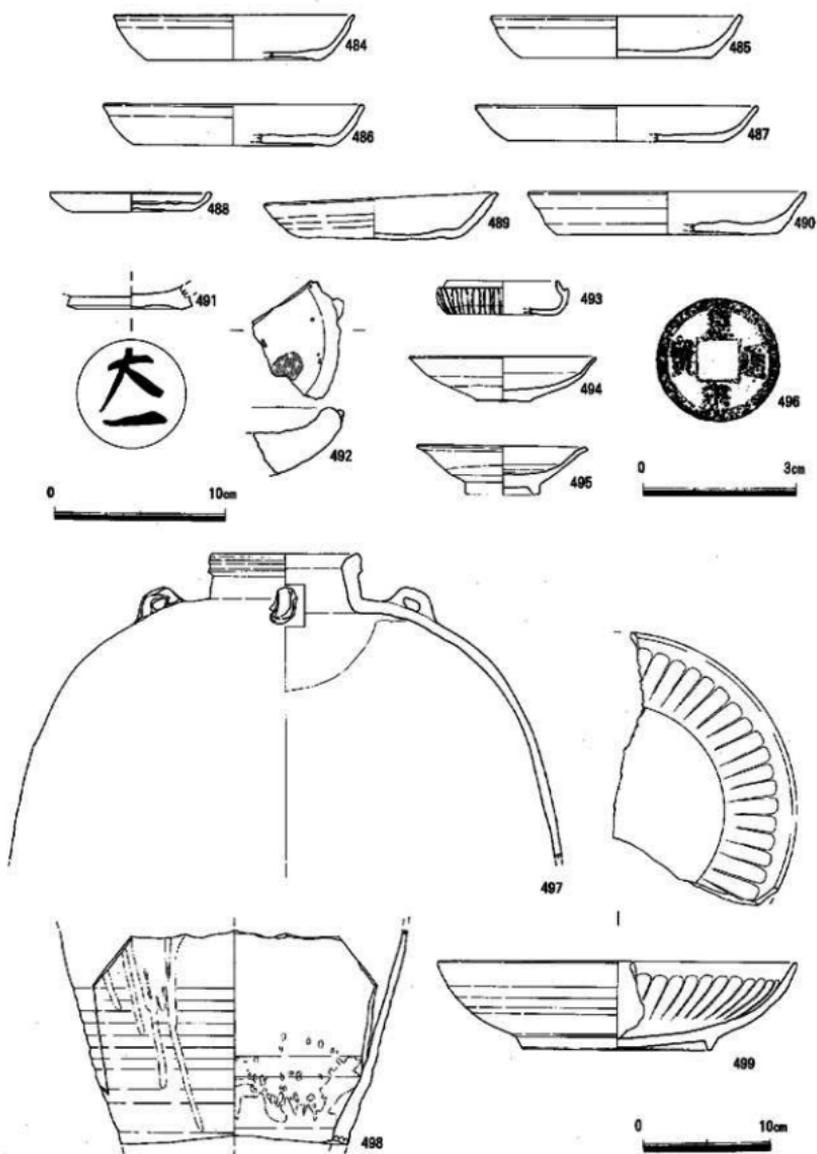
SX457(第48図) 2面B-3区のSX456に隣接して位置する木棺墓であるが、両者は重複しない。墓壇平面プランは隅丸長方形で、長さ2.05m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形を呈するが、北西側の壁面は直立気味に立ち上がる。鉄釘の出土状態から長さ約1.7m、幅0.55mを測る木棺規模が推定され、墓壇内の北側寄りに棺は掘え置かれている。棺内には比較的良好に、頭蓋および上下肢を伸ばした人骨が遺存していた。頭位方向はほぼ南東で、S-60°-Eを測る。その頭部周辺において土師器小皿6点(459～464)、土師器杯2点(465・466)が出土した。大半はその検出状況から、棺蓋上に供献されていた遺物がその崩壊によって棺内に転落したものと考えられる。ただし、465は正立して出土しており、埋葬当初から胸上に置かれた副葬遺物の可能性もある。

出土遺物(第48図) 459～464は土師器小皿で、ほぼ完形に近い個体である。外底部は459が回転糸切り、他は回転ヘラ切りで、いずれにも板状圧痕が認められる。口径は9.3～10.0cmを測り、平均は9.7cmである。465・466は完形の土師器杯で、共に板状圧痕を有する回転糸切り底である。口径は順に15.2、15.4cmを測る。467～483は鉄釘である。断面は方形を呈し、頭部を屈折させる。完形品の全長は5～7cmを測り、数種類の釘が棺に使用されている。遺存する直交方向の木質から棺材の厚みは1～2cm程度と推測される。他に瓦器や白磁の細片が墓壇覆土中から出土した。以上の出土遺物から12世紀中頃の木棺墓と考えられる。

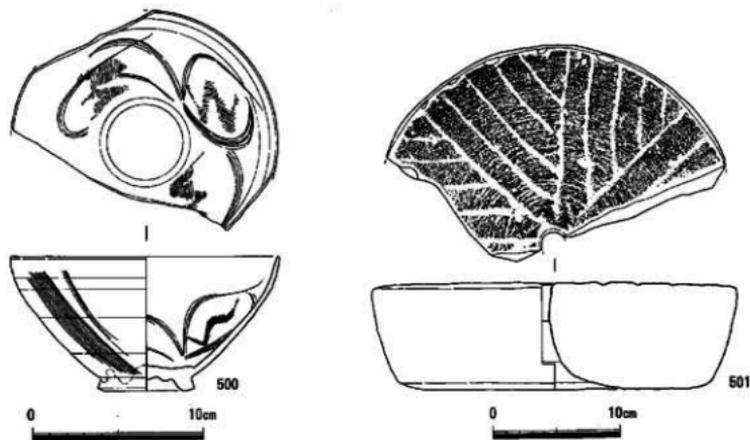
#### 6) その他の遺物

本項ではビットおよび包含層(3・4層)から出土した遺物の一部をとりまとめて報告する。

ビット出土遺物(第49・50図) 484～487は1面B-1・2区のSP063から出土した土師器杯である。いずれも回転糸切り底で、板状圧痕を有する。復元口径は14.2～16.6cmを測る。488～492は1面B-3区のSP420から出土した遺物である。488～490は回転糸切り底の土師器である。488は小皿で、復元口径は9.5cmを測り、板状圧痕が認められる。489・490は杯で、復元口径は順に13.7、16.4cmを測る。489は板状圧痕を有する。491は白磁碗Ⅳ類で、外底部に墨書で「大一」が記される。492は取瓶で、内面は二次的加熱によりガラス質化し、一部に緑錆の付着が認められる。493・494は2面B-3区のSP608から出土した遺物で、493は青白磁の合子身である。体部外面には型押しによる陽刻の施文が施される。その体部上半および内面に施釉が行われる。494は白磁皿Ⅶ-1・a類である。体部上位で鈍く内湾し、その内面に沈線を配する。釉はオリブ黄色で、体部外面の下半以下は露胎である。495は2面B-3区のSP617から出土した白磁皿Ⅲ-1類である。体部内面の中位には沈線を有し、見込みの釉は輪状にカキ取る。体部外面の下半以下には施釉されない。496は北宋代の銅鏡「皇宋通寶」(初鑄年:1038年)で、2面A-1区のSP221から出土した。497・498は1面B-3区のSP429から出土した中国陶器の四耳壺で、同一個体と考えられるが、体部の中位が欠失し、直接の接合面がない。497の個体上半部はビット上層で破砕された状態で出土した。直立して短く立ち上がる頸部に肥厚する口縁部が付く。肩部には縦耳を貼付し、長胴の胴部を有する。498は底部に近い体部下半の資料と考えられ、ロクロ成形時の器面の凹凸が著しい。共に胎土は灰色で、白色砂粒や黒色粒子が混じる。褐色の



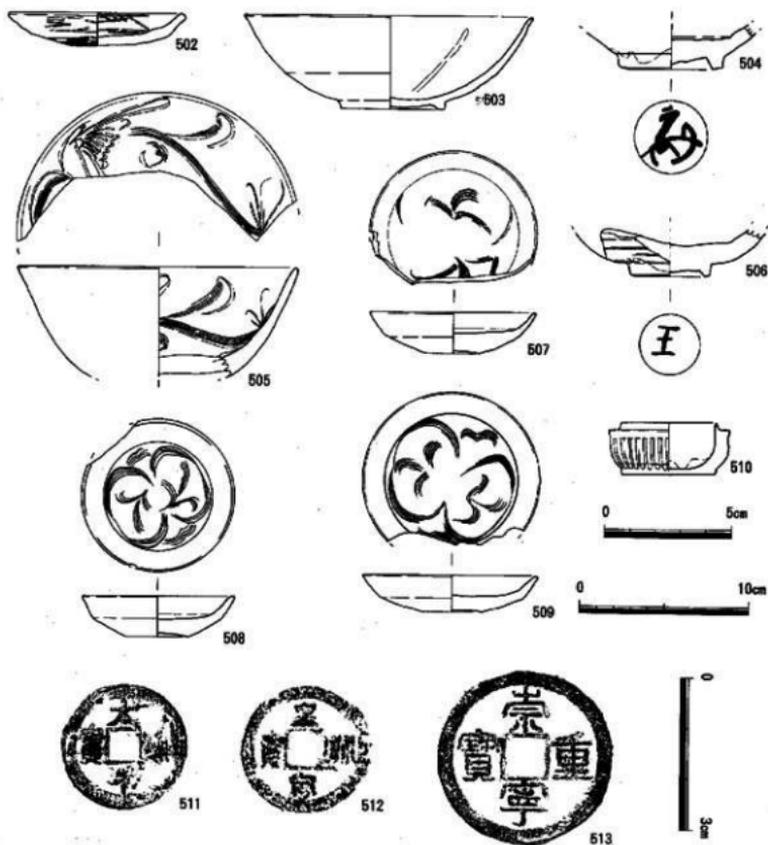
第49図 ビット出土遺物実測図(1) (496は1/1、497~499は1/4、他は1/3)



第50図 ビット出土遺物実測図(2) (500は1/3、501は1/4)

軸が外面および内面上半、内面底部付近に薄くかけられる。また、体部下半ではその上から淡オリブ黄色の釉が流しけがされる。499は1面B-3区のSP424から出土した龍泉窯系青磁Ⅲ類の盤である。断面台形状の高台端部を除いて淡緑色の釉が全面に施され、露胎となる高台端部は赤褐色に発色する。体部内面には印刻の蓮弁文を有し、見込みには段状の沈線が巡る。復元口径28.2cm、器高6.9cmを測る。500は1面A-1区のSP058から出土した同安窯系青磁碗Ⅰ-1・b類である。外面には櫛状工具による縦方向の施文を行い、内面には櫛および片彫りによる文様を有する。軸は高台近くまで施される。501は1面C-1区のSP042の石臼(下臼)で、上面復元径28.4cm、器高8.5cmを測る。芯棒孔は復元径1.9cmを測る円形を呈する。擦り目は8分面で、4本の副溝を有する。溝幅は約0.3cmを測り、2cm間隔で幅広に彫り込まれている。底部にはハツリ痕を残すが、他にはやや粗い研磨を加えている。凝灰岩製と考えられる石材を用いている。

包含層出土遺物(第51図) 502・503は瓦器である。502は皿で、内外面にヘラ研磨を施す。見込みには鈍い段を有する。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が認められる。503は碗である。断面台形の低い高台を貼付する。外面はヨコナデ、内面は研磨を加えるが、器面の風化により単位は不明瞭である。504は白磁碗Ⅳ-2類で、見込みの軸を輪状にカキ取る。外底部には花押と考えられる墨書がみられる。505~509は龍泉窯系青磁である。505は碗Ⅰ-2類で、内面に櫛状工具および片彫りにより草花文を描く。軸色は淡オリブ黄色を呈する。506は碗Ⅰ類の底部片で、見込みには段を有する。外面にはヘラ状工具による横方向の沈線が認められ、底部には墨書で「王」が記される。507~509は皿Ⅰ-2・b類で、体部中位で屈曲する。見込みには櫛状工具による花文を施す。全面に施釉を行なうが、外底部はカキ取って、露胎とする。510は青白磁の合子身である。体部外面には型押しによる施文を有する。内面および体部外面の上半のみに施釉され、立ち上がりの外面や底部は露胎である。511~513は北宋時代の銅銭である。511は「太平通寶」(初鑄年:976年)、512は「皇宋通寶」(初鑄年:1038年)、513は「崇寧重寶」(初鑄年:1103年)の当十銭である。



第51图 包含層出土遺物実測図 (511~513は1/1、510は1/2、他は1/3)

## IV. 結語

この章では、今回の調査で確認した遺構の時期的変遷についてまとめると共に2面で検出した埋葬遺構についての所見を述べることにしたい。本文中で記述した個別の遺構時期および以下で用いる時期区分は山本信夫氏の土師器および輸入磁器の編年観<sup>1)</sup>を参照した。ここでは検出遺構を5期に区分する。土師器法量変遷を基軸として、土師器の外底部の切り離しに回転ヘラ切りおよび回転糸切りの双方が認められ、白磁の出土頻度が高い時期をI期(12世紀中頃)、続いて土師器は回転糸切り底のみとなり、龍泉窯系青磁I類(I-5類除く)や同安窯系青磁が主体となるII期(12世紀後半)、龍泉窯系青磁I-5類が主体を占め、龍泉窯系青磁III類や白磁IX類を含まないIII期(13世紀初頭から前半)、前述の龍泉窯系青磁III類や白磁IX類が主体となるIV期(13世紀中頃から14世紀初頭)、龍泉窯系青磁IV類が出現するV期(14世紀代)とする。なお、今回の調査では明確にI期以前に位置付けられる遺構は検出していない。

I期～III期には2面検出遺構の大半が含まれる。まずI期にはSK155・156・157・538・549等の土坑が掘削されると共に、埋葬遺構5基が築かれている。該期には井戸は設置されておらず、本格的な集落化には至っていないものと考えられるが、前述した生活遺構が散見される。II・III期には掘立柱建物、SE458を除く2面検出井戸6基、前述以外の2面検出土坑の大半が含まれる。2面での多数のビット検出状況から掘立柱建物としてまとめきれないものも多く存在すると思われるが、確認し得た3棟の掘立柱建物はいずれも類似した北西方向の軸方位を有し、該期の地割方向を示唆する検出例となろう。また、井戸の重複状況からもII期以降に集落化が進行したものと推定される。ただし、III期に比定される遺構はやや減少傾向を示しており、II期にそのピークが看取される。

続くIII・IV期には1面検出遺構の井戸や土坑の大半が含まれる。井戸は2面検出位置と類似した箇所に掘削されており、集落の継続性が伺われる。またIII期内では、遺構数は13世紀中頃やや比重があり、13世紀後半から14世紀初頭にかけては再び減少傾向にある。IV期に属する遺構としては1面での検出遺漏と考えられる2面SE458の1例が挙げられ、本調査区内では中中期の最も新しい遺構に位置付けられる。なお、該期以降は近世まで生活遺構は確認できていない。

今回2面において検出した埋葬遺構5基については出土遺物から12世紀中頃を前後する同時期に造営されたものと考えられるが、SX456のみに青磁の供献が認められることや、同遺構とSK358との前後関係からSX456は他の4基よりやや後出する可能性がある。いずれも近接した位置に設置されていることから、墓域の意識はあったと考えられるが、頭位方向や埋葬施設、埋葬姿勢等に関しては規則性が殆ど認められない。ただし、土壌墓は側臥屈肢葬、木棺墓では仰臥伸展葬を行っており、両者の相関関係は看取される。また、性別は人骨の保存不良により2遺構のみの判別(付論2参照)にとどまっているため、これら諸属性との相関を指摘することは現段階では控えたい。

本遺跡内では現在までに20数例の中世埋葬遺構が確認されている。時期的には今回の検出例の12世紀中頃から後半を主体とし、13世紀代に及んでいる。いずれも単独もしくは数基が単位となって集落内に造墓されており、屋敷墓として位置付けられよう。これらの埋葬遺構の在り方や時期的消長は博多遺跡群と類似しており、同遺跡同様大半の住民の共同墓地は遺跡縁辺部に営まれたものと推定される<sup>2)</sup>。

### 註

1)山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真福社 1995年

山本信夫「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて」『乙益重隆先生古稀記念九州上代文化論集』1990年

2)大塚隆博「博多遺跡群の埋葬遺構について」『法政論 第1号』博多遺跡研究会 1992年

## <付論1>

### 福岡市箱崎遺跡第20次・21次調査出土人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院

中橋 孝博

#### はじめに

北部九州は古人骨資料が比較的豊富な地域として知られ、これまで弥生人骨を中心に数多くの研究が蓄積されてきた。そうした中で、当地の古人骨研究に関する残された課題の一つとして、資料がほとんど欠落した状態が続いている古代～中世期の人骨を充当し、その時代的、地域的特性を明らかにすること、そして当地域の住人形質の時代変化や変化要因を追及することが上げられよう。

古くから港町、商都として栄えてきた旧博多とその周辺部は、これまで少数ながら古代～中世期の資料を出土してきた、全国的にも希少な地域の一つである。この箱崎遺跡では、過去にも1997年度の第7次調査で、12世紀前半～13世紀初めの男性頭蓋が出土しているが(中橋、1993)、今回もまたほぼ同時期の人骨5体が新たに出土した。残念ながら保存状態が非常に悪く、形態的な特徴について計測値に基づく詳しい分析は実施できなかったが、全国的にこの時期の人骨は非常に少なく、貴重な追加資料となるものであり、以下に得られた知見について報告したい。

#### 遺跡・人骨資料

箱崎遺跡は、福岡市東区箱崎1丁目、現在の箱崎宮の北側に隣接した地区に所在する。同地は、かつて博多湾岸に形成された古砂丘上に位置し、西側は博多湾に、東側は宇美川(多々良川の支流)に画された一画である。かつては「箱崎ノ津」と称された入り江がこの地区の東側に流入し、西暦923年に創建された箱崎宮の私港として利用されていたという。

福岡市教育委員会による第20次調査<sup>※</sup>は、この箱崎遺跡東端の砂丘東側緩斜面、第21次調査は遺跡北側の砂丘西側緩斜面において実施された。遺構面は、いずれも2～4メートルの標高にあり、古墳時代から近世に至る様々な遺構(竪穴住居や、井戸、溝など)、遺物が検出された。この中で埋葬遺構は、20次調査で土壌墓が1基、21次調査では土壌墓が2基、木棺墓が3基検出され、1基の木棺墓を除く計5基から人骨が出土した(表1参照)。SX0020号を除き、いずれも豊富な副葬品を持っており、別項に詳しく述べられているように、土師器や白磁器、銅鏡、銅銭、櫛、ガラス小玉などが検出された。

所属時代はこれら副葬品や層序に関する考古学的な検討から、ほぼ12世紀のものと考えられている。

一部の計測は、Martin-Saller(1957)に従った。また性判定には、筆者らの保存不良骨に対する方法(中橋、1988)を援用した。

※1999年度発掘調査、2002年度報告予定。

表1 箱崎遺跡第20次・21次調査出土人骨

番号	性	年齢	埋葬姿勢	埋葬施設	時代
20次調査					
SX0020	女性	熟年	仰臥屈肢	土墳墓	12世紀後半(?)
21次調査					
SX153	不明	成人	仰臥?	木棺墓	12世紀中頃
SX154	女性	熟年	右側臥屈肢	土墳墓	12世紀中頃
SX165	不明	若年	左側臥屈肢	土墳墓	12世紀中頃
SX457	男性	熟年	仰臥伸展	木棺墓	12世紀中頃

## 結果

## 1. 第20次調査

## SX0020号人骨

検出状況：体幹部を除き、ほぼ全身骨が埋葬位を保った状態で出土した。ただ、骨質が非常に脆弱化していたため、原型を保った形で取り上げることができず、復元による詳しい形態的検討も困難であった。

埋葬位は、頭位を北に取って顔面はやや右(西)に向け、右上肢は肘で強屈して手を右肩に置いている。また、左上肢はゆるく曲げた肘を体側から離して外に突き出し、手を下腹部上に置いている。下肢は強屈した両膝を右に倒し、下腿を体軸とはほぼ直角の左方向にそろえている。副葬品は見当たらず、棺材や釘なども検出されていないので、土墳墓と見なされる。

性・年齢：性別については、眉間部の発達が微弱であり、外後頭隆起や乳様突起の発達が弱く、四肢骨幹がかなり細いことから、女性人骨とみなされる。また、全歯がそろっているものの、咬耗がかなり進行し、縫合の一部に癒合も認められることから、熟年期に入った個体と見なされる。

形態的特徴：残念ながら保存不良のため形態的な特徴は、ほとんど掴めなかったが、一部の計測結果を比較群とともに表2に示した。

頭最大長がやや短いため、頭長幅数は短頭型の下限にはいる。中顔幅は97mmで、近、現代人よりは広く、古墳や弥生時代人よりは下回っており、時代性的一端が窺える。上顔高も不明確ながらやや低く、低顔傾向が見て取れ、その示数も近、現代人よりは明らかに低く、比較群の中では古墳人や中世人に比較的近い傾向を示している。また、下顎枝幅が40mmと、先史人の男性平均値をも上回る点も目に付いた。なお、計測はできなかったが、やや槽性突顎の傾向も確認された。

## 2. 第21次調査

## 2-1. SX153号人骨

下肢骨片(大腿骨、脛骨)らしきものが2片検出された。一応、埋葬姿勢としては、頭を南東にむけた仰臥位の可能性が窺えるが、確定は困難である。なお、頭蓋直上あたりに、土師器小皿、白磁碗、銅鏡、櫛などの副葬品が添えられていた。

性・年齢についても、骨質の厚さから成人である可能性が窺えるのみで、詳しい年齢、性は不明である。

## 2-2. SX154号人骨

検出状況：保存不良ながら、頭蓋、上肢、下肢がほぼ埋葬位を保った状態で出土した。頭位は北西で、顔面を右に向け、両腕とも肘を強屈して、両手を顔の前あたりに重ねている。また下肢は膝で強屈しており、全体として右側臥位で埋葬されたものと見なされる。なお、顔面近くに、銅鏡、銅銭などが埋葬されていた。

性・年齢：頭蓋の眉間部の形状やサイズからみて、女性である可能性が高い。また、歯の咬耗の進行度から熟年期に入った個体と見なされる。

形態的特徴：保存不良のため、わずかに顔面部の特徴が窺えたのみで、計測値にもとづく検討はできなかった。ただ、眉間から鼻骨にかけて、非常に平坦であること、また、やや歯槽性突顎傾向が認められた。

残存歯を以下に歯式で示す。

/	/	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	C	I <sup>2</sup>	I <sup>1</sup>		I <sup>1</sup>	I <sup>2</sup>	C	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	/
M <sub>2</sub>	×	×	○	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	○		/	○	○	○	×	×	×	×

(○：歯槽解放、×：歯槽閉鎖、/：欠損)

## 2-3. SX165号人骨

検出状況：頭蓋冠、下顎片のほか、上肢と下肢骨片の遺存が確認できたが、保存状態は悪く、原型を留めぬものがほとんどであった。頭位はほぼ南で、各上肢骨の位置関係から、右腕は肘を伸ばして体側に沿わせ、左は肘で強屈して手を顔面近くに置いていたものと推測される。また、下肢は強屈した両膝を左に倒しており、全体的に見て、左側臥で埋葬されていたものと考えられる。なお、この遺体の頭部上層からは、土師器皿や白磁皿、白磁碗、青白磁合子、ガラス小玉、銅銭など、かなり多量の副葬品が検出された。

性・年齢：下肢骨で骨端部が未癒合の状態が確認できること、また、下記に示すような歯の萌出状況から判断して、13～15歳程度の若年骨と見なされる。性別は判定可能な部位が遺存していないため、不明とするしかない。

形態的特徴：保存不良のため形態的な検討はできなかったが、ただ、歯から推察される年齢にしては比較的骨体が高いこと、また脛骨の骨体がかかなり扁平であることが確認できた。

歯式を以下に示す。

(M <sup>3</sup> )	/	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	C	/	I <sup>1</sup>		/	I <sup>2</sup>	C	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	(M <sup>3</sup> )
(M <sub>3</sub> )	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	○	I <sub>1</sub>		/	I <sub>2</sub>	C	○	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	/

(○：歯槽解放、×：歯槽閉鎖、/：欠損)

## 2-4. SX457号人骨

検出状況：保存不良ながら、頭蓋、上肢、下肢骨がほぼ原埋葬位を保った状態で出土した。頭蓋直上に副葬品の土師器などが被さる形で検出されたこともあって、顔面の向きは不明だが、上肢は左右

とも体側にそって下に伸ばし、下肢も膝関節を伸ばして、全体的に仰臥伸展葬であったものと判断される。上記のように、この木棺墓には、頭部近辺に土師器の杯や小皿が副葬されていた。

性・年齢：外後頭隆起や乳様突起の発達が顕著であることから、男性の可能性が高い。また、年齢は歯などの残りが悪いため判然としないが、やや年輩の、おそらく熟年以上の個体と推測される。

形態的特徴：上記のように、頭蓋の筋附着部の発達が良好である点を除けば、形態的特徴は掘めなかった。

以上、福岡市箱崎遺跡の第20次、21次調査によって12世紀頃に属する計5体の人骨が出土した。残念ながら保存不良のため、形態的特徴としては、一部に扁平な鼻根部、齒槽性突顎、低顔傾向などが確認されたにとどまった。先の第7次調査で出土した同時期の男性人骨では、やや高顔傾向も見られたが、今回の女性人骨ではまた異なった特徴が示された。一般に中世人骨は低顔を特徴とすることが知られているが、博多とその近在の住民には他地域と傾向を異にする人々が居住していた可能性が残されている。当遺跡では今回の資料を加えてまだ男女各1体の結果なので、今後の追加資料を待って再検討する必要がある。

また、中世から近世期にかけての遺跡では、時にその埋葬姿勢にかなり統一性が認められる場合があるが（例えば、北頭位で右側臥など）、これまでも旧博多では頭位、埋葬姿勢ともかなり変異が大きい傾向があり、今回の事例もそれを追認する結果となった。宗教上の制約など埋葬儀礼の変遷を考える上で興味深い現象なので、形態的な問題と同時に今後もこれらの点に注目していきたいと考える。

謝辞：当人骨を調査、研究するにあたり貴重なご教示を賜った福岡市教育委員会の諸先生、諸氏に深謝いたします。

表2 主要頭蓋計測値の比較 (女性)

	箱崎20次 12世紀	北九州・山口 <sup>1)</sup>		吉母浜 <sup>2)</sup>		天福寺 <sup>3)</sup>		北九州 <sup>1)</sup>		津雲・吉胡 <sup>4)</sup>		西南日本 <sup>5)</sup>	
		(古墳)		(中世)		(近世)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	(170)	37 175.6	26 176.4	38 174.7	86 177.0	46 176.1	57 172.8					
8	頭蓋最大幅	(136)	33 137.3	26 132.0	39 133.5	84 138.4	49 141.5	57 134.0					
17	Ba-Br高	—	30 129.6	25 133.0	35 132.7	66 130.7	21 129.7	57 131.3					
8/1	頭長幅示数	80.0	28 78.5	26 74.9	38 76.5	72 78.1	41 80.3	57 77.6					
46	中顔幅	97	31 100.4	27 98.6	25 95.5	67 99.8	23 99.7	57 93.4					
48	上顔高	64~67	33 67.7	19 65.5	22 68.8	66 70.1	17 62.0	55 68.2					
48/46	上顔示数(V)	66.0~69.1	27 67.7	22 66.5	22 71.8	57 70.2	14 62.3	55 72.9					

1) 中橋・永井 (1989)、2) 中橋 (1985)、3) 中橋 (1987)、4) 清野・宮本 (1925)、金高 (1928)

5) 原田 (1954)

## 文 献

- 原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究1。
- 清野謙次・宮本博人（1926）：「津雲貝塚人人骨の人類学的研究、第2部、頭蓋骨の研究」、人類学雑誌41。
- 金高勘次（1928）：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」、人類学雑誌43。
- Martin-Saller(1957)：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
- 中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95。
- 中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）六興出版。
- 中橋孝博（1991）：「福岡市上月隈遺跡出土人骨（近世・弥生）」、福岡市埋蔵文化財調査報告書257。
- 中橋孝博（1993）：「箱崎遺跡群第7次調査出土の中世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書459。
- 中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質、男女差、寿命」、弥生文化の研究1、雄山閣出版。

## <付論 2 >

### 箱崎遺跡第21次調査出土青銅製品の保存科学的調査について

福岡市埋蔵文化財センター  
比佐陽一郎・片多雅樹

箱崎第21次調査では銅鏡や銅銭といった保存処理の必要な遺物が出土し、埋蔵文化財センターにおいて保存と活用のための処置を施した。ここでは、その過程で得られた知見を報告する。

今回対象とした資料は12世紀代の木棺蓋に副葬された銅鏡3点と、銅銭4枚である。これらの資料には有機物の遺存が多く認められており、関連資料も含め遺構ごとに、まずその所見と処置について記す。なお繊維に関しては、東京国立博物館澤田むつ代氏に多くのご教示を頂く機会を得た。ここに記して感謝申し上げます。

#### SX-153木棺蓋

銅鏡鏡背面には、縁に囲まれた窪みに嵌り込むように木質が残存していた。この木質は少なくとも2層になっており、木目がそれぞれ直行している。鏡を納めた箱、或いは木棺材の可能性が考えられる。出土直後は水分を含んでおり、乾燥すれば収縮によってその姿が失われるのと、このままでは肉眼での文様観察もできないことから、木質は塊のまま鏡と分離し真空凍結乾燥法で水分を安全に除去、その後アクリル樹脂（パラロイドB-72）を塗布し強化した。

木質の除去後、その下には繊維の遺存が確認された。この繊維は鏡背の20%程度を覆っており、織り目も明瞭に観察することができる。しかし部分的に泥が固着している部分もあり、これを取り除こうとすると脆弱化した繊維質が崩壊するため、特に手を下していない。実体顕微鏡による観察では、平織りで、1cm当たりの織り密度は凡そ縦22×横20（本）、1本の糸は0.2～0.4mm程を計り、特に経糸においてS字方向の撚りが見られる（写真1）。泥の中から繊維本体が露出した所では黄白色や緑青色を呈しているが、腐蝕によって本来の色調は失っているものと思われる。この繊維は、繊維の太さや荒さ、或いは糸に撚りの有る特徴等から、麻であると考えられる。更に、鏡から脱落した微小片を樹脂包埋し、研磨後、繊維断面を電子顕微鏡で観察したものを写真2に示す。ここでは、明らかに絹とは異なる楕円の長軸側中央が潰れたような形状が見られる。

なお鏡本体をクリーニング後、資料の保護と腐食部分の安定化を目的として、腐蝕抑制剤（ベンゾ・トリ・アゾール：BTA）を含むアクリル樹脂（パラロイドB-72・5%アセトン溶液）を塗布。ただし、布部分の今後の調査に備え鏡面側のみの処置に止めている。以下、銅製品に用いるアクリル樹脂は全て同じものである。

この他、殆ど土と同化しかけた状態で、木質と漆膜が採取されている。漆膜には所々金色の部分が散見されていたが、蛍光X線分析の結果、若干の銅と銀を含む金であることが確認された。

#### SX-154土墳墓

銅鏡1面と錆着した銅銭2枚が出土。銅鏡には、鈕から真っ直ぐに延びる紐の付着が確認された（写真3）。この紐は、鈕から縁の部分まで3.4cmが残存。太さは約1.8mmで、Z字方向に撚っている。繊維の断面観察は行っていないため、その種類は不明である。全体に緑青色を呈しており、本来の繊維成分は失われ錆に置き換わっているものと考えられる。また鏡面には規則的に並ぶ木質らしき痕跡が残存しているが、やはり錆に置き換わっておりその詳細は不明である。

この他、実体顕微鏡の観察では、広い範囲で織り目のない繊維質が見られる(写真4)。紙の繊維のようにも見えるが、織物や紐の繊維が分解したものである可能性もあり、詳細は不明である。鏡背面は文様の確認を優先させるため、紐の紐を除く有機物は物理的に除去し、別途保管している。ただし、鏡本体は金属分が溶出し脆弱化していたため、有機物残存部分も含め全体にアクリル樹脂を塗布している。

銅銭は透過X線では十分な文字の判読ができなかったため、錆着をはずしてクリーニングを行った。ここでも錆着面以外の部分で織り目のない繊維質が観察されている。

#### SX-165土壌墓

2枚錆着していた銅銭の内、至和元寶に明確な織物の付着が認められた。やはり平織りで、織り密度は数mm角からの復元であるが凡そ縦45×横30(本/1cm)、一本の糸の太さも0.2mm前後と、SX-153出土鏡のものより若干緻密である(写真5)。繊維の断面形は未調査のため不明であるが、織り密度や繊維の太さ、撚りの無い糸の特徴などから平絹である可能性が高い。

#### SX-456木棺墓

銅鏡1点が出土。実体顕微鏡による調査で、鏡背面の一部にSX-154鏡と同様の織り目のない繊維状物質が散在しているのが確認された(写真6)。この資料も鏡背面は文様の確認を優先させるため、紐の紐を除く有機物は物理的に除去し、別途保管している。本資料でも全面にアクリル樹脂を塗布している。

以上、繊維に関しては、その種類が判別できたものもあるが、SX-154鏡や同出土銅銭、SX-456鏡などで見られた織り目のない繊維質は、残念ながら同定に至らなかった。今回は事例の提示に止め、今後の課題としたい。

続いて銅鏡3面の材質調査について記す。

日本の弥生時代や古墳時代に盛行する鏡やそれ以降の中国鏡が同范、踏み返しなどの技法で同じ文様のものが複数作られるのに対し、中世以降の和鏡は基本的に一鑄型一製品という日本独自の製法により製作されるという特徴を持つ(久保1999)。その製作地(工房・職人)や流通、変遷といった問題に関しては、古記録と出土遺物の豊富な京都など一部の地域を除き、十分に解明が進められているとは言えない部分もあり、文献資料の手薄な地域は勿論、資料の豊富な地域でも研究結果を裏付けるものとして、自然科学的手法による調査が重要な手掛かりとなり得ると考えられる。

今回は蛍光X線分析装置を用いて、鏡に含まれる元素の非破壊的手法による定性分析を試みた。この方法で出土資料の調査を行う場合には、X線が照射された範囲内の表面的な組成情報しか得ることができないため、土の付着した資料や踏に覆われた資料、製造過程での素材偏析がある資料では、得られた結果が必ずしも資料全体の組成を反映しているとは限らないことから、分析結果の評価には注意が必要である(平尾1999・村上2000)。今回もこれを踏まえ、平尾良光氏の手法に従って、得られた各元素のX線強度を、主要元素のX線強度を100とした場合の相対値として表す方法を用いることとする。分析にはX線の照射面積が0.3mmφの微小領域用エネルギー分散型の装置(EDX)と、同じく20mmφの波長分散型装置(WDX)の2種類を用いているが、前者では照射範囲が極端に狭いため、複数ヶ所を分析対象としている。なお作業は、資料のクリーニング終了後、樹脂塗布前に行った。分析条件は次の通り。

エネルギー分散型(エダックス社製:Eagle  $\mu$  probe)/対陰極:モリブデン(Mo)/検出器:半導体検出器/管電圧・電流:40kV・20~80  $\mu$ A/測定雰囲気:真空/測定範囲0.3mmφ/測定時間300秒

波長分散型（フィリップス社製：PW2400）/対陰極：スカンジウム(Sc)/検出器：シンチレーションカウンター/管電圧・電流：60kV・40mA/測定雰囲気：真空/分光結晶：フッ化リチウム

結果は一覧表に示す通りであるが、以下、材質に関する所見をWDXによる分析結果を中心に記す。

SX-153鏡では、銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)の他、銀(Ag)や砒素(As)、鉄(Fe)が比較的明瞭に表れている。ただし鉄は土壌にも豊富に含まれるものであり、地金に含まれるか否かの判断は非破壊分析では困難である。それ以外には微弱なピークとしてアンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)、亜鉛(Zn)が確認される。

SX-154鏡では銅が飛び抜けて強く表れている他、検出された元素はSX-153鏡とほぼ同じものである。但し亜鉛はピークとしては確認できていない。

SX-456鏡でも同じような組成を示している。しかし本例ではそれ以外に水銀(Hg)のピークが認められており、これは錫メッキに用いたアマルガムの水銀が残留したものと考えられる。他の2面には見られない技法である。WDXでは鏡面のみでの分析であるが、EDXでは両面行い双方でほぼ同じ強度の水銀が検出されていることから、錫メッキが全面に施されていたと推測される。

今回の調査では、SX-456鏡にて錫メッキによる水銀が確認された他は、検出された元素に大きな差異は認められないという結果となった。

元素	強度	Sb-Kα	Sn-Kα	Ag-Kα	B-Lα	Pb-Lα	As-Kα	Hg-Lα	Zn-Kα	Cu-Kα	Ni-Kα	Fe-Kα	測定値	
銅	+	13.5	14.8	18.0	27.4	28.3	34.0	26.9	41.8	48.0	48.7	57.5	1718.0	
錫	+	26.2	28.1	22.0	10.8	10.8	10.8	9.9	8.6	8.0	7.4	6.4	604.0	
SX-153	鏡面	0.47	35.96	0.89	0.80	33.33	23.93	-	0.36	105.00	-	0.39	7718.0	
SX-153	EDX	+	1.93	+	18.98	6.98	-	0.98	100.00	-	0.75	281.0		
SX-153	EDX	鏡面	+	1.21	+	26.18	7.98	-	0.78	100.00	-	0.29	3038.0	
SX-153	EDX	鏡面	+	0.88	+	3.80	23.80	-	0.74	100.00	-	0.34	1649.0	
SX-153	EDX	鏡面	+	0.30	0.18	-	-	-	1.74	100.00	-	1.84	178.0	
SX-153	EDX	鏡面	+	2.08	0.18	-	15.83	5.87	-	1.00	100.00	-	0.81	1367.0
SX-153	EDX	鏡面	+	0.98	0.85	-	7.84	2.11	-	0.68	100.00	-	0.31	1644.0
SX-153	EDX	鏡面	+	0.32	0.17	-	7.88	2.81	-	0.68	100.00	-	0.74	1624.0
SX-154	EDX	鏡面	+	0.88	+	6.18	5.78	1.19	-	0.74	100.00	-	0.84	1400.0
SX-154	EDX	鏡面	+	+	+	1.14	6.82	-	0.87	100.00	-	0.31	8743.0	
SX-154	EDX	鏡面	+	0.92	+	0.28	1.88	-	0.76	100.00	-	0.42	8588.0	
SX-154	EDX	鏡面	+	0.21	+	1.77	0.72	-	1.73	100.00	-	0.84	176.0	
SX-154	EDX	鏡面	+	0.20	+	0.72	1.80	-	0.68	100.00	-	0.44	8477.0	
SX-154	EDX	鏡面	+	0.59	+	-	0.71	0.20	-	0.73	100.00	-	1.02	1654.0
SX-456	EDX	鏡面	0.81	26.71	0.80	1.07	37.60	3.64	0.89	1.14	100.00	0.17	3181.0	
SX-456	EDX	鏡面	+	4.11	0.19	-	27.77	16.72	0.84	1.08	100.00	0.88	1844.0	
SX-456	EDX	鏡面	+	4.13	0.17	-	33.27	13.58	1.00	1.10	100.00	0.64	5.65	
SX-456	EDX	鏡面	+	2.88	+	35.97	8.01	4.51	3.82	100.00	0.38	1.41	1787.0	
SX-456	EDX	鏡面	+	0.78	+	15.12	-	0.19	0.83	100.00	0.40	1.71	2497.0	
SX-456	EDX	鏡面	+	1.03	+	18.82	0.95	0.33	0.87	100.00	0.40	1.00	4288.0	
SX-456	EDX	鏡面	0.18	4.87	0.11	-	88.82	0.89	0.84	0.86	100.00	0.98	6.00	

表1 蛍光X線分析結果

福岡市内では、これまでに古代以降の鏡は50例ほどが出土し、そのうち湖州鏡などを除くいわゆる「和鏡」は約半数を占める。しかし材質調査を行ったのは今回の3面が初めてで、この分野からのアプローチは緒に付いたばかりという状況である。今後これを機にデータの蓄積を進め、何らかの成果が得られることを期待したい。

参考文献

久保智雄1999『日本の美術3』No.394 中世・近世の鏡 至文堂  
 中野政樹1969『日本の美術10・11』No.42 和鏡 至文堂  
 早稲田光嗣1999『古代青銅器の流通と構造』鶴山堂  
 村上隆2000『蛍光X線分析における諸問題』『保存科学研究会2000-非破壊的手法による考古資料の分析・観察-』奈良国立文化財研究所

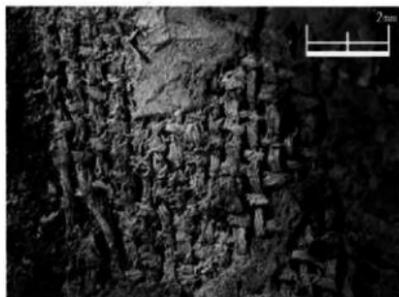


写真1 SX-153出土鏡付着麻布(約8倍)

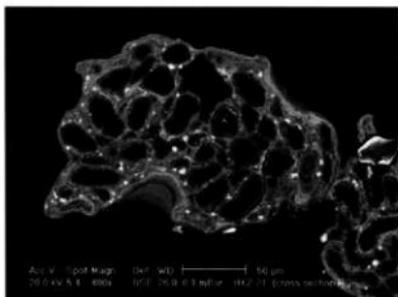


写真2 同左 纖維断面電子顯微鏡觀察像(約400倍)

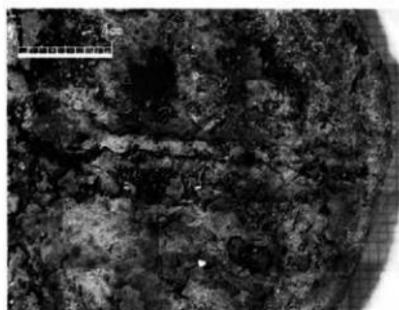


写真3 SX154出土鏡付着紐(約2倍)

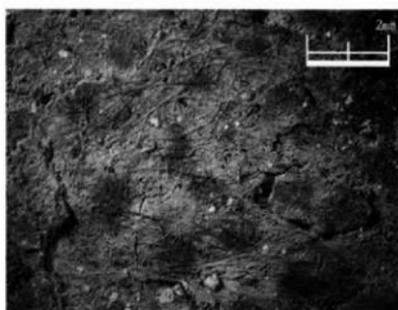


写真4 同左 付着纖維(約8倍)

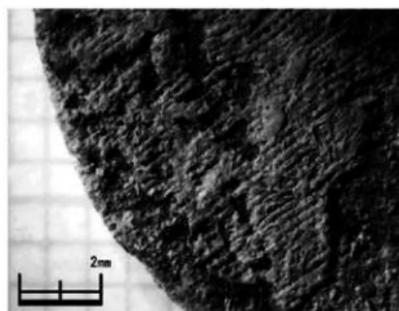


写真5 SX-165出土銅鏡付着織物(約8倍)

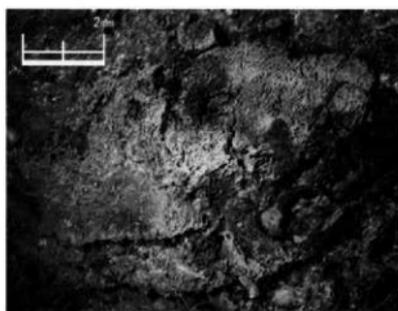


写真6 SX-456出土鏡付着纖維(約8倍)

# 図 版



調査作業風景



(1) 1面西側全景（北から）



(2) 1面東側全景（北西から）



(1) 2面西側全景(北から)



(2) 2面東側全景(北西から)



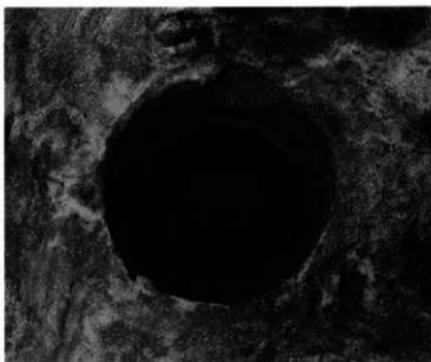
(1) SE006 (北西から)



(2) SE362 (北から)



(3) SE152 (南東から)



(4) SE152井筒 (南から)

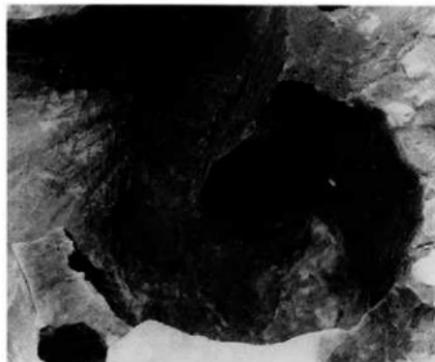


(5) SE452 (南東から)

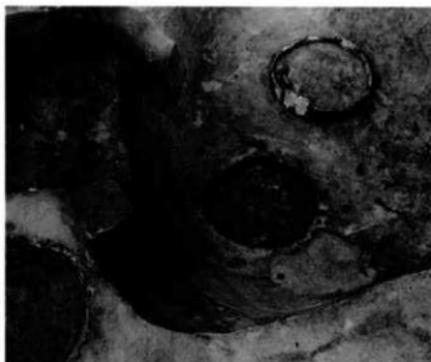


(6) SE455 (南東から)

図版 4



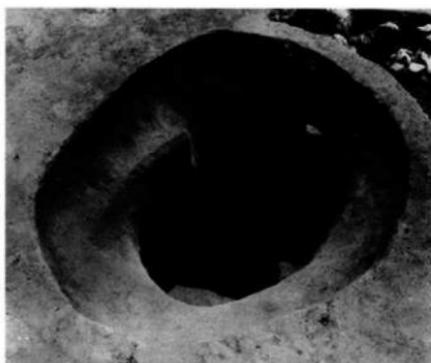
(1) SE459 (南東から)



(2) SE460 (西から)



(3) SK002 (北西から)



(4) SK003 (北東から)



(5) SK005 (南東から)



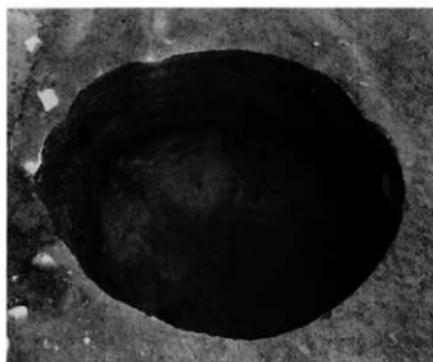
(6) SK352 (北東から)



(1) SK354 (北東から)



(2) SK355 (南西から)



(3) SK356 (北西から)



(4) SK358 土層 (北西から)



(5) SK151 (南から)



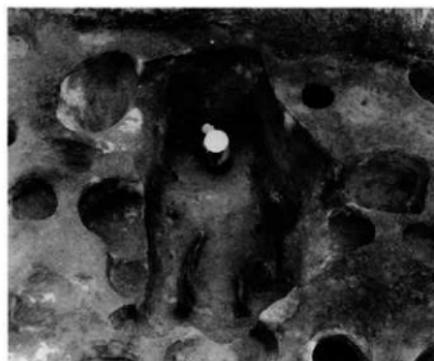
(6) SK159 (北西から)



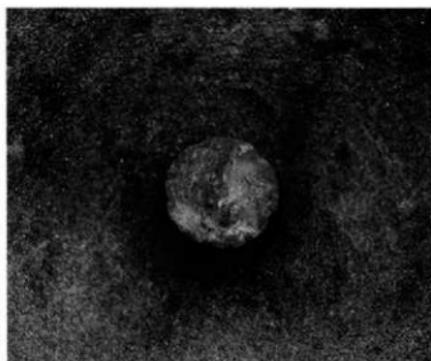
(1) SD164 (北西から)



(2) SX153 (南から)



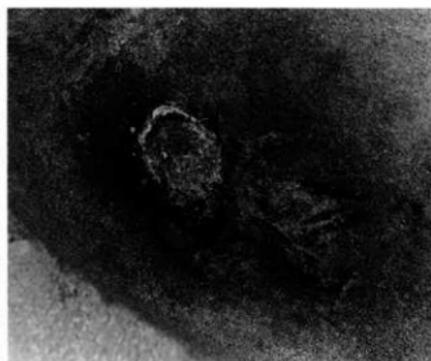
(3) SX153 (西から)



(4) SX153 銅鏡出土状況 (西から)



(5) SX154 (南西から)



(6) SX154 銅鏡出土状況 (南西から)



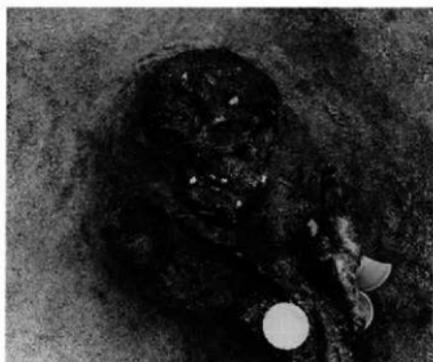
(1) SX165 (北から)



(2) SX165 (東から)



(3) SX165 遺物出土状況 (北から)



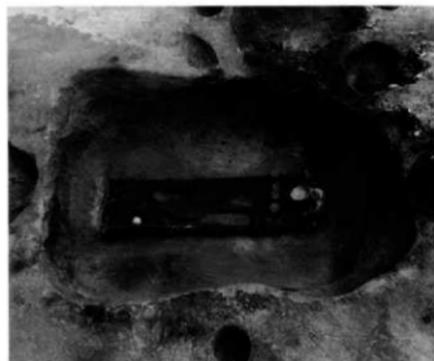
(4) SX165 人骨検出状況 (北から)



(5) SX165 人骨検出状況 (北から)



(6) SX165 人骨検出状況 (北から)



(1) SX456 (北から)



(2) SX456 遺物出土状況 (東から)



(3) SX456 銅鏡出土状況 (南から)



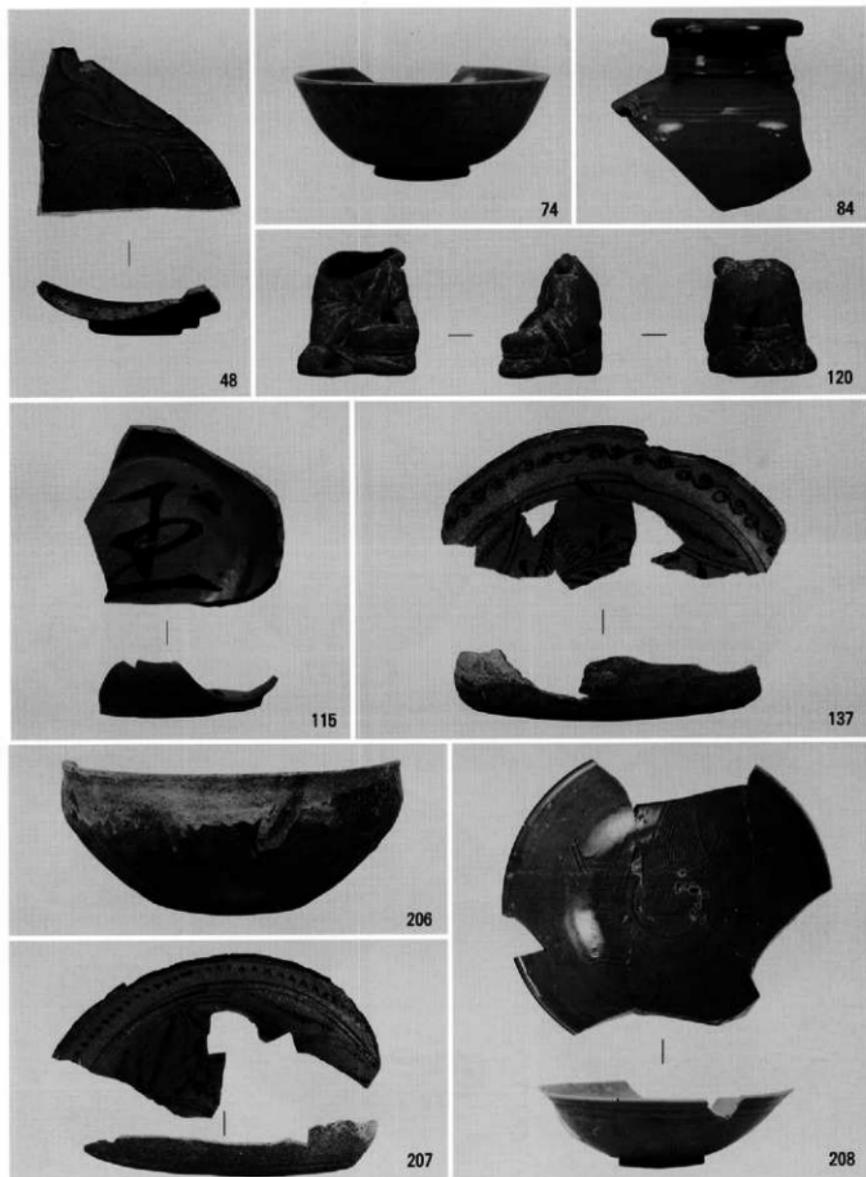
(4) SX456 銅鏡出土状況 (東から)



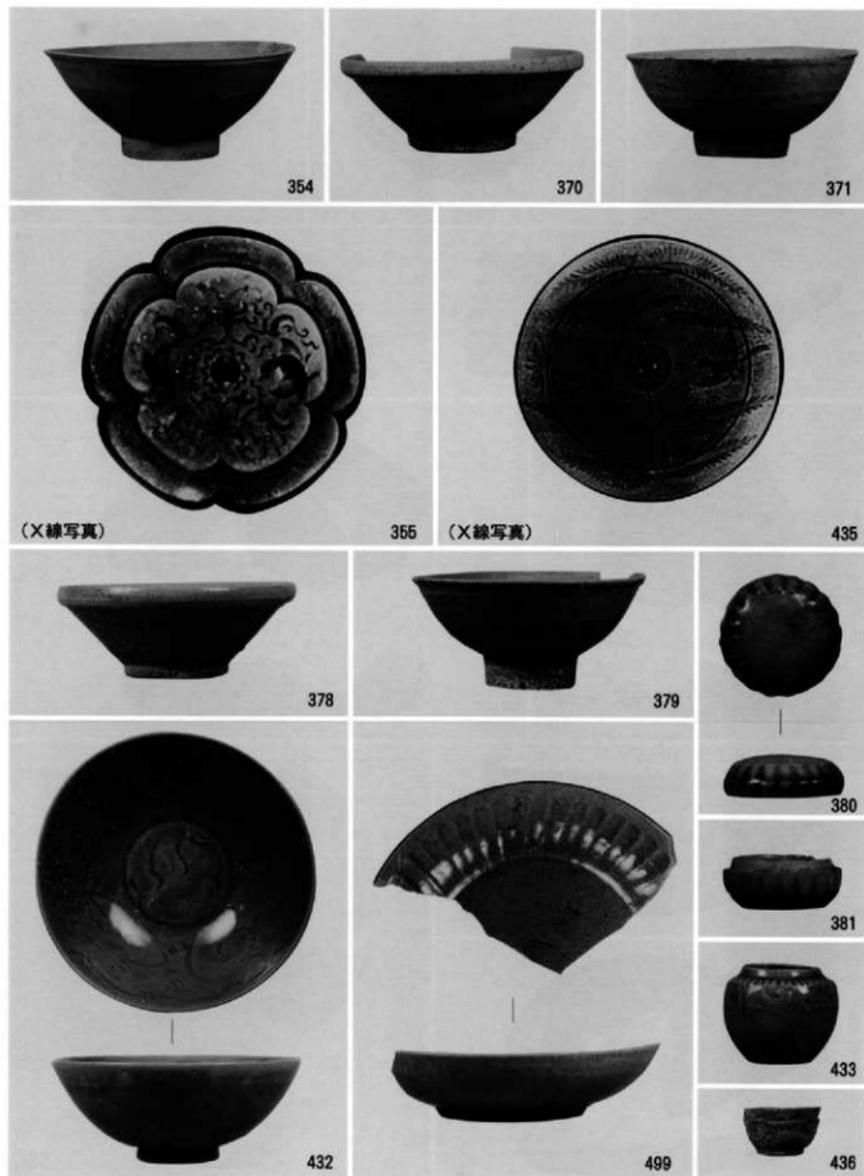
(5) SX457 (南西から)



(6) 調査区北側周辺風景 (南から)



出土遺物 I



出土遺物Ⅱ

---

箱 はこ 崎 さき 13

—箱崎遺跡第21次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第705集

2002（平成14）年3月29日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社あさひ印刷所  
福岡市博多区東比恵3丁目26-16

---

